
異形の子ら

Gさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異形の子ら

【Nコード】

N70980

【作者名】

Gさん

【あらすじ】

ボールシフト
地磁気反転が生み出した異形の子ら、新人類たちが紡ぐ青春譚。
高校生の春日波留はリアルとエリア、地上と地下都市を行き来しながら自分の世界を広げてゆく。ほのぼののコメディースF。

序章

書物は人を楽しませるために存在している。ただし『この世に絶対はない』という真理に違わず、異なるものもある。

この本は毒薬に似ている。読むだけで気分を害し、身体に異常を覚えさせ、病院に足を向けさせる効果を及ぼすのだ。この危険性に省みず、どの家庭でも蔵書に加えがちなのはどうしてなのだろう。

まあ、僕が密かに愛読している『家庭用医学事典』の事なのだが。

その中にこんな記述がある。何でも、乳児の発育段階は大概決まっ
つていて、首が据わる 寝返り ハイハイ お座り つかまり立ち
伝い歩き 歩行と進むらしい。つかまり立ちは生後十〜十一ヶ月
頃です、とある。

僕の場合は発育が遅く、一年半を過ぎても立てなかったと聞いている。その見返りとしてハイハイは予想を超える進化を遂げ、急速と急ハンドルを手に入れて、一旦動き出したら何か貴重な物を壊すまで止まらなかったそうだ。先祖伝来の花器を壊された祖母は「四つ足の生まれ変わりなのだろう」と嫌味をいったとか。当時の僕は傷付くだけの知性を備えていなかったが、代わりに母が悲しんだ。そしてある日、すつくと立ち上がって猛然と走り出したそうだ。

その時の母の驚きと喜びは一人ひとだったろう。だが、同時におかしな点も目についた。首が傾いているのだ。常に小首を傾げている。どうしてなのか原因が分からないだけに家族は不安だ。病院にも連れて行ったが、外科的な異常はなく「経過を観ましよう」となおざりな事しかいわれなかった。

時が過ぎ、医師の言の通り原因は究明された。三半規管がそれを司る脳に異常があると判明したのだ。乗り物酔い、高所恐怖症、激しく動き回ると眩暈がするといった症状が現れ、家族達は「成る程ね」と納得した。原因が分かれば皆の愁眉も開き、やがて興味を失

って行ったが、本人は至極不安である。幼い頃ならまだしも、身長が180センチになった今でも首を傾げている様は滑稽だし、スポーツも苦手だし、歩道橋が渡れない程の高所恐怖症に乗り物酔い。これで不安にならずにいられようか。でも家族は「それぐらいなら」と取り合わない。理不尽な話だ。

『洪波期』以降、生まれつき何らかの異常がある人は珍しくない。洪波期とは、人類社会と人類そのものが変革を迫られた時代の事である。

第一章

人生とは試練の連続である。少なくとも僕にとっては。

朝早くから叩き起こされ掃除をさせられているのだが、それはまだ良い。僕とて一家の長兄なのだ。家業を手伝う事の大切さは分かっている。しかし、昨日の春台風が落として行った木の葉はかなりの量だし、今朝の霧でくっついて、掃いても掃いても取れやしない。苦行を課すにしても、こんな陰湿なタイプは勘弁して頂きたいものだ。

そんなに広くない境内だけれど、一人で掃き清めるのは重労働である。二の鳥居から神門まで掃いただけなのに、もう疲れている。これから神門を潜って正面の拝殿前、左手の社務所と摂社の方、更に右手の青龍殿へと掃き進まなくてはならない。気が遠くなる。

コイツらが憎らしい。さっきから遊び回っている弟どもだ。狛犬の辺りで何かしていたと思ったら、今は手水舎で水遊びだ。ここは兄として苦言を呈さねばなるまい。

「お前達、遊んでいないで仕事をしなさい」

双子の弟、カイが立ち止まって振り返り、冷静に応える。

「兄上、それは素早くお勤めを終わらせた我々への嫉妬の言葉でしょうか？ それとも敢えて最も困難な作業に従事している兄上自身への苛立ちを我々にぶつけたいという青春の一頁的言動なのでしょうか？」

理屈っぽい言い回しで凶星を突かれました。これでは兄の威厳が保てないではないか。

「お勤めが終わっている事は分かった。しかしながら、困難に直面している兄に対して何かいう事はないかな？」

「ほー、我々が如何に比較的楽な仕事を仰せつかったか、その交渉

手段を知りたいという訳ですね？ その話はリクに聞いて下さい」
そうじゃなくて、兄上手伝いましようかの一言が欲しいだけなの
だが……

双子の兄、リクがきよとした表情を見せる。

「俺が？ 何を話すの？ 今朝は何となく狒犬の顔を拭いてやりた
かったんで、父上にそう話したただけだけど」

カイがにやりとして続ける。

「そして私はその発言を止めなかった、という訳です」

昨日の春台風、そして境内の状況からして今朝は何か仕事を言い
付けられそうだと判断し、それなら楽な仕事を自ら提案する事によ
ってその困難を回避する。一方、父とすれば七歳の子供が殊勝にも
お勤めをしたいと願い出た事に感激こそすれ断る理由もなかった、
という訳か。カイの策士振りには感心するが、その能力は家庭外で
発揮して貰いたいものだ。

しかしこの二人はまだまだ。妹のソラに至っては見掛けもしな
い。未だ寝汚くしているのだろう。幼い頃はいつも纏わりついて鬱
陶しく思っていた妹だが、中学生になつてからは滅多に口を利かな
くなった。逆にこちらが厭まれているらしい。しきりにダッコやオ
ンブをせがまれていた頃が懐かしいものだ。この前、久しぶりにダ
ッコをしてやろうと思ったら、ありとあらゆる呪詛の言葉を聞かさ
れた。こうして人は二ヒリストになるのだろう。

とにかく父は女どもに甘過ぎる。宮司としての資質に疑問を持た
ざるを得ない。

でもまあ、綺麗になつた境内を見れば気分も晴れる。霧で弱々し
かった太陽も照り出している。薄らと汗をかいたところで仕事は終
了。毎朝は勘弁して頂きたいが、風の強い日の翌朝ぐらいは早起き
して、掃除の手伝いをするのも悪くはない。

ようやく景色を眺める余裕ができた。小高くなっている神門から

は海が見える。風の海から立ち上る靄が天の橋立を包み込んでいて、生成のカンバスにすつと一本、松葉色の弧を引いた様だ。正しく『天に架かる橋』である。こんな景色が拝めたのも早起きしたお陰だろう。最後は拝殿にお参りし、清々しい気持ちで食卓へ向かう事にした。

当家では古式ゆかしく、家族全員が揃って食事を摂る。

屋敷は神社の裏手にあり、本殿と競える程古く、ちょっとした地震や台風が致命傷になりかねない造作になっている。伝統的な日本建築であり『3LDK、ロフト・バルコニー付き』とかそう言う表現をするなら『4・居間・土間、屋根裏・縁側付き』だろうか。匂い立つ程に熟成を極め、それなりの味を醸し出している。特に春は良い。家のどこにいても陽光の暖かさや風の薫りを感じられる。隙間が多いと評する向きもあるが。

自分の名前が『ハル』だからという訳じゃないけれど、春は好きな季節だ。名付けた祖母にその意味を聞いた事がある。曰く「冬に生まれたから『フユ』と名付けられた悔しさを誰かに分けてやるべきだと思ったから」だそうだ。どうせそんな理由だろうと思っていたが、本人には秘密にしておいて欲しかった。

さて、居間に家族が揃った。

父は日の出と共に神事を済ませ、今は新聞なぞ読んでいる。毎朝の事なので尊敬に値するが、母はもつと早起きして御贄を拵えたりしているのだ。どちらをより尊敬すべきかは自明の理だろう。それ以外にも炊事、洗濯、掃除と母の仕事は多い。

祖母はいつもの如く上座にどっかりと腰を据え、ひとり食べ始めている。この家で祖母に文句のいえる人はいない。そんな事をすれば、十倍になって返ってくる事を皆知っているのだ。

妹はまんじりとして食卓に突っ伏している。弟達は配膳を待ちきれない様子だ。

今朝の餐は、真鰯を糠で漬けた郷土料理『へしこ』を焼いたものに菜の花のお浸し、浅蜷の吸い物、芥子菜の浅漬け、それに炊きたてのご飯である。

「頂きます」もそこそこに、弟達は競って食べ始める。妹は半ば眠りながら咀嚼している。意外と器用な奴だ。

僕も箸を進める。芥子菜を手塩皿に取り、摺った生姜を上に乗せ醤油を数滴垂らす。それをご飯に乗せて口へ掻き込むと、生姜の香りと芥子菜のピリツとした風味が実に何ともいえない。そして後は猛然と食べ進める。

母は家族達を見渡して満足そうにしている。父も珍しく機嫌が良い様子だ。

「皆、今朝はお勤めご苦労だった。ハルはきちんとお参りもした様だな。重畳な事だ」

祖母がへしこに齧り付きながら口を挟む。

「何もお参りした事が偉い訳じゃない。何かに畏れを抱く事、その心根が大切なんだ。尊大にならずに済むだろう」

母が笑顔で続ける。

「早起きは身体に良いのよ。お腹が空いて朝ご飯が美味しくなりますからね」

父は元の無口な父に戻ってしまった。

真理はいつも女性が持つている。我が家では特に。

当家は神社を経営している。日本三景『天橋立』に程近い小社で、宮司の父と女性神官の母、それに斎女と名乗る祖母の三名による家族経営である。ちなみに『斎女』は正式なものでも何でもない。大神社においてはそのような役職を置いているところもあり、祭事で舞いを奉納する様な、うら若く清けな少女がなる役どころだったと思うが、別に法律に抵触する訳ではないという理由で名乗っているのはこの人だけであろう。しかし、そんな指摘を本人にしてはならない。絶対にだ。

神社経営は意外と大変な仕事である。仕事に終わりが無いし、何より人手が掛かる。今朝も掃除に借り出されたが、子供達もよく手伝わされる。しかし感謝しなくてはならないだろう。今は民間神道の信仰が流行っているご時世なので、こうやって一家が楽に生活を送れるだけの収入があるのだから。

食事を終えて自室へ。

廊下の端にある角度のきつい階段を登り、屋根裏部屋へと上がる。お宝がガラクタか判別できない品々が雑然と置かれた物置の隅。僕にとってはここが世界への入り口だ。

さて、高校生としては学業が本分である。しばし個性的な家族と別れ、登校する事にした。

学校に到着すると、案の定一番乗りである。

まだ誰もいない教室。パイプと合板でできた机が整然と並べられている。真新しいラミネートの床が小気味良く靴を鳴らす。正面には大きな黒板。スライド式で上下二段に分かれていて、ガイダンスの時の板書がまだ残っている。

入学式は行われなかった。生徒数が僅か三十名の新設校であるし、大仰な事をする必要も余裕もなかったであろう。その代わり父兄同伴で入学ガイダンスが行われた。担任のテツタ先生は真新しい黒板に対峙して、おもむろに白墨を取り出し、その一筆目からポツキリと折って笑いを誘っていた。極端に筆圧の高い人で、文字も大きく角張っている。真面目な性格が現れた板書だ。

窓を全開にしてみる。薄い無地のカーテンがふわりと揺れて、教室に静謐な空気が入り込む。窓枠に両手を着いて顔を出すと、校庭では主役がソメイヨシノから八重桜へと代わりつつあり、仄かに甘い香りをさせている。

早く教室にきたのには訳がある。席は決められていないので早い者勝ちなのだ。こんな晴れた日は窓際に限る。流れる雲の情景を眺

めるだけで一日潰せそうだ。

確保した席に満足して頬杖を突いていると、実に心地良い気分に満たされる。ここで眠ってしまったらどんなに幸せだろう。何でも自由なこの世界にあつて、それだけは許されない。眠れば現実世界に引き戻されてしまうのだ。これは大いなる欠陥といえる。

遣る方なく、ばやけた頭で二番手が誰になるのか演算して暇を潰す事にした。

教室の隅に置かれたダンボール箱。そこから人の頭がぬつと出てきた。唯一この教室にエントリーできるアクセスゲートである。その証拠に『出入り口（仮）』と明朝フォントのポップアップが添えられている。空間同調に手間取っている様子からアキ君だろう。いつも二番手は彼なのだから考えるまでもなかった。

頭部の同調が完了した時点で、彼が口を開く。

「考えられない。また負けてる」

「あくまで一番に拘るんだね」

「当然だろ。このままじゃ俺がお前よりも劣ってるみたいだ」

「そんな事、誰も思わないよ」

「何か隠してるだろう。狡い事でもしてるんじゃないか？」

「それは君でしょう。他の生徒の内部時計を遅延させるスクリプトを仕掛けるなんて、見付かれば大目玉ものだよ」

彼はまだ訝しがっている。無理もないが秘密は明かせない。僕はプログラマーの残した裏技バックドアを利用して、登校プログラムを無視して教室に入っているのだ。報告義務のある虫喰バグいの一つ。黙っているのは校則違反で、見付かれば何らかの罰があるかも知れない。しかしこんな便利なものは残しておいて、気に入った女子にでもこっそり教えて感謝されてみたいのだ。

「ほら、早く目的の席を取らなきゃ」

「そうだった」

彼は教壇の真ん前の席に倒れ込んだ。そんな席は誰も座りたがら

ないと思うが、彼には彼の事情があるのだ。

不意に誰かが僕の背中を突く。振り返れば、見慣れた顔がきょとんとした表情を見せている。

「ナツ君か。驚かさないでくれよ」

「皆様オハヨーなのです」

彼女が三番手なのもいつも通りだ。彼女とは小学校の一年から三年までと、中学校の三年生の時に同窓だった。都合四年間、僕が最も多く会話を交わした異性である。とはいっても他愛ない会話だけなのだが。

小学校三年の終わりに彼女が転校してしまうのが悲しかったのを憶えている。そして中学校で再会して、どんなに嬉しかったか。彼女は変わらずちっちゃくて色白で、上目遣いで見上げる様はとても可愛い。どうやら逢えなかった五年間で愛を暖めてしまったらしい。僕一人で……

毎朝、この三人で与太話するのが楽しみになっている。相手はどう思っているか知らないが、僕にとっては入学以来の数少ない友人だ。この二人がいなくなったら、僕も転校を考えるだろう。所詮、学校なんてそんなものだ。

アキ君がトラップを解除したので、他の級友達も登校してくる。ぺちゃくちゃと騒がしい連中もやってきた。流行りの高速言語で会話を交わしている女子グループである。彼女達の頭脳は会話に特化されている。いつの時代も人が集まるのは会話を交わすためなのだから、あながち間違いとはいえない。でも、数秒で文庫本一冊の情報量を持つ程の早口で、簡潔にまとめてしまえば数行にしかならない内容の会話をする必要性は理解できない、というかちょっと怖い。

この学校は西暦2100年頃の公立高校を模している。平成の雰囲気を残す佇まいで、シールドも施されていない昔ながらの校舎。

窓も大きく、高エネルギーの放射線が降り続けた『洪波期』前期の建物とはとても信じられない。常に曇が空を覆っていた山陰州ならではの存在だ。現実世界では廃校になったこの高校も、二百年を経てこの仮想空間で復活したという訳だ。最新のプラットホームにブログラミングされた最初の施設で、僕達はその一期生になる。一年間のランニングテストをした後、一般に開放されて現行のプラットホームと交代する。それまでは同窓の三十名と先生しかいない広大な世界だ。

すぐに三十名分の席が埋まる。何名かは自分自身ではなく、人形デコイに出席させている生徒もいるだろう。最新の市販ソフト『代返君』なら見分けがつかない。デコイの自作に拘る奴もいて、それを入学ガイダンスに出席させて見事にばれてしまった事があった。エントリীগートで誰何されて「ワタシハニンゲンデス」と返答してしまったのだ。以来、彼はニンゲン君と呼ばれたりしている。誰であろうアキ君なのだが、それですっかり人気者だ。現在、彼のデコイは改良を重ねて市販品の上を行く出来映えとなっている。政治家が使う様なオートクチュール品レベルだ。ただ本人同様、敬語と丁寧語がちょっと苦手だが。

予鈴が鳴る。

今日の教育制度では、出席日数はあまり重要視されない。生徒には病院や施設で暮らす者も多く、仮想空間とはいえ毎日出席できない人もいるからだ。それで各学年の年度単位さえ取得できれば進級・進学できる規定になっている。一定数の授業に参加し、且つホームワークを提出するか、独学でもライセンス試験に合格すれば単位取得となる。試験はいつでも、何歳でも受験可能だ。だから級友の年齢もまちまちで、想像もつかない。

本鈴が鳴って、ホームルームが始まる。

担任のテツタ先生が足取りも軽く登場する。小柄でちょこまかと

動く仕草は滑稽で、何だか憎めない先生だ。反面、その立派な顎を動かして話をし出すと妙な説得力がある。長く伸ばした揉上げを全力で頭に撫で付けているヘアスタイルがいじらしい。

ホームルームでは出欠を取り、昨日分のホームワークを提出する。仮想空間にある学校の特徴として、この種のルーチンワークは手早く処理できる。その内容は音声だけでは何をしているのか分からない。

「皆さんおはよう。全員出席ですね。ではいつも通りに……はい完了。特に連絡事項はありません。では、今日も一日頑張りますよう」

三十秒とかからなかった。

一限目始業のチャイムが鳴る。科目は『現代史?』である。

担当のケイコ先生はちよつと遅れて教室にきた。こうして軽くルールを破り、自分が疑似人格でない事をアピールしたいのだろう。彼女は眼鏡の奥に知的な眼差しを備えた才媛である。軽くウェーブした黒のロングヘアに色白の肌、ナチュラルなメイクに新色のリップが際立っている。今日の服装は、やや胸元が開いたシルクのブラウスにタイトなスカート。その下にはバックシーム付きの靴下で武装した細い脚がある。ただ、惜しむらくはその上に白衣を羽織っていて、腰のくびれとかヒップラインとか、肝心な部分を隠してしまっているのだ。そこがまた良い、という者も多いが。

アキ君はこの現代史の単位を取得済みなので、空でも眺めながら雲のアルゴリズムを解析していても一向に構わない筈だ。しかし実際は目を爛々と輝かせて先生を凝視している。彼には果たさなければならぬ使命があるのだ。

彼は現実世界では十二歳で、好奇心旺盛なお年頃である。ケイコ先生に多大な関心を持っていて、何とか先生の居場所を突き止めて、実際に逢ってみたいと考えているらしい。だから自分が真剣に授業

を受けていると見せ掛けて、先生のアクセスルート^{ハッキング}を調査しているのだ。その作業はどの席にいても効率的には変わらないだろうが、彼にいわせれば「一番近くだと攻めてるって感じがして燃える」のだとか。

ただ、彼自身も理解していると思うけれど、実物のケイコ先生も美人である保証はない。

仮想空間の黎明期において、人の姿は現実世界でのそれと違う場合が多かった。性別、年齢は誤魔化し放題。爬虫類になったり、自作のキャラクターに扮する事が流行ったりもした。しかし、ラインを切っている時間が短くなり、仮想空間での生活の重要性が増すに連れて、現実世界での自分の姿を忠実に再現する様になって行った。それが自分の個性を表現する方法として最も優れているからである。今では姿を変える事は恰好悪いとされている。無論、違法ではない。アキ君と同じく僕も現代史の単位は取得済みだ。これは家庭の事情ともいえる。現代史は民間神道隆盛の歴史でもある。僕にとつては寝物語に聞かされた数編の悲劇に過ぎない。暇に任せてペラペラと教科書を捲る。

西暦2051年、世界中の人々は満天のオーロラを目にする。緑と紫のカーテンが幾重にも夜空に浮かび、星々を隠したのだ。今でもその記録映像を観る事はできるが、実際に体験した人の心中は如何ばかりだったろう。辺境に住む人々は神の御技と畏怖し、情報化社会に属している人といえども、審判の日の到来に恐怖した。その輝きは太陽の一部が大气と衝突した結果であり、恐れるに値する何か^が舞い降りている証左でもあった。

太陽はこの惑星系にあつて、その全質量の99・8%を占めている。そんな巨大な存在を原始日本人が神と崇めた事は想像に難くない。女性神だと想像したのも言い得て妙だ。平素は地平に光を注ぐ優しい存在でありながら、怒り出したら憤怒の様相を呈し、突如として自分自身の一部を四方八方に投げ散らかす。それが太陽風なの

だが、その実態は秒速450キロで迫りくる高温でプラズマ状態の電子や陽子である。ヒステリックな女性は確かに存在するが、流石は神様、怒り方に遠慮がない。

それでも地球に地磁気がある頃は問題がなかった。ヴァン・アレオン帯にその粒子群を留め、極地にオーロラを出現させる程度で済んでいたのだ。しかし地球の地磁気は西暦2050年頃から急速に弱まり、やがて雲散霧消してしまった。そうなると貯まっていた粒子はゆっくりと落ち始め、新たな太陽風も遮る物なく降り注ぐ。落ちてきた粒子は空中の窒素や酸素にぶつかり、エネルギーを各種の電磁波に変える。見た目は美しいオーロラであっても、一定量発生してしまう高エネルギー放射線は人体に有害だ。それを二世紀にも渡って浴びせられては堪らない。

結局、2051年から2248年までがかかって、ようやく地磁気は復活した。今では磁気方位は逆転して、磁石のN極は南を指している。この二百年間を『洪波期』と呼ぶ。

今年は2301年。ようやく二四世紀を迎えたが、悲しい時代の爪痕は未だ色濃く残っていて、十分の一に減った世界人口もようやく上昇し出したばかりだ。

この『地磁気反転』は六十万年に一度ぐらいの頻度で起きてきたらしいが、時代によっては立て続けに発生したり、メカニズムはよく分かっていない。今回のケースは、長期に渡って地磁気を失っていた事、太陽の異常活動が頻繁に発生した事、環境破壊によるオゾン層の劣化が被害を大きくしたといわれている。

そんな中、日本は幸運だった。降雨量の多い日本海沿岸地域では空を雲が覆い、降り続ける放射線を反射するなり吸収するなりして大半を減衰してくれた。太平洋沿岸地域では、その豊富な資金を使って、巨大な地下都市を建設した。それでも有害な放射線を完全に避ける事は難しい。結果、癌患者の増大は元より、人の精や卵を傷付けて不妊症や死産を誘発した。艱難辛苦の末に子供を得たとしても、遺伝子的に親とは違う、厳密に言えばヒトとは異なる種である

事例も多発した。

多種多様な新人類、異形の子らの誕生である。

日本の幸運をもう一つ挙げるなら、その神道的文化に言及する人も多い。生まれてきた子の遺伝子情報が従来のヒトとは違っていても、それならばその子は新人類なのだとすんなり納得できたし、あまつさえどこか優れた能力があるのではないかと期待したりもした。つまり『異形の人に神宿る』という訳だ。これまでのヒトと同じ種の子をクラスC、クラシックとかクラッシーと呼んで可愛がったが、そうでない子も厚く保護し、同様に愛情を注いだ。

クラスC以外では、現在でも、クラスAとBが存在し、治療と介護の必要度合から区別されている。クラスBは日常生活が送れるまで一定の治療が必要な個性。クラスAは高度な治療や恒常的介護が必要な個性を指す。何れにせよ治療費は国家や州が負担し、場合によっては家族の生活費も保証した。人口増加と個の多様性維持は今や国是であり、クラスAやBの子は新人類の候補として厚く保護されているのだ。彼らは高い確率で特殊な能力を備えている。そのあり方は知能が高かったり、感情が豊かであったりと様々で、ヒトの多様性を体現する存在なのである。

一方、社会も大きく様変わりした。二百年続いた洪波期の間、自らの生命に向こう見ずな人を別にすれば、ひっそりと遮蔽物に隠れて暮らす事を余儀なくされたのだ。太平洋岸の都市圏を例に挙げると、まずは地上の建物を厚いコンクリートで覆い、建物同士を地下道でつないだ。しかし、それだけでは不十分である。やがて地下道と地下道が重なり地下街ができ、更には地下街同士が重なり地下都市になった。その増築とつなぎ合わせによる都市建設は非難の的で、日本の恥とまでいわれている。さながら迷路の様であり、移動にはコツが必要な程だ。都市住民達はそんな地下から一步も出ずに生き抜いたのだ。

当然の帰着として、地下生活者は広大な世界を欲する様になる。

上空にはどこまでも高い青空があり、見渡せば地平線や水平線が遠くに見える広々とした世界。手に入らないと思えばどうしても欲しくなるのが人の性である。しかし、幾ら望んでみても良い方法がある訳でもない。比較的安全な日本海沿岸地域に引越す者、防護服に身を固めて地上を散策する者など、個々の経済的状況に応じて対処するしかなかった。

やがてテクノロジーの発展を待つて、画期的方法が編み出されるに至る。

蛋白質で構成されたマイクロマシンを脳に入り込ませ、十二対の脳神経とネット回線が無線接続させて、仮想空間に自身が入り込める様にしたのだ。目を閉じて仮想空間に入れば、そこにはバーチャルな空や海や大地があり、走り回る事も大声を出す事も自由にできる。最初は精神病患者の治療の一環として採用され、閉鎖空間におけるストレス性疾患の治療に有効だと知れると、十年を待たずして地下都市での普及率が九割を超えてしまった。やや遅れて法整備がなされ、質・量・安全性が確保されると、地上を闊歩している日本海沿岸の住民もそれに倣った。そして洪波期中期の2150年頃には、学ぶ事も、働く事も、遊ぶ事も、人が人と知り合う事さえも仮想空間で済ませてしまう様になる。仮想空間はいつしか『エリア』と呼ばれ、人々の生活の場そのものになった。生理現象以外は、であるが。

エリアはいわゆるネットと同義ではなく、ウェブという広漠とした世界の一部に、エリアと呼ばれる人が直接入り込める部分があるに過ぎない。例えば、どこかの商店にある会計用端末に意識を飛ばしてみても、その中に入れる訳ではない。ただその端末がオンラインであれば、エリアからその内容を覗き見るぐらいは可能だろう。

エリアは基本的に現実世界を準えて構築してある。実際にある山や川、海といった地形を作り、そこに現実に近い感じの街がある。人々はそこに行って、歩いたり寝転んだり、風の匂いを嗅いだり、

頬に当たる陽の光を感じたりして過ごす。机に座って仕事をしたり、公園でデートをしたりもする。恋人同士で手を繋いだり抱き締め合ったり、現実世界と変わらない行動をとる訳だ。

このエリアには功罪の両面がある。病院や施設での生活を余儀なくされているクラスAやBの人々の活動の場として最適であった事。そして現実世界、つまり『リアル』で労働に従事する人々を差別する風潮が生まれてしまった事である。

もう一つの罪として、プログラムで脳内麻薬をコントロールする新種の麻薬が生まれた事も上げられる。ケミカル系プログラムなどと呼ばれているが、勿論薬物を使う訳ではない。脳に着床しているマイクロマシンから刺激を発して、特定の神経伝達物質を増幅させるのだ。政府機関や州警察は躍起になってその撲滅に努めているが、証拠が残らないので対処が難しい。学識者が警鐘を鳴らす前に普及した事もあり、完全に出遅れた形だ。仕方なく一定の使用は黙認されている。公共施設でも利用されており、エリア内の病院、学校でも普通に使われている。行くだけでハイになる遊園地なんてのもある。

洪波期が終わって半世紀。現在も『エリア』と『リアル』の二つの世界が存在している。人間の習慣はなかなか変わらない。今でも引き籠もりがちなものだから。それでも人々は少しずつ、外の世界へ出ようとしている。

世論は大きく二つに分かれている。一方は、これまで通りエリアを存続すべきとするエリア尊重派。もう一方は、エリアは仮の宿りに過ぎないのであり、今後は廃止の方向へと政策を転換し、リアルの充実を図るべきとするリアル開発推進派である。財源も人的資源も有限なこの国にあって、両者を公平に尊重する事は難しい。双方のいがみ合いは変革の時代には付き物である覇権争いの様相を呈し、混沌とした状況を生み出しつつある……

アキ君はまだ悲しくも微笑ましい努力を続けている。僕はいつ真

実を明かせば最も劇的か考えて楽しんでいた。

彼に秘匿会話を打診してみる。

「忙しいかな？」

「決まってるだろ。しかし難し過ぎるよ。たかがアクセスルートを調べるだけなのに、何でこんなに嚴重に隠匿しているんだ？」

ヒントでも出してやりたいが、今回は控える。

「ケイコ先生ってなんかイイよね。君が夢中になるのも分かるよ」

「現代史の教え方が好きなんだ」

「おっと、これは失礼。内面的な要因だったんだ」

「この科目は悲惨な内容が多いだろ？ 一方で日本が如何に幸運だったか強調する先生もいる。でもそれは下卑た考えだとは思わないか」

「唯一の救いはそこだと思うけれど」

「いや、日本も他の国と同様にもっと悲惨な目に合うべきだったんだ。この国の国民は相変わらずのんびり屋で、年中春みたく暮らしているだろう。もっと他人の痛みを知るべきなんだよ」

「厳しい意見だね」

「厳しいのは日本人だよ。ほぼ壊滅した赤道直下の国々を援助しなかったし、近隣の東亜細亜各国に対してもそうだった」

「自国の事で精一杯だったからね」

「援助も自国の事も、同様に精一杯やるべきだったんだよ。いずれ反動がくる筈だ」

「ケイコ先生もそんな事いつてたっけ」

「そう、先生は今後の事を見据えて現代史を教えている。いわば未来論だよ」

そういうと、彼は通信を切った。

彼の事を普通じゃないと思うのはこんな時だ。ただの生意気なガキだと思わせておいて、時に深遠な意見を聞かせてくれる。今の時代、頭の良い子供は多いけれど、大人だと感じる子供はいない。一般に子供の人格は平板に過ぎないからだ。

今度は珍しいルートで回線がつながる。ナツ君からの会話の申し込みだ。当然「喜んで」と返事をした。

「ハル君ひまそうです」

「ご明察。君はどうなの？」

「暇かな？　ねえ、ハル君のお家って神社でしょ？」

「そうだよ」

「神社って宗教？」

「勿論、税制上の優遇措置を受けているからね」

「ずるい」

「そういわれても・・・」

「じゃあさ、何か厳しい決まりとか教義とかあるの？」

「特にありません」

「モーゼの十戒みたいなのないの？『汝、隣人を貪る事なかれ』とか」

「えーと、確か読んだ事があるな。そんな感じのやつ」

「カッコイイ！　どんなの？」

「例えば、田んぼの畦を壊してはならない」

「もう田んぼなんてないよ。お米はバイオプラントで作っているんだから」

「他人の田んぼに種を蒔いてはならない」

「また田んぼ・・・」

「他人の田んぼを収穫してはならない」

「田んぼ以外にないの？」

「あるよ。お祭りをする場所に汚物を撒き散らしてはならない」

「どんな場所だって駄目だよ」

「生きた馬の皮を剥いではならない」

「剥ぎません」

「死んだ馬でもお尻の方から皮を剥いではならない」

「だから剥がないって」

「動物と性交をしてはならない」

「……ひよつとして馬つながり？」

「瘤のできる病気になってはいけない」

「ヘルメット被んなきゃ」

「掟を破れば厳しい罰が待っているのだ」

「どんな？」

「村八分にされる」

「その言葉、久々に聞いたよ」

「ちなみに神々の世界にも厳しい掟がある」

「そっちはカツコイかな」

「他の神様の田んぼを収穫してはならない」

「あー、もういいやこの話」

「つ、冷たい反応だね」

「今度はあたしの話を聞いてよ」

「珍しいね。拝聴しましょう」

「突然だけど、もし私がリアルで逢いたいっていったらどうする？」

「どうするもこうするもないよ。飛んで行くさ」

「高いところ苦手なのに飛べるの？」

「言葉の綾」

「実は割と近いんだよ、あたしの居場所。量子暗号通信でメールサーバーに落としておくね」

「へえ、本当に行っても良いのかな。だったら今から行くよ」

「待ってる」

彼女との回線が切れた。「量子暗号って政府の外交文書かいつと突っ込むのを忘れていたのが悔やまれる。早速メールサーバーを調べると、果たして量子暗号文書で届けられていた。侮れない奴。住所は『国立児童育成研究所内1200号室』とある。見事なアスキーアートも添えられていたが、こんな物を量子暗号で送った人物は二人とないだろう。

施設や病院で暮らしている生徒は多い。彼女もその一人だとは聞

いていた。いつも活発な彼女がベッドで横になって過ごしている姿は想像し難い。でもそれが本当の姿なら、そんな彼女にも逢ってみたいのだ。逢って「リアルな君も可愛いね」とかいつてみたい。児童研なら祖母の付き添いで訪れた事もある。随分昔の事で、あれは落成式だったか。IDを見せれば施設に入るまでは可能だろう。確かに場所も近い。我が家から地下鉄で十五分程だ。

洪波期の間、地上で暮らす事が可能であつた日本海沿岸地域の人々にとつても、外出がままならない事に変わりはない。許される時間が限られていたのだ。そんな地上生活者にとつて、人が人とリアルで逢う事は特別な意味を持っていた。相手が異性ならまじまじと観察して、更にはもつと直接的な手段で互いを確かめ合ったそう。とにかく滅多にないチャンスなのだから、いちいち恥ずかしがつてはいられなかったのだ。僕だつて当時であれば、初対面の女の子に「服を脱いでみせて」と叫んでいたに違いない。

今は外出しても身体に害がある訳ではないので、リアルでも普通に女性を見掛ける。それでも異性とリアルで逢うて事は、やっぱり特別な事に違いない。

こうしてはいられない。自分の席にはデコイを置いて、リアルに戻る準備を始めた。

リアルな自室に戻る

この瞬間がどうも苦手で、いつになつても慣れない。リアル感覚が復活してくると、世界がぐるぐると回り出す。右手の感覚が戻つたのを確認して、準備しておいた漢方薬を嚥下する。祈りにも似た時間が過ぎて、ようやくめまいが収まる。全く、難儀な身体だ。

さて、彼女の事を考えなければならぬ。彼女は「待つて」といつていた。できるだけ早く行くべきだ。しかし、ちゃんと彼女のところまで辿り着けるだろうか。施設に入る事はできても、受付係の疑似人格に入室を拒否される可能性もある。病院ならまだしも国

立の研究施設なのだから、ちゃんとアポイントを取るべきだった。でも民間人が研究施設にアクセスする事はできない。こうなると残る手段は一つ。

「お祖母様に頼るか」

祖母はちよつとした有名人である。あの時代に八人もの子供を作り、またその八人がそれぞれ四人以上の親になっている。それに信じられない程の長寿で、御歳八十八歳。新人類としての特徴も備えていて、勘が極めて鋭いし、人の考えている事がよく分かる。心底尊敬している僕としては、あの人程の奇人振りならばもつと思いつた特徴があつても良かったのと思つている。目から光線が出るとか、後頭部に後光を発光させる器官が備わっているとか・・・子供の頃、その話をして半年は笑われてしまった。以来、その話題はしない事になっている。

さて、祖母に逢うなら社務所へと向かわねばならない。境内を通るのが嫌なのではないが、服を着替えるのが面倒なのだ。宮司一家の長兄としてはジーンズにポロシャツ姿では恰好がつかない。白い浄衣に着替えて、浅沓を履いて表に出る。

境内は露店が並び、大勢の人でごった返している。いろんな食べ物臭いがして、喋り声が出て、賑やかな事この上ない。僕としてはもうちよつと凜とした神社経営が望ましいのだが、これも祖母の方針なのだ。本社と離れたところにある奥宮さえ人が立ち入らない様にすれば、毎日がお祭り騒ぎでも構わないし、楽しいし、儲かるというのが祖母の信念なのである。

できるだけ神妙な面持ちで玉砂利の上を静々と進んだ。途中、参拝にきている氏子さんに頭を下げられる。いつも思う事だが本当に申し訳ない。僕は単に高いところと乗り物が苦手なだけの、偉くも有難くもない平凡な高校生なのだから。

ようやく社務所に着く。奥の間まで進むと、執務室の障子を開け放ち、老眼鏡をかけた祖母が平机で物書きをしている。

「お祖母様！」

「おおハルか。どうした？」

「どうしたもこうしたありませんよ。どうしてジャージ姿なんですか」

「楽だから」

そりや楽でしようとも。しかもフードまで被ってしっかり紐を結んでいる。喋り難いだろうに。

「何か用事じゃなかったのかい」

「ああ、そうでした。お祖母様に『国立児童育成研究所』についてお尋ねしたくて」

そう聞くと老眼鏡を下にずらし、裸眼でギロリと睨み出した。僕は楚々と歩み寄り、祖母の前に正座をする。こういう場合は下手に出るに限るのだ。

「睨まれました」

「睨みました」

奇妙な事実確認の後、祖母は老眼鏡の位置を戻し、少し考える素振りを見せた。

「読んでらっしゃいますか」

「読んでいますよ」

今度は少し怖い事実確認になってしまった。僕は心を読まれて平静でいられる程、善良な孫ではない。正直に告白すれば「若くて美しい女性は全て私の物になれ」とか考えている健康な高校生男子なので、かなり恥ずかしいのだ。

祖母が少しニヤリとする。ああ、完全に読まれている。

少しの時間が過ぎ、祖母が口を開いた。

「ふん、良いでしょう。お前もそろそろ『クラスS』に逢うべきです」

クラスS！ 祖母の口からそんなSF用語が飛び出すとは思わなかった。タブロイド紙やオカルト本じゃあるまいし、国家が秘密裏に特殊能力者を保護しているなんて事があるのか？ それにしても

僕はそんな国宝クラスの人物に逢いたい訳ではない。彼女が、それこそ目から光線を出しても不思議ではないレベルの新人類だというのだろうか。祖母ですら単なるクラスCなのに？

思わず彼女が光線でゴキブリ退治をする姿を目に浮かべてしまう。

「お前は幼い頃から成長していないね」

また恥ずかしい内心を読まれてしまった。

「手筈なら私が整えておきます。あちら様のご迷惑になるのでお昼時は避ける事。家の夕飯までには帰ってきなさい。以上」

園児に言い含める様な指示を受けて、トボトボと自室へ引き上げた。どうせ指図されるなら、せめて高校生らしく扱って欲しい。あの人にとって、僕はいつまで経ってもハイハイしている赤ん坊なのだろう。

服装を戻し、ショルダーバッグを担いで『児童研』へ向かう。大鳥居を過ぎればすぐに地下鉄駅だ。

しかし彼女がクラスSだなんて信じられない。それは特撮ヒーローみたいな存在^{もの}ではないにしても、知能指数が極端に高いとか、学者か仙人の様な感じをイメージしていた。エリアでの彼女はごく普通の女子高生だ。よく喋った相手であり、鋭さを感じたり、ぶっ飛んだ様な印象は皆無である。むしろ恋愛対象として考えていた相手なのだ。会話ではちよつと言葉が足りない感じはあったが、それがまた印象的だったりして、他の女の子と少しばかり違うとは思っていた。でもそれだけだ。

情報機器^{ストレージデバイス}つてのは記憶したり分類したりするのが得意だから、バッグにある記録用端末を操作して、彼女との会話記録を取り出し、内容別に統計をとってみた。

案の定、感覚的な会話、つまり「どんな異性が好き？」とか「どんな音楽を聴くの？」とか「食べ物は何が好き？」とかばかりである。

僕がどう答えたかも統計をとる。これは恥ずかしい結果が出てき

た。彼女の問いに対し、極めて詳細に、時に感情を込めて滔々と語っている。それを彼女がずっと聴いて、時折笑ったり相槌を打ったりしているパターンばかりだ。これじゃ彼女に関して何も情報を得られないばかりか、好かれる要素もない。男女の会話なんて、べらべら喋っている方が聞いてくれている方に片思いをしているパターンしか存在しないのだから。

電車に揺られて時間を過ごすうちに、彼女が『クラスSかどうか』という前に『どうしてリアルで僕と逢うつもりになったのか』という疑問の方が大きくなってきた。リアルで逢うという事は、即子作りとはならなくても、互いにまじまじと見詰め合ったり、触ったりしてみましようという事であっても不思議じゃない。人柄とか家柄とか知識とかフィーリングなんて内面的な要素は、エリアでも充分に分かる。リアルでしか確かめられない事、つまり肉体的な理由がある筈なのだ、っていうかあつて欲しい。

電車は目的地の駅を過ぎてしまった。それも構わないだろう。時間はまだある。路線はここから終点の駅までは地上を走る。海でも眺めながら疑問の続きを考える事にした。

疑問にぶつかり、僕の中の父的人格と母的人格が顔を出してくる。父は僕が最も尊敬するペシミストであり、母は最も愛するオプティミストである。

父は宮司だが、ペシミストの宗教家なんてユニーク過ぎる。晩婚であり、独白によれば「生殖能力の減退を感じて、その焦りからようやく結婚した」らしい。友人から「お前は石橋を叩く事すらしないタイプだ」といわれるとか。

一方、母は真逆である。二十歳の時に四十歳の父の元へエイヤツと嫁いでいる。考える前に行動する人で、それでも考え抜いたのと同じ結果を得ている事が多く、しきりに周囲を心配させている。

僕はそんな二人のハーフなのだから、半分づつ遺伝的影響を受けている訳だ。だから僕の場合『何も考えずに行動してしまい、途中

あれこれ後悔し、結果どうにかなったり、ならなかったりする』というパターンを踏襲している。自分でも平凡過ぎると思うが仕方ない。

今回の件にしても成長は見られない。母的に考えて、彼女が本当に僕に好意を持っていて呼んでくれたとも思えるし、父的に考えて、ただ僕を笑いたくて呼んだのかとも思える。でも結局分からない。分からないなら逢ってみるしかない。そう結論づけて、折り返し目的の駅へと向かう事にした。

駅から『児童研』までは地下道を通る。歩いて五分程度だろうか。地下からは見えないが、地上三階建てで、窓のない灰色をした建物である。外壁は重金属とコンクリートの複合構造で、有害放射線どころかあらゆる電磁波をシャットアウトしている。地下は何階まであるか公表されていないが、ひよつとしてかなり深いのかも知れない。立派な施設の割に人の出入りが少なく、駅周辺に立ち並ぶ公共建造物の中でも地味な存在だ。

施設ゲート前に到着した。現在午後二時。時間も頃合いである。意を決して自動ドアの前に立ち、監視カメラにIDを提示した。頑丈そうな扉が「プン」と開く。何となく躊躇われるが、意を決して中へ入る。

屋内は予想以上に暗い空間だ。人声もない全くの無音。人工大理石でできた床が靴を鳴らすのみである。普通、公共施設のロビーといえば、年中出しっぱなしの傘立てがあつて、掲示板に無意味なポスターが貼つてあつて、無意味に大きなモニターで公共放送が流されていけるイメージがある。税金を無駄遣いしないのは立派だが、ここまでがらんとしていると何だか異様だ。

奥へ進むと無人のカウンターがあつた。

ぼつねんと受付端末が置いてある。モニターに軽く触れて起動させると、疑似人格らしき女性の立体映像が浮かび出た。何も喋ってこないで祖母の名前を告げると、果たしてアポイントはしつ

かり取れていて、1200号室までの移動経路が表示される。少し拍子抜けだ。でもまあ、祖母に感謝を。

1200号室は最下階の地下二階だそうだ。地上三階しかない建物の地下が何十階もあっては気味が悪い。京都市内じゃあるまいし、地の底といっても過言じゃない地下十二階まで潜らなくても良かったのは幸いだ。

案内された通りに進むことにする。ドアを幾つか抜けて、階段を下りる。

かなり奥へと進んでいるが、ここまで誰にも会っていない。無人化が進んだ時代ではあるが、これだけの施設を作っておきながら誰も利用していないなんて事があるのだろうか。

どうやら目的の部屋に到着したらしい。ここにも誰もいない。白一色の椅子もテーブルもないがらんとした室内で、立ったままリアクションを待つ事にした。

「きやは、リアルのハル君だ」

彼女の声がした。どこからかは分からない。

「来たよ」

「本当に首を傾げているんだね」

「三半規管が悪いらしくて、傾いているのが分からないんだ」

「うん、知ってる。アゴに髭の剃り残しがあるよ。それに背中からシャツが出てるし」

どうやら四方から僕をモニタリングしているらしい。一方的に見るなんて不公平だ。

「僕も君に逢いたいんだけど。こっちに向かっているの？」

「あつ、うん。実は歩けないんだ。でもあたしばかり見ているんじゃないよね」

前方のセラミックタイルが左右に開き、奥に通路が現れた。

僕は腕組みを解いて歩き出す。

通路にはエアカーテンがあつて、少し消毒薬っぽい臭いがする。

「ねえ、白衣とか要らないのかな」

「虫さえ付いていなきゃ大丈夫」

扉が開き、また白い部屋に出る。そして立体映像の、いつもの彼女が佇んでいた。

「姿があると落ち着くよ。それが疑似映像でもね」

「ごめん。脅かしちゃ悪いと思ってこれを出しておいたの。本物は左よ」

僕はゆっくりと、その方向を向いた。

そこには壁に埋め込まれた大きな水槽があり、一体の胎児が浮かんでいる。

「これが君か」

「そう、これがリアルのあたし」

臍の緒が上へとつながっていて、巨大な頭部が下になっている。前頭葉から頭頂部にかけて施術の後ろしきみがある。それでも女の子かどうか確認している自分が可笑しかった。

「僕達は同じ年の筈だけれど、君はまだマイナス何ヶ月って感じだね」

「そうね。でも生まれたのは十六年前。その頃、脳髓以外は全く未成熟で、今までかかってようやくここまで成長したの。やっと肉眼ができたから、まず観たいものは何かなって考えたんだ」

「それが僕だった？」

「そう」

「光栄です」

「ハル君なら大抵の事は驚かないだろうし、それに好きだから」

「へ？」

「あたしね、肉体って持っていなかったから、感覚っていうか、五感で感じるって事が理解できなかったの。それでハル君にいろいろ聞いて教わって、カラダって素晴らしいな、なんて、そんなにいろ

いる感じてるハル君って素敵だなんて思っていたんだよ」

合点がいった。それでいつも僕の与太話に付き合ってくれていたのか。肉体がないから……

「僕が良く見えてる？」

「かなりピンボケ」

「じゃあ近づいてあげよう」

水槽に近づいてターンしてみた。彼女は瞬きしない両眼で僕を観ているのだろうか。その焦点の定まらない、虚ろな瞳で。

「ありがと。少しは見易くなったかな」

「ねえ、君はまだ自分そこにいなきゃならないのかな」

「成長速度が速くなっているから、もうすぐ出られそうだよ。半年はかかるだろうけれど」

「それから呼べよな」

「眼が開いて、肉眼で見る感覚が分かったらもう我慢できなかったんだよ。早く逢いたくって」

何だか愛おしい。疑似映像の姿をちらと見ていった。

「水槽から出られても、すぐにあそこまで成長しないよね」

「うん、当分赤ちゃんだよ。でも普通よりは早く成長するみたい。首が据わったらダッコさせてあげる」

嬉しい様な、じれつたい様な気持ちになる。

それから僕は床に座って、彼女と長い会話をした。

彼女がクラスSである理由、それは彼女の特徴、つまり知能が高くて五感がない事によるらしい。五感がない代わりに新たな感覚を得る事ができたのだ。

彼女は情報の流れを見る事ができるし、機器類の動きを嗅ぎ取り、無機質の想いを肌で感じ、衛星の願いを聞いてやって、0と1の並びを味わえる。情報とそれを司る機器類との親和性が極端に高いのだ。

彼女にいわせれば、新人類の特殊能力は失う事から始まるそうだ。

生物全てにおいてそうなのであり、犬は色が認識できない代わりに鼻が利くし、コウモリは視力を棄てて音波を知覚できる能力を得た。では、働きの悪い三半規管の代わりに僕が会得したものは？ ああ、祖母にいわれた事がある。謙虚さだ。これは詰まらん。神々に嚴重抗議したい。

この施設の真の目的も聞いた。軌道上に浮かぶ情報衛星や通信衛星からもたらされる雑多な情報。その処理の効率化を研究する事である。どの情報が重要で、更に詳細な情報を得る必要があるのか、その優先順位をフィードバックして、より効率的な情報管理システムを構築する。それが彼女の仕事だったのだ。

優先順位の決定は人工知能にはできないといわれている。こればかりは人様の都合で決める事なのであって、人間が判断するしかないのだ。でも近づける事はできるだろう。何千、何万もの凡例を見せて、その模倣をさせて、間違いを正すという作業を繰り返し返せば。

彼女は新しい管理システムを構築した。自己評価型AIプログラムともいうべき代物で、勝手に進化してくれる画期的なプログラムである。そして彼女の肉体は急速に成長し出した。そこには作為が感じられるが、彼女にとって、そんな事は百も承知だった。

「この国にとって、全ての活動、全ての情報管理は『子を成す事』

『個の多様性を維持する事』のためにあるの。だから誰かが我慢しなきゃね。十六年遠回りしたけれど、子供だってまだ作れるし、丁度良い相手も見付かったしね」

「ひよつとして僕かな？」

「そうなの。あたしの二種の卵とハル君のXとYのどちらの精でも、互いの個性を存続させられる事が分かったの」

「そう……」

彼女は嬉しそうに喋っている。あどけない、コロコロとした人工デジタル音声で。ヴォイス

「ところで君の疑似映像だけれど、あれは全くの空想の産物かな」
「うつん、あれはあたしが成長した姿を算出したものなの。そんな

に誤差は出ないと思うよ」

「そうか。じゃ、結婚しよう」

「ぎゃー、嬉しい」

気泡がボコリと音を立てる。水槽の胎児が動いたのだろうか。

こんな奇妙なプロポーズは孫子の代まで自慢できそうだ。しかし、二人の個性が存続されてしまうとしたら、生まれた子供は五感に加えて平衡感覚までなくす事になる。可哀想な気もするが、その代わり得られる能力は神懸かりなものになるだろう。正しく世界に一人だ。

「さて、そろそろ帰るよ。何かして欲しい事はありませんか、奥様？」

「奥様だって！ ええと、それじゃあ、パンツを脱いで下さい」

「お断りします」

「お断りされました」

どうやら遊ばれているらしい。

「半年後にダッコさせてくれるんだよね」

「うん」

「その時にオムツを剥いでやる」

大音量の悲鳴や罵詈雑言を聞きながら、部屋を辞した。

帰路中ずっと、僕はニヤニヤしていたに違いない。疑問は全て解けたし、一足飛びに最終結論まで到達してしまった。

今夜家族に話そう。きっと皆、個性的な反応をしてくれる事だろう。

これまでも僕の事を好きだといってくる女の子はいた。リアルで逢った事もあるけれど、どうもしっくりこなかった。どの子も神社の御曹司という色眼鏡でしか見てくれなかったし、神社を経営する事を、まるで権力者の仕事の様に勘違いしている場合が多かったのだ。そりゃ権力者になりたい神官もいるだろうが、僕の理想は違

う。上手くいえないけれど、自分の主義主張を相手に押し付けるのが権力なら、そんな力は欲しくもない。

僕のやりたい仕事は、僕自身を幸せにしてくれるものが良い。家族と幸せに過ごす手段として仕事をするのではなく、仕事自体が僕や周りの人を幸せにしてくれるものになりたいのだ。それに、イデオロギーではなく、感じた事を判断基準にできる事をしたい。具体的に何をすべきかは全く思い付かないのだけれど。

彼女は僕の理想を体现する存在に思える。彼女は納得して国家の道具になっていた。それは、そうする必要があると感じていたからじゃないのか。そして自分の生命を賭してその思いに従った。そんな彼女を見習いたい。

それに、好きな女の子を0歳から知る事ができるなんて素晴らしい。

家に着くと、家族全員が食卓に着いて待っていた。少し遅れてしまった様子だ。

祖母が笹鰯の干物をバリバリと食べている。父は僕を一瞥し、眉を吊り上げて席に着く様に促した。妹は大人しく、席にちょこんと座っている。弟どもは僕が遅れた事を声高に非難した。

母はいそいそと料理を運びつつ、僕を見遣る。

「ちよつと遅くなるってお祖母様から聞いていましたよ」

「そうなのですか？」

配膳が終わり、父の号令で夕食が始まる。口火を切るなら早い方が良い。

「ところで、皆さんに報告があります」

「では聴こうか」と父。

「実は今日、プロポーズしてまいりました」

さあ来るぞ怒濤の様な反応が！

「・・・・・・・・・・」

どうした事か。皆無言だ。

はたと気が付いた。

「お祖母様！」

祖母はアジフライを箸に突き刺したままで外方を向いている。

「何だい、ハル」

「何だいじゃありません。僕が喋る前に話しましたね」

「自分で話をしたかったのかい」

「しなかったに決まっています。こんな面白い話、そう滅多にあるもんじゃないのに。どこまで話をしたのですか」

「どこまでって、そりやお前が恥ずかしいと思ってる事以外全部だよ」

「恥ずかしい事だなんて・・・」

祖母が箸を置いて、僕に耳打ちをした。

「ちゃんと確認した様だね。本当に女の子かどうか」

僕は黙るしかなくなってしまった。この人は千里眼も持っているのか。

その様子に父が反応する。

「何！ お祖母様から聞いた事以外にも、何かいえない様な、恥ずかしい事があるのか」

ああ、また祖母の術中に嵌ってしまった。けして侮れない人だと知り尽くしているのに。

「いえ父上。そんな事はない、ともいえます」

「天地神明に誓えるか」

「誓えません」

父は怒り、母は笑い出した。祖母は大いに満足している。弟妹達も笑っているので、僕は少し気が済んだ。

食後、父は縁側に移って御神酒を飲んでいる。僕は隣に座って酒肴を盗む事にした。

「父上、日本酒のツマミに桜餅ですか」

「どちらも売れ残りだ。どうだ、お前も一杯やるか」

「僕はまだ未成年です」

「婚約すると飲酒が許可される筈だぞ」

「されません」

「それに神社の境内に限れば、御神酒を飲んでも違法にはならない。信教の自由だ」

「それは憲法解釈上の立派な争点ですね。判例もないでしょうから、少しなら頂きます」

父の杯を受けて少し唇を湿らせた。父がポツリと話し出す。

「なあ。その人は良い人なのか・・・お前の事だから間違いはないと思う。お祖母様も母さんも賛成している。私達がその人と逢えるのはまだ当分先になるそうじゃないか。心配なのではない。少し不安なのだ。いや、それはやっぱり心配だという事なのだが、家族なら当然だと思わないか。この境内をヨチヨチ歩いていたらお前がもう・・・」

僕は父の隣で、ただ黙って・・・目を回していた。アルコールには極端に弱いのだ。臭いを嗅いだだけでも三半規管は機能を完全に放擲してしまう。今日はいろんな事があり過ぎて、父も僕もその事を忘れていた。

翌朝、自室の布団の中で目覚めた。靴下を半分だけ脱がしてくれているアバウトさからして、父と弟達が運んでくれたのだろ。朝食にはまだ時間があるので、急いで身を清め、新しい浄衣を着て奥宮へ向かう。

奥宮は巖座と祠だけで構成されている。本社から離れた場所にひっそりしており、立ち入りを禁止してある訳でもないのに、滅多に訪れる人もいない。その素晴らしさは近づいて初めて分かる。巖座の上に榊の亜種が群生し、幹は両手を広げる様に伸び、根は巨石を抱き込んでいる。そしてその姿を隠す様に祠がある。

この国と同等の古さを持つ弊社も、始まりはこの小さな宮であった。神話によれば、この巖は神々が天から地へ降りる際に使った梯

子の基礎なのだそう。だから、この宮が奉ずるものは天界へと通ずる空間なのであり、天の橋立そのものなのだ。

僕はしばらく佇んで、参拝し、辞した。昨日の報告のつもりで。

朝食を済ませ自室に下がる。安楽椅子に腰掛け、エリアへ行く準備を進める。八時前なので少々早い。登校する事にした。

棚にある無線ルーターの各種ランプが点いている事を確認する。机の上に水差しとコップを並べ、薬箱から目眩止めの漢方薬を出しておく。後は目を閉じて一連のイメージを辿ればエリアへと入って行けるのだ。

エリアの学校へ

教室に入ると、ナツがいた。

僕を確認するなり飛び付いてくる。

「ギュッとしてみて」

これは照れるが、意を決して『ギュッ』をやってみた。すると彼女は頭を抱えて座り込んでしまった。

「ギュッとする感じは少し分かるのよ。たまに臍の緒に抱きついてるから。でもギュッてされる感覚が分からない」

「そりゃそうでしょ。ところで、いつから来ているの？」

「二時間程前かな」

「この教室のプログラムって起動していた？」

「起動させた」

「どうやって？」

「えーとね、脇の辺りをくすぐるの」

「誰の？」

「サーバーさん」

「成る程ね」

さっぱり分かん。

「でも二時間前はちよつと早いんじゃないかな。僕はいつも八時に登校する事にしているから、その頃においでよ」

「うん。そうする。他の人って何時に登校しているのかな」

「え？ 君はこれまでどうしていたの？」

「アキ君にオンブして貰っていたの」

これは分かり易い表現だ。何となく想像できる。しかし彼も迂闊な事よ。

「本当はね、八時二十分にならないと登校できないんだよ。登校プログラム上の規制でね。ほら、朝のHRに昨日一日分のホームワークを提出するでしょ。それを友達同士で不正にコピーしたり、それがばれない様に加工したりする時間的余裕を与えないためにね」

「ホームワークって、旦那様はどうしているの？」

「その呼び方は嬉しいけれど、みんなの前で使っちゃ駄目ですよ。

あのね、デコイに授業を受けさせた時は、デコイがホームワークを受け取った時に解いてしまつて、いつもの僕の指定席に置いておく様にしてあるんだ。自分が出席した時は自分で解くしき。君はどうしているの？」

「んと、先生が見ると嬉しくなるものを貼つて出すの」

「それって全科目共通？」

「共通つていうか、一度だけ。後はずっと白紙」

これは凄過ぎる。どんなプログラムなのか見てみたい。きっと理解できないだろうが。

「その方法でこれまでライセンスを取ってきたんだ？」

「ううん。ライセンスは全部持っているの」

「全部つて？」

「大学院の修士課程まで」

「左様ですか」

「偉い？」

「偉過ぎです」

「びっくり？」

「驚愕です」

彼女を娶ろうなんて、畏れ多い事に思えてきた。というか、子作りの相手にしようなんて使い方を間違っている。『子を成す』のが人生至高の目的である現在でも、彼女は別格だ。

「八時から八時二十分までってさ、短くないかな」

「奥様は何をなさりたいのでしょうか？」

「エッチな事」

ええええ！ 内心の驚きと喜びは急いでしまい込む。

「あのね。バーチャル空間での体感ってのはリアルで感じた事のリピートでしかないんだ。リアルで未経験な事をエリアでやってみても何も感覚は得られないんだよ。希に間違った感覚を引き起こす事もあって、混乱の元にもなるしね」

「でも、それだと十年以上待たせちゃうよ」

沈んだ。ノックアウト。リアルに残してきた身体が心配だ。鍵のない部屋だから、誰かに見られている可能性だってあるのに。

「嬉しいよ。でも今日結論を出さなきゃいけない問題でもないし、ゆっくり考えるさ。二人で」

「そだね」

彼女といれば退屈な人生にはならないだろう。昨日結論を出して良かった。感じたままに行動して、それが最高に良い結果を出したなら、これ以上幸せな事があるうか。

「さて座ろうよ」

「あたしが席を決めたいな」

「伺いましょう」

「あたしの席と先生のいる教壇に直線を引きます」
「ほうほう」

「そしてその直線上に旦那様が座るのです」

「そのココロは？」

「そうすればあたしは先生を見ている様な振りをしながら旦那様を見続けられるのです」

「却下します」

「ええーっ」

「今度は僕の案を提示します」

「ではハルくん」

「国会みたいだね。我が党は画期的な案を考えてきました」

「期待しましょう」

「僕はいつもの窓際の席に座ります」

「ほーほー」

「そしてナツはその前に座ります」

「しかしてその効能は？」

「効能って温泉かいっ。えーと、そうすれば僕がナツの背中を突いたり、頭をコツいたりしてイジめられます」

「突かれるのも、コツかれるのも分からないもんね」

「じゃあ、脇をくすぐる」

「サーバーさんみたいに？」

「そう」

「それじゃあたし、全部旦那様の言いなりになっちゃうな」

「えっ。脇をくすぐるってそんな効果があったんだ」

結局、僕の案を通して貰い、彼女が前に座るっている。エリアじや最強なのに、心配な存在。じっと見ていないと安心できない。

八時二十分になった。エントリー開始時間である。しばらくしてダンボール箱から人影が現れる。今日は幾分、同調時間が短いアキ君の登場である。

例の如く最前列の席へと突進する。

「あれ、おっかしーな。レコードタイムが出てる。しかも今日は三番手だし」

彼女をオンブしていない分早く同調できたのだろっつ。

僕達はただ笑っていた。

「どうしてナツさんがハルの奴と一緒にいるの？」

「それは合体ゴボゴボ」

急いで口を塞ぐ。やはり前に置いて正解だった。

「偶然だよ。別に気にする事もないさ。レコードだって？ 凄いじゃないか」

「何か誤魔化そうとしてるな。俺にだって分かるぞ」

しまった。流石は天才児。こうなったら奥の手を出すしかないさそうだ。僕はデータを彼に差し出した。ケイコ先生に関するプライベートルな情報全てを。

彼はそれをつかみ取り、信じられない程のスピードで確認し出した。

「……………俺、今日は帰る」

幼気な少年にはキツかっただろうか。彼がまたこの教室に帰ってくる事を祈りたい。

第二章

一家の長兄としては、弟妹達の教育係を務めるのは当然の責務である。しっかりとお勤めをさせて、神社経営の何たるかを教えなければならぬ。よって、三人を拝殿に呼び出したのだが、妹のソラは「今日は日が悪い・・・」と不吉な一言を残して去ってしまった。女の子にとって十三歳は難しい年頃なのだろう。そっとしておく事にして、というか怖いので避けて、弟達の面倒を見る事にした。この七歳の双子、リクとカイは外見が瓜二つな一方、性格は真逆だ。すぐ熱くなるリクと冷静なカイ。個の違いを尊ぶ現代日本に相応しい双子児といえる。強烈な個性同士、ぶつかってばかりいるが、一旦結託すれば無類の強さを発揮する。

拝殿の中はわりと広い作りになっている。狭く感じるとすれば、それは神饌やお飾りが多いせいだろう。中央には白木の御棚があり、同じく白木の三方の上には米・塩・水・酒などの御贄が備えられている。御神灯が灯され、両脇の榊立てに榊の枝が飾られて、正中の御神鏡に青葉を映している。

今日はこの拝殿の板間を掃除する事にした。二人が結託してサボろうとするものだから、いつの間にか僕が布巾を持って、彼らが偉そうに指示を出したりして全く気が抜けない。「終わったらここで遊んでも良い」となだめたのが功を奏して、ようやく兄の地位を取り戻し、作業を終えた。

「二人共、お勤めご苦労だった」

「兄上、ここで遊んでも良いのですか？」とカイ。

「うむ、許可する」

リクが元気よく手を上げて発言する。

「じゃあ『稲妻バロン刑事KKK』ごっこをする」

「何だその何とか刑事ってのは？」

「えー、知らないんだ！」

「教えてくれ」

二人は目を輝かせながら早口で喋り出した。

「あのね、友情タコメーカーが毎分二万回転を超えると蛹になるんだ」

「でね、蛹はめっちゃ弱いんだ。お尻をクネクネするだけで、でも蝶になるとチョー強いんだよ」

「それからクライマックスになるとゴッドファザーを呼ぶんだ。そうすると雲の上から暴力団の親分が現れるの」

「その親分が戦いの審判をしてくれるんだよ」

何だか聞いた様な聞かない様な話だ。

「そのどこが面白いんだ？」

「毎回必殺技が違うんだ。技の名前のインパクトで勝敗が決まるんだよ」

ちよつと興味が出てきた事は隠しつつ、審判をしてやると申し出た。厳しい裁定で兄の威厳を見せつけるのだ。

紅白の小旗を持ち、両者の間に座って号令をかける。

「先攻リクから。始め」

一回戦

リクは主人公に成り切って、奇妙なポーズを決めている。

「行くぞ。ハルマゲドン！」

「陳腐。0点」

リクは厳し過ぎると非難したが、僕は動じない。これが人生の厳しさなのだ。

カイは前髪を横に掻き上げ、不敵な笑みを浮かべている。

「次はボクだ。喰らえ、アメリカシロヒトリ！」

「毒虫攻撃か。これは五点。カイの勝ち」

小旗でカイを指し、一回戦の勝敗を決した。負けたリクはおでこ

にシッペを喰らう。

二回戦

やや涙目をしたリクが叫ぶ。

「ちくそー、審判の傾向はつかんだ。次こそは勝つ。怪蝶ヨナクニサン！」

「真似はイカン。0点」

「イジメだ。抗議する」

「却下」

「ボクのオリジナリティー溢れる技を受けよ。御成敗式目！」

「ツボです。十点。カイの勝ち」

リクはまたシッペを受けなくてはならない。「同じ場所はヤメテ」と懇願している。

三回戦

リクのおでこがはつきりと赤くなってきた。

「なにおー、オイラだって。壱田永年私財砲！」

「おお、ちよつと分かり難くかったが『砲』のところが好き。十点」
「やリーっ」

「ふふ、ボクの返し技を見てから吼えろよ。小倉抹茶スパゲティー大盛り！」

「ハイカロリーそうで怖い。十五点。カイの勝ち」

カイは誇らしげに笑い、リクは恨めしそうにこちらを見ている。

四回戦

リクはおでこを摩りながら慨嘆する。

「ああ、オイラまだ一勝もできてない。これならどうだ。十七条憲法！ 篤く三宝を敬え。ぐあっ」

「ふっ、自爆したな。とどめだ。GHQ！ ギブミーお賽銭。おうっ」

二人とも自爆し、仲良く倒れ込んでいる。

「聖徳太子も進駐軍も神社の敵ではない。味方と思わば味方なのだ。見方の問題よ」

「はーっ」

二人を平伏させ、満足したところで解散した。

弟達はずっと学校を休んでいる。エリアでの生活に喜びはないそうだ。もっぱらリアルで本を読み、集まって遊んでいる。二十世紀後半頃の子供のあり方が、本来の自然な子供の姿なのだろう。州でもリアルに小中学校を作ろうとしている。あと数年もすれば一部の子供達はそこへ通う事になる。でも病院や施設から出られない子供達はどのようなのか。その子供達はもうクラスCの子達と会えなくなるのだろうか。

二人とも成績は良いのだから飛び級する实力はあるのだけれど、年度初めに一年分のライセンスを取ってしまったて、後の期間はリアルだけで過ごす生活をしている。近所の子達も巻き込んで、皆がなるべく早くライセンスを取れる様に、勉強会をしたり個人授業をしたりして仲間をどんどん増やしている。

彼らは今、リアルで自分の身体を動かしたいのだ。喧嘩して泣いたり、無茶をして怪我をしたりしたいのだ。そんな事は幼い頃にはできないし、エリアでは不可能である。彼らの願いは子供として当然の権利ともいえる。クラスAやBの子達の事を考えるのは、彼らの成長を待つてからでも遅くはない筈だ。僕は応援したい気持ちでいる。

昼食である。食卓には冷えた出石蕎麦が山盛りになっている。頂きますの挨拶の前に、祖母が食べ始めながらばやく。

「蕎麦は更級の方が好きだね。歯応えがあつて」

「頂きます。いや、蕎麦は喉越しです。歯応えじゃありませんよ。」

それに田舎蕎麦の方が香り高いですし」と父。

「シロウトだねえ。八月の蕎麦に香りもへつたくれもあるものかい」
そういわれてしまうと、父は眉を吊り上げ、ただ黙々と咀嚼するばかりとなってしまうた。山陰州の妖怪といわれる祖母と、丹後半

島のアイスクリームの木の匙と家族から評されている父とでは格が違い過ぎたか。

母が九条葱と烏賊下足のかき揚げを持ってきた。

「お祖母様、この蕎麦は氏子さんから頂いたご進物なのですよ」

「ウチの嫁は偉いね。蕎麦はアレでも、つゆも天麩羅も旨いよ」

「有難うございます」

流石、祖母に気を遣わせるなんて母にしかできない。

父は二人が仲良く笑っているのが少し気に喰わない様子だ。二人が反目し合ったら一番困るのは父自身であろうに。この人は何も分かっていない。

尊重してくれといった眼差しで子供達を見詰める父。四人は揃って横を向いた。

木匙はなくては困るが大切にはされない。そしていつも哀愁を帯びている……

午後から『児童研』に向かう。ナツに逢うためだ。七月七日にある水槽から出て、丁度一ヶ月。ようやく面会が許されたのだ。身体をできるだけ清潔にし、爪も切つて、今日という日に備えた。

施設内は医師や看護師が入り、この前と打って変わって明るい雰囲気になっている。防菌スーツか白衣を着るものと覚悟していたが「手の殺菌だけで良い」といわれて嬉しい誤算だ。白衣にマスクじゃ僕だと分からないかも知れない、と思っていたから。

彼女は地上三階に新設された育児室にいる。大きな空間の中央に小さなベッドがぼつんとあるだけの部屋。確かに贅沢だがこれでは寂しい。

ベッドを覗き込むとナツが微笑んでいた。青いパイル地の赤ちゃん着が涼しげで可愛い。しきりに何か喋ろうとしているが、よくは分らない。お腹の辺りを突くと、背中を海老反らせて喜んだ。

後頭部を慎重に持つて抱き抱える。予想以上に軽くて怖い。頬と頬を合わせて「これがギョッだよ」と囁いた。

ナツは赤ん坊なのに、声を出さずに涙を流している。僕はもう一度、ゆっくりと抱き締めた。

ベッドに戻し、人差し指を握らせながら話をする。医師の話では「喋る事はまだできないが、聞き取る能力は備わっている」との事だ。

「ここ二ヶ月の間、エリアでも君と逢っていないかったけれど、僕は変わりないよ。君の医師とは何度か話をして、君の状態もよく知っている。とても順調みたいだね」

つかんだ指を離してくれそうにない。どうしたものか。

「予定より早く出られたのは、初めてのケースで医師としても予想が難しかったからだそうだよ。良い医者ならば予想される最悪のケースを告げる筈だから、信用できる人なんじゃないかな。まあ君の事だから、その辺は抜かりないと思うけれど」

僕の話を理解している事が、何となく分かる。

「君がエリアにアクセスできるのは秋以降じゃないかな。最初は時間を短くした方が良さそうだよ。リアルでの感覚、五感がしつかりする事が第一だからね。まあ何事も焦らずに行こうよ」

頷いているのだろうか。口を尖らせて何か発音しようとしている。「あつちで変わった事といえば、そうだな、あれからアキ君が登校してこないんだ。デコイだけは置いておけるけれど。ちょっと心配だから近々逢いに行ってみるよ」

彼女は目を細めて満足そうにしている。どうやらこの事が気掛かりだったらしい。そして静かに眠り出した。握られたままの指をそっと外して、しばらく小さな吐息を聴いていた。

帰路、気分が良かったので寄り道をする事にした。駅構内で『海洋高校バザー』のポスターを見て、覗いてみたくなったのだ。

山陰州では先駆的に、リアルでの大学・専門高校の建設を推進している。新舞鶴の医科大学と海軍士官学校、宮津の海洋大学、豊岡

の体育大学、鳥取の農業大学、出雲の神道大学である。そして各々に付属の専門高校がある。

かつて、リアルにある海洋大学を見学に行った事がある。門の内側には、食堂と生協、後は校庭と桟橋があるだけ。何も面白くない。食堂も生協も近所の人々が使うだけで、学生を見掛ける事はなかった。グラウンドも無人。桟橋で釣りをするおじさんがいただけだ。海洋大学の学生は、実習のみならず座学も日常生活も船上で行うらしい。大学に寄港するのは年度初めだけだそう。

付属の海洋高校の方が歴史は古く、二十世紀から存在している。洪波期においても海上に降り注ぐおびただしい有害放射線に屈せず、貴重な海洋資源を採取し続けた船乗り達、そんな職能者を育ててきた名門だ。

海の男達は豪快で屈強で無頼で、彼らにいわせれば海軍の連中なんてただの兵器オタクなのだそう。同じ海に生きる者同士、いつも比較されてしまう両者である。

シャトルバスに乗って海洋高校へ。

校門を過ぎれば右手にグラウンド、左手には白い校舎がある。奥には松の防風林があつて、その先は砂利の浜辺と桟橋になっている。停泊している白い船が実習船なのだろう。

バザーはグラウンドを使って行われている。生徒数はそんなに多くない筈だが、かなりの賑わいだ。生徒達は揃ってセーラー服を着ているが、可愛い女子高生とは対照的な色黒のごつい連中ばかり。ジヨッキでビールを飲んでいても誰も止めないだろう。

長蛇の列ができていたので僕も並んでみた。列があれば並ぶのが日本人である。

列の先で売られていたのは缶詰であつた。食品加工科の生徒が作った物らしい。開けるのに缶切りが必要な古いタイプで、しかもラベルがない。中身はオイルサーディン、鯖味噌煮、鯖水煮、イチゴジャムだと掲示してあるが、どれがどれなのかは明記されていない。

前に並んでいた常連らしきおばさんに倣って、できるだけバラバラの位置から取る事にする。おばさん曰く「重さと振った時の感覚で中身を憶測する」のだそうだ。

タコヤキなどの露店も出ているが、その手のモノは我が神社にもウンザリするほど揃っているのも、もう見て回るものがなくなってしまった。

浜辺が近く良い風が吹いてくる。松の根に腰掛け、汗が引くのを待つ事にした。

先客が一人、隣の松の根に座って煙草を燻らしている。胡麻塩頭をした色の黒い老人である。数人から「校長」と呼ばれていたのも、どうやら校長先生らしい。その優しそうな目に惹かれて声をかけた。「海洋高校の校長先生でいらっしゃいますか」

「いや、かつての校長じゃよ。退任して一年になるかの」

「こちらの生徒さん達は元気な様子ですから、ご苦労なさったでしょう」

老人は垂れた細い目を更に細める。

「ははは、皆さんそうおっしゃるが、でもそれは間違いじゃ。それ、そこに集まっている生徒達をご覧なさい。我が校の生徒にしては華奢じゃろう。入学当初は誰もあんな感じで、ヒョロヒョロの、青白い顔をした者達ばかりなのじゃよ」

「そうなのですか？」

「ここにくる連中は、皆ネット社会に馴染めなかった、エリアから疎外された者達じゃ。ネットにつながる事が嫌で現実世界だけで生きて行きたい者、身体的理由でエリアに行けない者、そんな連中が集まる場所なんじゃよ」

「聞いた事がありますが、そんな方が沢山いらっしゃったとは驚きです」

「沢山ではないがの。そんな連中がここへくれば、もうネットにつながらなくても良い、エリアで勉強しなくても良い身分になる訳じ

やから、ストレスがなくなつて食欲と笑顔を取り戻し、心身共に健康になるのじゃて。そして海に鍛えられ、男らしい顔つきの生徒になる。おお、今は女の子もおるのう」

「適材適所ですか」

「そうともいえるが、実際はそんなに甘くない。海の仕事といつても簡単な作業は船舶ロボットがやってしまふんじゃ。彼らに回ってくるのは危険で困難な仕事ばかり。元々、彼らの望みはネットにながりたいという一心だった筈。自らを危険に晒しても国家や国民のために奉仕したいとか、そんな高邁な願望を持ってきた生徒はいないんじゃ。実は、儂もその一人だったのじゃよ」

「そうだったのですか。伺つてよろしければ、彼らが就く仕事とはどのようなものでしょう？」

「例えば外国のEEZ付近の調査、軍艦がひしめく海洋紛争地域での情報収集、多数の国家が狙う公海上の海底資源の試掘、未だに反对者が多い鯨・鮫・鮪などの海洋生物資源の捕獲、昔だつたら赤道水域海上での放射線調査とかじゃな」

「凄い！ でも、皆さんはそれを承知しているのですか？」

「知つていて、それでもネットにつながる事より遙かにマシだと思つているのじゃよ」

「どれも繊細な判断が必要な仕事ばかりですね」

「そこがロボットや遠隔操作ではできないところなのじゃ。難しい判断を、自分と仲間の生命を賭けて瞬時に行う。彼らは落ちこぼれで内気な子供だった者ばかりじゃから、相手の気持ちを察する能力に長けとるでの。繊細な判断には不可欠な能力じゃ。そう、後天的に獲得した新人類としての特徴ともいえるのう。しかし神経質なだけでは勤まらん。困難と直面しても、冗談を飛ばし笑いながらやり遂げる。そんな連中を育むのがこの学校なのじゃよ」

「それは相当難しいでしょうね」

「生徒達には困難な道だろうの。しかし教える側は楽なもんじゃ。儂らは何もしくとも、海が全てを教えてくれるんじゃよ」

その優しい目をした人は、重たい話ばかりになった事を謝罪して、代わりに学校に伝わる笑い話や、僕が山と抱える缶詰の見分け方を教えてくれた。

汗は一向に退く気配を見せなかったが、頃合いを見計らってその場を辞した。

家に帰着すると、母が珍しく暗い顔をしている。

「母上、どうかなさいましたか？」

「食べ物がありません」

「我が家の経済状況はそんなに深刻だったのですか？ それともお祖母様が何もかも食べ尽くしてしまったのですか？」

「違います。むしろ逆です。お金のご寄進は多くなっています。でも、食べ物を受けなくなってしまうて」

「では買えば良いではありませんか」

「それは私の主義に反します」

そんな都合の良い主義があるものかと思うが、母の郷里を考えれば分らないでもない。母は兼業農家出身で、食べ物は自作するか分けて貰うかしていた。それでも肉や魚は購入していたのだが、神社に嫁いで、その多種多様な喜捨物を見て、もう何も買えないと心に誓ってしまったのだ。結婚当初はそれでも良かったのかも知れないが、氏子の皆さんも最近では豊かになり、食べ物のご進物は減つて、代わりにお金をご寄進頂いているという事らしい。

「ハル！ その持つている物は何？」

「ああ、これはお土産です。全部は供出できませんが、数個を残して、あとは我が家の今晚のおかずとして使って下さい」

「幾つ残せば良いの？」

「三つばかり。記念品として残しておきたいので」

「お前は何て良い子なのでしょう。母は今程お前を産んで良かったと思った事はありません」

「ご無体な言い草だ。」

食卓に銀色の山を拵え、ご飯とお新香、それに缶切りを人数分並べて夕餉の支度が整った。

家族が食卓に揃う。まず父が口を開いた。

「これは何だ」

「缶詰です。父上」

「そんな事は分かる」

「夕餉のおかずです。父上」

「それも分かっておる。だから何なのだ」

「ハルが買ってきてくれた海洋高校名物のシークレット缶詰ですよ、貴方。今晚唯一のおかずです。説明はハルがしてくれるでしょう」

「では聞こうか」

「説明致します。そも海洋高校はこの山陰州にあつて歴史の古い・

・
」

「ええい、そんな説明はいらん。缶詰の説明をしなさい」

祖母はもう缶詰を開いて食べ始めている。しかもポケットに数個確保したりして、卑しい事この上ない。ピラミッドを作るぐらいあるのだから、そんな事はしなくても良いのに。

「まず、缶詰の中身について説明致します。この平らな缶詰はオイルサーディンです。そして丸い缶詰は鯖の味噌煮か水煮、そしてイチゴジャムです。ラベルはありませんが持った時の感触で判断して下さい。尚、ここからが肝心なのですが、一度開いた缶詰は食べ切つてから次に取り掛かつて下さい。自分の嫌いな物だからとか、そんな理由は認められません」

「イチゴジャムはどうするのだ」

「どう仕様ありません」

弟妹達は緊張を隠せないでいる。父もまだ動かない。オイルサーディンなら判別可能だが、ご飯のおかずとしては弱い。それでも分葱と醤油があれば何とかなるのだが、分葱がない。そして最も問題なのがイチゴジャムである。これは何をどう足掻いてもおかずにす

る事は不可能だ。それが最初に出てしまえば全てが終わる。それだけは……

祖母に続いて母が動いた。

「では頂きます。キコキコキコ」

皆の視線が手元に集中する。

「あら、美味しそうな鯖の味噌煮ねえ」

「おお」

父と四人の子供達がユニゾンで唸った。

祖母はどうせ人智を超えた妖怪みたいなものだから、開けずとも中身が分かるのだらう。さっきから立て続けに鯖の味噌煮と水煮缶を開けている。空の缶の置き場所が手狭になる勢いだ。のんびりしていたらイチゴジャムしか残らなくなる。

「頂きます。キコキコキコ」

弟妹達が一斉に取り掛かった。しかも各々が数個の缶詰を確保している。全て平らな缶詰だ。やられた。安全策に出たのだ。賢明な判断といえる。この状況判断の的確さは僕の教育の賜物だらう。ピラミッドを調べてみれば、もう平らな缶詰は残っていない。

父が僕を凝視している。彼が参考にできるのは母の様な幸運の塊でも、ましてや妖怪でもない。平凡な僕だけなのだ。

父にヒントを与えるのは癪だが、致し方ない。僕はゆっくりと缶を振り出した。

「ぺちやぺちや。ぺちやぺちや」

重さでいえばイチゴが最も重い筈。そして中身が詰まった感じがする筈なのだ。

父がニヤリとしている。缶を両手に持って重さを比べている。どうやら気付かれたらしい。

「おや、珍しいね。煮貝の缶詰があるよ」

祖母がそういうと、ピラミッドの中から缶を一つ取り出し、開け始めた。果たして赤貝の煮付け缶であった。

「あら、これは鮭の中骨缶ね。サクサクしていて美味しいわ」

母が宝くじに当たっている。

校長先生がこう教えてくれた。

「百個に一個の確率で鮭缶があり、その鮭缶五十個に一個の確率で中骨缶がある」

「中骨缶に当たった人はその日のうちに交通事故に遭うか、一生お金に困らずに長生きするだろう」と。

煮貝の話は聞いていない。きっと知ってはいけない存在だったのだろう。

父が唸っている。こうも種類があるとすれば重い軽いでは判断できない。詰まった感じがするのはイチゴも中骨も同じだ。

缶詰の残りは五つとなった。女共は満足げな表情を浮かべて食事を終えている。弟達は母の残した中骨をも平らげ、食事を終えた。弟達よ、それをやっちゃあお終いよ。獲物は自分の力で得るものなのだ。

そして今、父と僕との、男と男の勝負が始まろうとしている。

父は目を瞑り、小声で祝詞を唱え始めた。

僕は缶をそつと持ち、校長先生から教わった判別方法を実践しようとしている。

曰く「イチゴ缶の製造器はちと古い。よって角が綺麗な弧を描けていない可能性が高い。そこを突くのだ！」

校長先生有難う。僕は最も美しい造形の缶を選び抜いた。

父は祝詞を終え、神々の力を得て缶をつかんだ。そして勝負の時来たる！

「キコキコキコ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人ともイチゴであった。

刹那、父の瞳孔が開き、大切な何かが四散した。そして奇声と共に禁じ手を繰り出す。

「南無三。オンバサラダバン、ナウマクサマンドボダナンバク・
・」

手を袖に隠して印を結んでいる。父よ、それは宗教が違う。真言密教だ。

「キコキコキコ」

「・・・・・」

やはりというべきか、イチゴであった。

僕はお新香で美味しくご飯を頂く事にした。そう決めればそんなに不幸な事でもない。

父は自分の開けた二つの缶詰を前に茫然自失。母はその缶詰と父には触れず、他の物は全て綺麗に片付けてしまった。

そして解散となった。

父を一人残して。

その夜、書斎で聖書を読み耽る父を見た。彼は救いの手を欲しているのだろうか。

父よ、どの宗教でも『救いの道はあると思えばあるし、ないと思えばない』と説いている。今の貴方は誰にも救えない。

翌日、アキ君に逢うために新舞鶴へと向かう。この街は今も昔も海軍の城下町として存在している。良い点を上げるとするなら、大病院が幾つもある事、繁華街が碁盤目状になっていて構造を憶え易いところであろう。

彼の元へ行く前に、折角なので海軍基地を見に行く。基地といえば大砲が並んでいるイメージだが、実際はがらんとしていて、緑の芝生が広がったりしている。士官学校が併設されているからだろうか。基地らしいと思えるとするれば、建物に隠れる様に軍用ヘリが何機が留まっている事ぐらいである。栈橋に軍艦は一隻も見当たらなかった。近頃の軍艦は潜水型が主流だからなのかも知れないし、単に出払っているだけなのかも知れない。何れにせよ陸海空どの兵器

も小型化・無人化が進み、船舶といえどもどんな形をしているのか想像もできない。

兵士達の仕事も様変わりし、事務職や機械工の様な仕事が増えていくそう。それに世界のどの国家も国民を喰わせる事に精一杯で、大々的に他国を侵略してやろうとか、そんな余裕がない。現在での軍の仕事は災害救助や防災工事、あとは国境監視が主たるものになっている。

自然の猛威が人類に平和をもたらすなんて、人類の矮小さと愚かさを表していて、新憲法の前文に推薦したい事例だ。

さて、アキ君のいる州立医科大学付属病院の小児科棟へ向かわねばならない。彼の居場所は彼から聞いたものではないし、突然の訪問に怒り出すかも知れない。それはそれで楽しみだが。

小児科棟は病院というより、医者や看護師付きの学校といった風情だ。白い四階建ての病棟の横には中庭があり、青々とした芝生があつて、小さな噴水や遊水施設がある。そこで遊ぶ人達の年齢はまちまちで、幼い子供からどう見ても成人であろう人までいる。学校に通っているかどうかで小児科と一般を区別しているのだろうか。とにかく大勢いて賑やかだし、皆陽気に過ごしている。

十二歳ぐらいの少年を見付け、アキ君がどこにいるか聞いてみると、流石は有名人、すぐに判明した。

棟内の情報通信室へ行くと、各ブースの予約者氏名が掲示されている。彼は午後一時から予約していて、予定が守られるなら間もなく現れる筈だ。

廊下の向こうから、ポケットに手を突っ込んだ少年が歩いてくる。少し伏し目がちで生意気そう。部屋の入り口に立っている僕をちらと見て、中へ入って行った。

「アキ君かな？」

「そうだけど、あんた誰」

僕はエリアでも現実通りの姿をしていて、声すら変えていないの

に、酷い言い草だ。

「ハルですけど……」

「ええっ、そう言えば見た事のある顔だ。何をしにここへ？」

「つれない反応ですね。君に逢いにきました」

約束なしにきた事で驚かせてしまったが、彼の緊張もすぐに解け、場所を談話室に換えて接見を楽しむ事となった。

「俺が十二歳だって皆気付いていたのかな」

「どうだろう。僕は気付いたけど」

少し曖昧な表現をした。僕とて自然に気付いた訳ではなく、調べて知ったのである。一般的な方法だが、情報を持っていそうな人から話を聞き、別の人を紹介して貰う事を数回重ねる。そして真の情報を持っている人に辿り着き、ようやく確かな彼の個人情報を得たのだ。僕がケイコ先生の居場所を突き止めたのと同じ手法である。

「俺がずっと休んでいたから来てくれたのか」

「うん。何かあったのかなと思ってね。僕が渡したケイコ先生の情報のせいかと、責任を感じていたんだ」

「あれは衝撃的だったよ。ケイコ先生と担任のテツタ先生や他の先生達が全部同一人物だったなんて酷いと思うよ。しかも実物は禿げ親父だし」

そんなところだろう、と最初は思っていた。ケイコ先生の正体を知った彼が失恋にも似た感情を抱いて、その心痛のあまり学校を休んでいるのだらうと。しかし、彼が休み続けて一週間も過ぎた頃、何となく違和感を憶えて考え直す事にしたのだ。

彼は十二歳で高校に飛び級する程の頭脳を持っている。それなのに、僕でも気付いていたケイコ先生達の秘密に、彼は翻弄され続けていた。

エリアで我々の学級の全教科を担当してくれている先生、名前を沢山使っていたが本名はテツタであるその先生は、自分達が実は同一人物であるヒントを所々に出していた。例えば美人教師の代名詞

である『ケイコ先生』というありがちな名前、板書の癖、雑談した際に感じる趣味嗜好の近さ等である。

同一人物であると分かれば、僕がいつも人を探す方法で探るのみである。架空人物であるケイコ先生の知り合いなんて存在しないが、テツタ先生の知り合いなら探せる。もっとも先生のハッキング対策は完璧だったので、通信経路を辿る方法では難しかっただろう。

ここまで考えが至れば、たとえ彼が十二歳だったとしても、失恋即長期欠席は甘い考えに思える。それに彼はいわゆる天才児なのだ。何か特別な事情があるのではないか。

とにかく、もっと話がしたい。

「君が早退した日、僕とナツ君と一緒にいたけれど……」

僕はナツとの関係を話し始めた。彼女の身体の事、その成し遂げた仕事、婚約した話全てを。彼はその話を興味深く聴いてくれて、逆に自らの生い立ちを話し始めた。

「俺、ここにくるまではかなり寂しくつてさ。母ちゃんは死んでいないし、父ちゃんの仕事が忙しかったし、祖母ちゃんも俺も身体が悪かったから、家から一步も出ない様な生活だったんだ」

「お父さんの仕事は何なの？」

「船乗りだよ」

海洋高校出身者だろうか。

「それで俺はエリアに頻繁に行つて、エリアで遊んで、単位も取りまくっていたんだけど、ある日『お祖母さんと一緒に新しい治療を受けてみませんか』って誘われたんだ」

「どんな治療？」

「豚とヒトのキメラを作つて、俺の調子の悪い臓器を複製させるんだ。そして移植する治療だつて」

動物愛護の観点から実施されなかった古い手法だ。国際条約上、違法の可能性があるといわれて永らく封印されていたけれども、海外では半ば公然と実施されていて、日本の変な生真面目さをもどかしく思っていた。

「それで俺も祖母ちゃんも元気になって、ここで暮らす様になったんだ」

「お祖母さんもここに？」

「一般病棟の老人生活支援施設にいる。たまには逢いに行っているよ」

「ここでの生活は楽しい？」

「めっちゃ楽しい。リアルでこんなに人と知り合えるなんて思わなかったよ。皆俺と話したがるんだ。俺の話が面白いって」

確かに彼の話術には面白さがある。エリアでは会話が全てだから、エリアにいた時間に比して、面白い言い回しとかの練度が上がって行く。

「ここでの生活に何の不満もないけれど、エリアしかなかった頃の事をよく思い出すんだ。エリアはなくしちゃ駄目なんだ。むしろ大きくしなくちゃ。クラッシュもクラスAもBも、あそこなら友達になれる。友達を何人でも作れるんだ」

「僕もそう思うよ。エリアの大切さは理解しているつもりだ」

「そうか！ ハルの立場ならそうだよ。エリアじゃなきゃ彼女と話してもできないだろうし」

「それはそうだね」

「じゃあ、最近の州の教育政策をどう思う？ ここみたいな専科大学がリアルにあるのは納得するよ。エリアに外科医がいても無価値だから。でも小学校や中学校が必要か？ 健康な奴らだけで楽しくやろうつていうのか。俺達を仲間外れにするつもりなのか」

「そうだね。別の方法がある筈だ」

「別の方法があるんだよ。即効性のある方法が」

彼はポケットに忍ばせていたデバイスを表示端末に入れて、中身を空中表示した。

可愛い丸文字に動物イラストが添えられたテキスト。題は『みんなで実感！ エリアの大切さ』とある。

「これは何？」

「これはテツタ先生のレンタルサーバーに残っていたものだよ。先生がエリアの中学校で教えていた時に作った配布物らしいよ」

内容を読み進める。エリアが如何に大切かが説かれていて、その後こう続く。

『エリアの大切さをみんなが実感するにはひとりひとりの行動が必要です』

『リアルで起こっているいろんな問題を、エリアのちからで解決しましょう』

『小さなことから始めてみよう！　まずは身のまわりの問題から』
『みんなのちからを合わせて、大きな問題にチャレンジ』

勿体振って見せてくれたわりには、普通の学校配布物に思える。

「正論だし、賛成だな。しかし即効性はどうだろう」

彼はニヤリと笑って、次のテキストを表示した。

「これは俺と俺のグループが作ったアクションプランさ。さっきの丸文字紙媒体とは違って、毒があるぜ」

新種の細菌とそれに有効な抗体を作っておいて、菌をばら撒き、パニックになったところで特效薬を発表する。その薬はエリアで短時間に開発した様に見せかける。

軍の兵器を支配して暴走させる。そしてエリアの有志が集まって再クラックして暴走を止める。

麻薬中毒患者を使って事件を起こさせ、これもエリアで集まった有志が犯人を調べ上げて、解決する。

マツチポンプ大会だ。内容はかなりの具体性を帯び、実施者・日時も書かれている。

「これをやればエリアの評価はうなぎ登りさ。そして政治家は世間で何が人気なのかに敏感だから、リアルで学校を増やすより、予算的にも安くて済むエリアの充実を優先する事になる」

「成る程ね」

「どうだ、参加しないか」

「その前に、どうしてテツタ先生に近づこうとしたのかな？」

「先生の噂を聞いたんだ。クラスAの面白い先生がいるって。話をしてくれた奴は中学の時に先生に教わったらしいけど、先生はいつも『エリアの大切さ』を説いていて、今じゃ州のエリア専任教職員組合の役員もやってるって。先生達の労働組合ってのは、いつの時代も行政の政策に反対じゃん。何か過激な事でも計画しているんじゃないかなって興味があつたんだ」

「リアルで先生に逢った？」

「逢った逢った。近くじゃなか。この病院の一般病棟。若い頃から寝たきりみたいだけれど、明るい冗談好きな先生だった。一遍で好きになったよ。でも、この人は過激な事はしななつて、すぐに分かったけれどね」

「僕も逢えるかな」

「逢いに行つてごらんよ。場所はハルが先に知っていたんだから、俺より早く先生に逢えたんだぜ」

彼は先生に心酔しているらしい。

彼と一旦別れて、单身テツタ先生のところへ面会に行く事にする。しかしこれは難問だ。このままでは彼は犯罪者になってしまう。今の時代、テロリストには重罰が約束されている。計画しただけでも実刑は免れない。迅速に、しかも秘密裏に解決する方法なんてあるのだろうか。

渡り廊下を進み一般病棟へ。その四階がクラスA区画になっている。

廊下の両側に個室が並んでいる。まるでビジネスホテルの様だ。扉が開け放たれているので、失礼かと思うが、それぞれの部屋を覗きながら進む。どの個室も個性的な内装を施していて、とても病室には見えない。彼らは一生の殆どをここで過ごすのだろうか、パイプベッドに白一色の部屋という訳にも行かないのだろう。

目的の個室に着いた。暖色系の壁一面に子供達の写真や絵が飾られている。窓際に向日葵の鉢が飾られ、その横に木目調のベッドがある。部屋の主はベッドの背もたれを起こし、窓から入る日差しも気にせずに座っている。すだれ頭に四角い顔。確かにテツタ先生だ。夏休みだけあつて仕事もなく、今は本を読んでいる。

やがて僕に気付く。

「おお、ハル君かな？ わざわざ来てくれたのか」

先生は突然の訪問に驚きもせず、ごく普通に椅子を勧めてくれた。「君はいつか来るんじゃないかと思っていたんだよ。長年教師をやっていると感じるものなんだ。ところで、数学のホームワークは進んでいるかな？ 君は今ひとつ数学が苦手だからな」

「数学も現代史も終わらせてありますよ。ケイコ先生」

先生は破顔一笑し、少し顔を赤らめた。

「私に変な趣味があると思わんでくれ。私はノーマルだから！ ただ、現代史というどうしても暗くなりがちな教科は、何か特別なサービスでもしなきゃと長年悩んで思い付いたアイデアなんだよ。女の子が多い学級ではハンサムな若者、男が多い学級ではケイコ先生のキャラクターにしているんだ。効果はかなりのもので、我ながらノーマル教育賞ものだと思っているんだが」

「ええ。誰にも喋りませんよ」

先生は感謝の意を示し、更に話を進める。

「私は生来、下半身が不自由でね。それで子も成していない。勿論、人工授精なら可能だっただろうが、不自然な感じがして、その方法を選択しなかった。それでなのかも知れないが子供達が好きでねえ。教師の道を選んだ訳だよ」

授業を受けていて先生が子供好きなのはよく分かる。生徒にとっては優しくて厳しい理想的な先生だ。

「エリアの教員資格を取って教職に就いたんだが、経験を積むうちに自分の特徴に気付いたんだ。子供に限ってだが、心の内が手に取

るように分かる。言葉に出していなくても、気持ちが伝わってくるんだ」

先生の顔に笑みが浮かぶ。

「それが誇らしくって、定年を迎えた今でも現場を担当しているという訳だ。子供達に教える事が私の存在理由なんだよ」

熱意が伝わってくる。こんな先生に出逢えたのは幸運に違いない。エリアがなければ出逢えなかった個性……

「先生、何か読んでらっしゃいましたが、何の本ですか？」

「これかね。『リアルにおける教育論』だよ。実は、今度手術を受ける事になってね。胚性幹細胞の接ぎ木技術クロニングを使った手術なんだが、上手く行けば立てる様になるそうだ。そうすればリアルにある大学が高校で教鞭が執れる。夢の様な話だよ。船に乗って海洋高校の生徒達と共に過ごす事ができるかも知れない。あそこに校長をしていた幼馴染みがいたが、そいつはネットにつながる事ができなくて、一緒に学校で学ぶ事も教鞭を執る事もできなかった。その悔いが晴らせるんだ」

「胡麻塩頭で目の細い先生ですか？」

「そう角刈りのね。君はヘーハチに会った事があるのか！」

ヘーハチという名前までは知らなかったが、出会った経緯を話す。「いい奴だろう？ 今では彼もネットにつながる事ができる。彼がエリアに行けるなら、私もリアルでやってみたい、そう思い立ったんだよ」

この二人が知り合いなら、アキ君の問題も解決の糸口が見付かるかも知れない。思い切って打ち明ける事にした。

先生の表情が一変する。

「そうか……」

そう呟いて、しばらく黙り込んでしまった。そして破裂する様に叫ぶ。

「あの馬鹿もんが！ 身体が治っていれば殴りつけてやれるのに」「計画実行まであまり時間がありません。やはり官憲の手を借りる

しかないのでしょうか？」

「いやそれは駄目だ。彼が傷付き過ぎる。私が話をして、彼を改心させるのが第一だ」

僕は彼を捜した。夜遅くまで探し回ったが、彼は忽然と姿を消していた。

場所をエリアに移す

三人がエリアの文殊堂に集まっている。天の橋立にあるお堂で、観光客を弊社と取り合うライバルでもある。屋根板に見事な地獄極楽之図が描かれており、中央では文殊菩薩がアルカイクスマイルを見せている。その前で、僕とテツタ先生と海洋高校のヘーハチ校長が車座になって『三人寄れば文殊の知恵』の実践を試みているのだ。

両先生は幼馴染みだけあって、忌憚のない、というか喧嘩腰の議論を交わしている。

ヘーハチ校長は興奮を隠せない。

「海じゃ。海に連れ出すんじゃ。そうすれば何もかも解決できる」

「馬鹿かお前は！ ウミウミと煩いぞ」とテツタ先生。

「何をいうか。海は全ての源じゃ。お前は沖に出た事がないから分からのじゃ」

「まあまあお二人とも、建設的な会話をしましょうよ」

「そうだ、時間がないのだ」

「時間はなくとも煙草ぐらいは吸えるじゃろ。アレ、煙草がない。

誰じゃ、儂の煙草を盗んだのは！」

「ここはエリアですよ。どうやって喫煙するのですか」と僕。

「そうだ馬鹿め」

「不便じゃのうエリアは。一服もできんのか」

これでは話が進まない。どうしたものか……

僕の焦りが新たな不安を運んできた。窓格子の向こう側に小さく人影が現れたのだ。こっちに近づいてくる。

「もう官憲が気付きおったか。皆隠れるんじゃない」

へーハチ校長の言葉が空しく響く。

エリアに作ったプライベート空間に無許可で訪れる者がいるとすれば、それはこちら側を完全にクラックしている存在であり、騒ごうが逃げようが無駄な努力なのだ。官憲だとすればリアルに残した身体ごと押さえられている可能性が高い。

侵入者が近づいてくる。僕は顔を伏せて懸命に言い訳を考えていた。

「これはフユさんじゃないですか！」

「そうじゃ、儂らのフユ大明神じゃ」

我が目を疑った。眼前に仁王立ちの祖母がいる。

「ハル、帰りが遅いのできてみれば何だい。こんな爺さん達と密会かい」

胡座を急いで正座にして、平伏モードに切り替えた。

祖母は踵を着けた蹲踞の姿勢、つまりうんこ座りで僕達を見詰め出した。こうなったら蛇に睨まれた蛙だ。尋常でない量の冷や汗が出てくる。

「成る程ね。困った話だ」

祖母には事情説明が不要なので助かる。嬉しくはないが。

「その少年ならウチの神社にきていたよ。お賽銭を投げて懸命にお参りしてた」

どこへ行ったのかと思えば、そんなところだったとは。

「あれは我が社への挑戦だね」

「お祖母様、お参りを『挑戦』と解釈するのは如何かと」

「民間神道は現世利益がモットーなんだ。ちゃんとお参りしたのにご利益の欠片もないとか思われちゃ癪だ。違うかい？」

僕は同意を求められているのだろうか。

「きつと神様もお忙しいのだろうな、と思ってくれるかも知れませんが」

「神がやらなきゃ人がやるしかないさ」

「彼が祈っていたのはテロの成功ではありませんか」

「本人にとつて真に良い事をしてやるのがご利益つてもんだ。それが神社の仕事なんだよ。止めてやれば良い」

神社にそんな仕事があるとは露にも思わなかった。祖母以外にはこの世で知る者のいない常識、つまり勝手な言い草はいつも聞かされているので驚くに値しない。しかし商売としては割に合わないのではないだろうか。

「ちなみに彼のお賽銭は幾らだったのでしょうか？」

「四十五円だよ。始終ご縁があります様につてね。可愛いじゃないか」

弊社の賽銭箱にはカウンターが付いていて、千円未満だと「ジャン」千円以上だと「ドンドン」一万円以上だと「タツタカタ」とファンファールが鳴る。小切手や手形の場合は判別に時間が掛かるので、その間ドラムロールが流れる。祖母が鬼籍に入るや否や廃棄する物リストの筆頭を飾る、当社にしかない自慢の一品だ。その風変わりなPOSシステムで誰が幾ら喜捨したかを管理している。顧客管理は商売の基本だ。

四十五円を対価として危険な橋を渡るべきとする祖母の理論にはついて行けないが、元より彼の行動を止めるつもりである。

よつて、ここに二恍惚一若造一妖怪の対テロ特殊部隊が結成された。

記録しておいた彼らのアクションプランを真ん中に置いて、四人で議論を進める。当然ながら議事進行役は祖母である。

「まず彼らのグループを分けるよ。細菌ばら撒き犯をA、兵器乗っ取り犯をB、麻薬犯をCとしよう。Aは三人、Bは二人、Cも二人

か。合計で六人やつつければ終わりだね」

「フユ大明神様、A B Cじやと分からんでイロハにして下さらんかの」

「おだまりハチ」

「そうだ馬鹿者め」

「お前もおだまり、テツ」

祖母は二人と初対面ではないらしい。どう知り合ったか聴きたいが、今はそんな時ではない。恍惚の二人には『そんな時』でもなさそうだが。

「それに紙が見辛いのも。僕の位置からじやと逆様じゃから」

「馬鹿め。こうしてコピー&ペーストして、自分の目の前に広げるんだ」

「お前はそんな事したらんじゃろ」

「その姿を表示しない場合はこうする。小学校で習うだろ」

「どうせ僕はエリアの小学校には行けなかったわい」

祖母の目が光り「ゴンゴン」と鈍い音が二回した。両先生は頭を押さえ低く唸っている。

二人も僕に倣って、無言で拝聴する事にした様だ。議事進行がスムーズになった。

結果、最も危険を伴うA班を祖母が、実行者が高校生らしきB班を両先生が、そしてアキ君を含むC班の二人を僕が担当する事になった。

夜も遅いので一旦解散し、明日に備える事にした。

リアルへ

リアルに戻ると、そこはテツタ先生の病室にあるソファアの上である。先生も戻っており、リクライニングベッドを起こしている最中であつた。

「先生、僕の担当するC班はアキ君とヒコジョーとされる人物なの

ですが、このヒコジョーさんって誰だか分かりませんか？」

「おお、ヒコジョー君なら知っているぞ。小児科病棟の患者組合長だよ。まあいつてみれば生徒会長みたいなもんだな。世話係だよ」

「今から会えますかね」

「そりや彼がまだ起きていればね。病院の案内図と患者名簿を渡しておこう」

先生から情報を受け取り、ストレージデバイス外部記憶装置に写した。

「小児科棟に面会者用の宿泊部屋がありますね」

「そっちに泊まっても良いが、もう十二時だし、今日はここで寝れば良いんじゃないか？」

「有難うございます。でも行ってみますね」

先生の部屋を離れ、急ぎ小児科病棟へと移動する。急がなければヒコジョー氏にも会えなくなるかも知れない。

深夜の病院。

昼間の喧騒とは一変して、しんと静まり、コツコツと自分の足音だけが聞こえている。

廊下は常夜灯と非常口案内だけがぼんやり灯っている。

床のタイルがうねりを打って斑に光る。

しばらくしてヒコジョー氏の部屋の前まできた。そこは個室である。

眠っているなら引き返すつもりだ。わざわざ起こしてみても、相手を怒らせるだけで何も進展しないだろう。

小児科の入院患者の部屋はどれも扉がないので、入り易くて助かると思いながら侵入する。

ベッドを隠すカーテンは開け放たれており、中に人はいない。

読みかけの本が開かれたまま置かれている。まだ病院内にいると思っ間違いなさそうだ。とにかく部屋を出よう。この状況で彼が戻ってきたら、間違いなく泥棒だと思われるってしまう。

同じ階にあるお手洗いを調べる。無人だ。

談話室を調べる。施錠されている。通信室も同じ。

自動販売機のコーナーを見る。やはり無人。売られている食品類を見て立ち去るのを逡巡してしまう。

廊下の窓から庭を見ても無人。

もう彼がいそうな場所が思い付かない。仕方なく面会者用の宿泊部屋に行く事にした。

宿泊部屋の入り口には注意書きが掲示されており、宿泊者は端末に氏名住所を入力的事、十時以降消灯の事、ここでの飲食禁止、喫煙禁止、無駄禁とある。

広い部屋に二段ベッドが敷き詰められ、既に誰かいるベッドは力ーテンが閉められている。全て埋まれば十八人泊まれる部屋だが、今日の宿泊者は少なそうだ。

複数の寝息が微かに聞こえる。

近くに誰もいないベッドを選んで潜り込んだ。

今日は疲れた。

横になってしまえばすぐに眠れそうだったのに、枕が換わったからか、寝返りばかり打っている。

窓からは中庭が見える。

外灯に羽虫が集って、ストロボ効果で羽をちらつかせている。

月齢が若いせいか、灯りが届かない場所は暗い。

部屋が暑い。じつとりと汗ばむ。

「あああああ」

突然唸り声が聞こえた。

同室の誰かが飛び出して行く。

パタパタと複数の人が行き交う足音。

緊急を要する何かが起きているらしい。少し気が引けるが、そつと見に行く。

近くの病室に医師や看護師が出たり入ったりしている。医療機器をガラガラと搬入させて、また足早にどこへ向かう。

中年の女性が、部屋の外から不安そうに中を覗いている。

僕と同様に遠くから眺めている青年を見付ける。痩せた青白い青年。知的な顔つきで大人びている。しばらくして彼は立ち去ってしまった。追いかけて声を掛ける。

彼こそがヒコジョー氏だった。

自販機コーナーの脇にあるソファーに座り、アイスコーヒを飲みながら話す。

「興味本位みたいで聞き難いけれど、さっきのは何なのだろう」

ヒコジョー氏も何か飲んでいる。

「ああアレかい。彼は毎晩の様に呻くんだ」

「どうして」

「苦痛なのさ、苦痛」

「病気かな」

「病気というより、先天的なものだね」

彼は生まれてから今まで、ずっと悲鳴を上げているのか。

「辛いだろうね」

「そりゃ辛いさ。彼のようにずっと麻酔薬にかかっていると、どうしても効きが悪くなる。医者も何を処方したものか悩んでいるだろうね」

「根本的な治療はないのかな」

「あればやっているだろう」

「そうか」

「彼も起きている内は平気なんだが」

「何故？」

「エリアに行つて麻薬を買うのさ。ケミカル系のプログラム。君だつて聞いた事ぐらいあるだろう？ それなら各種の脳内麻薬を大量に誘発させて、全くの無痛状態になれる」

エリアに行つて、そこで眠つてしまえば徐々にリアルに戻つてしまふ。彼は安樂を得られても眠る事ができないのか。

「彼は眠れないのさ。でももうすぐ楽になれるかも知れない」

「どうして？」

「誰が作つたかは知らないが、リアルに戻つても効いたままのヤツが流れ初めている」

「それは危険じゃないのかな」

「そりや危険さ。実際の麻薬と変わらない。麻薬はどんな物であってもヒトを狂わせる。エリアなら犯罪防止プログラムが異常行動を抑制してくれるし、人前に出なくて済むプライベート空間なら何をしようが勝手だがね」

「さっき女の人が見ていたよね」

「母親だろうね。彼女はずっと夜中に起きて彼を看病している。彼を産んでからずっと」

何か食べようかと思つていたが、もう食欲は消え失せていた。

「彼のような患者は多いのかな」

「多くはない。でも皆、多かれ少なかれ苦痛に耐えている。君は面会客だろう？ 君には分からないだろうね」

確かに分からない。

「想像もできないよ。僕には」

「幸せだね。感謝すべきだよ。君の両親と、君の代わりに苦痛に喘いでいる彼に」

「僕の代わり？」

「そうさ。どんな肉体を持つて生まれるのかは確率でしかない。今は全てのヒトが異常因子を持つているのだから、発現するかどうかは確率なのさ。彼が当たつて、君が外れた。それだけだ」

そつなのかも知れない。

「彼に何かしてやれる事なんて、僕にはないだろうね」
「あるとも」

意外な応えだ。

「彼も私も、そしてこの病院にいる全ての患者にとって、エリアが心の拠り所なんだ。君達クラッシーがエリアを大切に想い、エリアを支持するなら、それが彼のためになる」

成程、そうやってグループに引きずり込む手口か。ならば・・・

「でも君達のプランは感心しないな」

彼は少し驚いた表情を見せる。しかし平静を装って会話を続けた。

「そうか、君が見舞ったのはアキだね。彼は私達の班にもう一人二人仲間を欲しがっていた。私が計画のリーダーだから、私達の班の仕事は殆ど彼がやらなきゃならないからね」

こいつが主犯だったのか。

自販機で何か見繕う事にした。腹が減っては戦ができない。

コインを入れながら、真意を悟られない様に気を付けて会話を進める。

「僕は君達の計画に乗るつもりはなかったんだよ。もっとも警察に届けるつもりもないけど。でも、さっきの患者さんを知って、君の話を聞いたなら何かしなくちゃと思えてきたよ」

「そうか・・・有難う。この計画に参加するしないに関わらず、そう思っただけで嬉しいよ」

彼は悪人ではなさそう。むしろ善人の類だろう。善人が悪事を行うとすれば、それは正義感からだろう。彼の真意が知りたい。

「確かに州の政策は急進的過ぎる嫌いがあるし、弱者を軽視しているのかも知れないね」

「役人共は利権が大事、政治家は人気取りに必死で目新しい事ばかりやりたがる。誰も国民を見ていないだろう？ そんな政治じゃ駄目なんだ」

「民主的手法で政治を変える方法もあるよね」

「そう、確かにある。票を集めて我らの支持する政策を実施させればいい。でも今の政権はリベラルな政党が執っているのだし、他の

連中は更に悪い。我々の中から候補者を選出して、そいつに政治を担わせたとしても、そんな頃には世の中が変わった後だよ。遅過ぎるんだ」

「政治には時間が掛かる。だからこそ良いつて面もあるだろう？」

「そうだな。あるだろうさ。でも我々の問題にはその『良い面』は逆効果だ。役人や政治家達は箱物を作りたくてウズウズしている。

よつばどリベートが欲しいんだな。金は使えばなくなる。リアルで小中学校を作れば莫大な予算を使ってしまう。ランニングコストも巨額だ。エリアに回す金は減り、次第にゼロになる。そうさせてたまるか」

「僕もそう思うよ」

「君は見所がありそうだ。是非、アキの手助けを頼めないだろうか」
しめた！

「彼とはもう一度話をしたいと思っていたんだ。今、どこにいるのかな？」

「彼は京都市にいるよ」

「彼は京都市にいるよ」
アバンチュール
これは、とんだ夏の危険な旅になりそうだ。

第三章

僕はアキ君を追わなければならない。急遽、特急タンゴエキスプローラの座席を予約した。

近畿州の州都、京都市。

独自の計画をもって地下開発を促進させた都市で、地上は文化の都、地下は猥雑な迷宮という二面性を有している。

二十一世紀初年に施行された大深度法、つまり『大深度地下の公共的使用に関する特別措置法』は、東京での一度の利用を除いて適用される事がなかった。しかし、洪波期が到来し地下の利用価値が高まると、途端に乱用に近い適用がなされる。これは、地下四十メートル以下、且つ高層建築物の基礎部分より十メートル以下の深度であれば、公共事業に限り、土地所有者への保証なく利用できるという法律である。

法律の施行当初は、費用面や換気の問題で利用の目処が立たなかった。しかし、ゲル状のキチン質材を四方に塗りつける新しい工法が開発され、ごく簡便で強靱な地下空間の構築が可能になった事と、空気を清浄化してくれる大規模空気循環システムの開発に成功し、技術的な懸案は払拭された。

そんな中、京都市では一風変わった地下開発手法が採用される。旧市役所跡地を中心に、格子状に並ぶ九つの立穴を掘り、それぞれをつなぐ大きな横穴を掘ると、あとは民間に開発を任せたのだ。壱田永年私財法の再現である。掘ればそこはアナタのものという訳だ。開発を請け負ったゼネコン各社は、数々のサブコンを使って闇雲に掘り進み、できた端から分譲して行った。そして最後には、もう少し広い部屋が欲しい購入者がシャベルと猫車で掘り進める規模の拡張もなされて、縦横無尽に小径が張り巡らされるに至ったのだ。

信じられない程の短期間で巨大な地下都市が建設された理由はそこにある。

州と市が開発した大坑道を大通りといい、東西を結ぶ大通りを北から二条通・御池通・三条通とし、南北を結ぶ大通りを西から烏丸通・河原町通・川端通としている。昔からある地下街とは比べものにならない規模の巨大なトンネル。でもそれは地下第一層の話である。第二層には名前は同じでも規模をかなり小さくした通りとなり、三層では更に細くなり、それより下は通りと呼ぶにはおこがましいものになる。つまり、下へ行く程こまごまとした世界になる訳だ。

京都駅の一步手前にある二条駅で特急列車から降りると、地下鉄に乗換えて河原町御池まで移動した。地下都市中心部の直上である折角京都にきたのだから、神社仏閣や鴨川の向こうにある色街を見て回りたいものだが、彼はそんなところにはいない。やむなく中央昇降施設へと向かう。

地上に巨大な二十輪もの滑車があり、極太のワイヤーロープで二台の大型昇降機がつながれている。片方が上がればもう片方が下がる単純な仕組みで、重さが均等になる様にバラスト代わりの自動車を待機させている。

その昇降機は十分間隔で行き来する。体育館程はありそうな広さの箱に入り、ゆっくりと地下へ降りて行く。隣では同じ大きさの箱が上がっている筈だ。かつては土砂と資材を運搬していた施設である。僕は何故か興奮して、歩行者区画の手摺りにつかまって周りをキョロキョロとしていた。

しばらくして昇降機はスムーズに停止し、乗り込んでいた人や自動車が降り始める。スピーカーから流れる案内放送に急かされ、少し慌てながら箱を出た。

地下都市の第一層。

天井が高い。しかも全天が光を放っている。大木の桜が並木を作

つていて、地上世界よりも緑が多いと感じる程だ。

大通りには自動車が走り、多くの公共施設や商業施設が建ち並んでいる。大勢の人々が行き交い、地上の街と同じ印象だ。高級ホテルもある。ここなら僕でも長居できそうなのだが、彼の居場所はここではないだろう。諦めて更に地下へと進む。

中央エスカレータで地下二層、更に三層目へ。

二層目はプラントや企業ブースがあり、人々の働く場所である。

三層以下が居住区域であり、彼を捜すべき場所なのだ。

三層目は高級な住宅街で公園や商店街がある。宿もあるが、やや高級であるし、彼の拠点としては考え辛い。彼の目的に合致しないからだ。

彼は、自らが開発した新種のケミカル系プログラムをばら撒こうとしている。心情的にクラスAやBの人には被害を及ぼしたくない筈。クラッシーを専門に相手している販売グループに接触している可能性が高い。

そいつらは往々にしてエリア住人としてのスキルに疎く、クラスAやB相手では逆に遣り込まれてしまう。集金できなかったり、プログラムを解析されたりして商売にならないからだ。よってクラッシーだけを相手にしている。その迂闊さが狙い目で、取引の際にクлакしてしまい、紐を付けて常に行動を監視できる様にするつもりだろう。鵜飼いの鵜状態にするのだ。

アキ君自身は姿を変え、もしくはデコイを使って取引をするのではないか。子供が相手ではどんなチンピラも取引しない。取引場所は当然エリア内という事になるので、身体はどこに置こうが一緒なのだが、彼は『近くだと攻めているって感じて燃える』質なので、わざわざ京都市内まで出向いているのだろう。ケイコ先生をハッキングしていた時と同じ理由だ。

この地下都市が第一期完成を見た頃、公共施設群から閉め出され

る様に、繁華街は二条川端近辺に集まった。地下都市の北東部である。警察署は中央部に設置されたが、実働部隊はその地に置かれる事となった。そして、本当に悪い奴は逆の位置に居城を構え、都市の南西部、三条烏丸辺りに生息している。裏鬼門の最深部に。アキ君もきつと、そこにいる筈だ。

地下三層目の動く歩道を使って南西へ向かう。

この辺りまでくると宿泊施設や商店街は見かけない。ここから更に下へ行くには階段を使う事になる。躊躇われるが、小学生らしき女の子が降りて行くのを見て、まだ緊張するには早い事を知る。小心な自分を恥ながら階段を下りた。

地下四層目ともなると天井が低い。廊下というべき通路が縦横無尽に交錯している。完全に建物内のイメージだ。

どこからどこまでが公共の場所なのか分かり難い。歩いているうちに誰かの家へ上がり込んでしまいそうだ。今立っている灰色の廊下だけは個人宅の敷地でないだろうと解釈して、辺りを散策する事にした。

パタパタと足音をさせて子供達が走っている。狭い通路を自転車が行き交う。三層目が高級住宅街なら、この四層目は下町風の庶民の街だ。

お爺さんがベンチに腰掛けて夕涼みをしている。地下都市は年中気温が変わらない筈なのだが、南端に位置するこの近辺では当たり前風景なのかも知れない。剥き出しのキッチン質壁材につぼつかりと穴が開けられ、そこから一定の風が吹き出ているのだ。巨大な空気循環システムの送風口である。空気を南端から送り、北端から回収している。そのCO₂やNO_xを除去してO₂を加え、更にはフィルタでダストや菌類を濾過して、また南側から送り出している。ファンの轟音さえ気にならなければ、最も新鮮な空気が味わえる場

所なのだ。

宿泊施設を見付けた。INN『蓮亭』とある。

ブティックホテルとビジネスホテルの中間みたいな存在だろうか。ドアを開けて中に入ると、ロビーには空き缶や古新聞等のゴミとしか思えない物が積み上げられている。本当にホテルなのかと疑いたくなる程だ。

ようやくカウンターまで辿り着き、宿泊を希望する旨を述べる。

女主は怪訝そうな顔つきで「お支払い方法は？」と聞いてきた。若造が何をしにきた、といわんばかりだ。

僕はここぞとばかりに黒光りするプラスチックマネーを見せる。高額所得者が持つプレミアムカードだ。祖母に手配して貰った命綱である。女主は露骨に表情を変えて、深々とお辞儀をした。実に良い気分だ。

祖母は「人命に関わる場合に金を惜しむな」といつてくれた。しかし、中古の戦車を買ってしまう程のカードをよくも私に持たせてくれたものだ。事が終われば色街へ行つて、あんな事やこんな事をしてやるつもりだ。

女主が機嫌を良くしたところで、十二歳ぐらいの少年が泊まっていないか確認する。残念ながらいないそうだ。近所の宿泊施設も調べて欲しいとお願いした。謝礼は弾むと付け加えて。

それから地下五層目へ行く方法を聞いてみたが「どの入り口も個人宅につながっていて、階段の下には扉があり鍵が掛かっている」といわれてしまった。まあそんなところだろう。

宿で一番太い電源と通信設備が備わっている部屋を注文する。一番奥にあるツインルーム。客間と寝室に分かれており、広めのユニットバスもある。鞆を置いてワークステーションと外部記録用端末ストレージデバイスを取り出す。重たい思いをして持ってきた僕の武器だ。

ソファーに座って起動確認をしていると、お腹が空いている事に気付く。ルームサービスを頼むと、やっていないと申し訳なさそうに謝られた。やむなく自販機で何か見繕う事にした。

自販機コーナーへ行くと、食べ物には『エネルギーパテ』しかない。一体いつの時代なのだ？

ベンチに先客が一人、不味そうにパテを食べている。スキンヘッドの小柄な人物で、何かスポーツをしている様な筋肉質の体つきである。三十歳ぐらいだろうか。

「失礼、ご一緒させて頂いてもよろしいでしょうか」

「かまへんよ」

彼は『ネジ』と名乗った。こちらにも名乗り、食事を共にする。

「ネジさんはどちらから？」

「大阪からですわ。しかし、京都人つてのは喰い物は何でもエエんかいな。大阪やったら、こないなモン喰わしよったゆって訴えらるで」

「確かに不味いですね。にちゃにちゃして歯に付くのが気持ち悪いです」

「喰い物だけやない。このホテルは最悪やで」

「確かに場末って感じですよ」

「それをいうなら『地の底』やな。陳列されたゴミが物語っとる」

「一体何なのでしょうね。このゴミの山は」

「女主人の癖やな。一種の病気や。年老いた孤独な女性で、収入が安定していない場合に発症するらしい。ケチケチ病や」

「その病気になるゴミを溜めたがるのですか？」

「本人にとってはゴミじゃないんや。何かに使える可能性のある物なんやな。昨日、鼠の死骸があつたんで掃除してくれ言ったら、盗むなよと怒鳴られてしもった」

「死骸も保存するのですか？」

「そうらしいで。何に使うんやと聞いたら、しっぽの皮を乾かして

鉛筆のキャップにするとかいうとつたな」

「それは・・・逆に発想が豊かともいえますね」

「まあ、可哀想な人やね。寂しいんやろうな。人が密接して暮らす街では逆に孤独になったりするモンや。誰も責めらへんで」

「そうなのかも知れない。社会から疎外されてしまえば、人はヒトとして成り立たなくなる。心の形を保全できなくなるのだ。」

「しっかしお互い難儀やな。兄ちゃんは何でこんなトコきたんや」

「人捜しですよ」

「一緒にいな。儂も人捜しや」

「そうなのですか。ちなみに誰を？」

「名前は分らん。まだ逢うた事ないからな」

「？」

「実は嫁さん探しや」

「お嫁さんを？」

「そうや。大阪の気の強い化粧のケバい女と違ごうて、京都人の別嬪さんを見付けるんや。それも地上におる女はあかん。今でも地下で暮らしとる様な気骨のある女がええ」

「地下住民に拘るんですね」

「せや。儂も地下生まれの地下育ちや。大阪の天王寺地下都市。地上が暮らし難いから地下行つて、やっぱり地下が嫌やから地上に戻る様な連中は好かん。そんなんは故郷を愛しとらん証拠や」

「かなり厳格な基準みたいだが、候補者はたつぷりいるだろう。未だに地下で暮らす人は多い。」

「それで、候補は何人できましたか？」

「ゼロや」

「どうして？」

「実はな、兄ちゃん笑わんといてよ、儂、女の人に声を掛けられへんのや」

「それは・・・厳しい旅ですね」

「そうや、兄ちゃんのいう通りや。地下四層目を北東の繁華街から

ここまで隈なく歩いた。歩いたいうより走ったんやけど」

「走った？」

「儂、女の人と目を合わすんも怖いからな。走り回ったんや」

それでどうやって嫁を探すのだ。

「かなり時間が掛かったのでは？」

「回れるだけ回ったさかいな、五日間かった。でもここで終わり。もう先があらへん」

「そうなりますね」

「金もないし、お先真つ暗や」

彼はエネルギーパテをどんどん食べ進め、空箱を量産している。

「健啖家でいらっしゃるんですね」

「そんな立派なものと違うけれど、よう食べる奴やとはいわれるな。それで金もかかる。何かエ工仕事ないかいな」

どうやら純朴で、物凄い持久力の持ち主らしい。この人に手伝いを頼めないだろうか。

「ネジさんのエリアスキルはどれぐらいですか？」

「馬鹿にしたらあかんで。儂は地下の人間や。大阪でもエリアスキルはピカイチやで。いつか余所者と喧嘩した時は、街ごとプログラムを書き直して、散々怖い目に合わせたったモンや」

話半分にして聞いておくべきだろう。でも人手は欲しい。

「では、僕の人捜しを手伝って頂けませんか？」

「かまへんで」

彼は条件を詰める前に快諾してしまった。迂闊なところは憎めないが、マイナス要因でもある。手伝って貰うにしても事細かに指示をすべきだろう。

「いいですか、まず報酬ですが、ネジさんのこのホテルでの滞在費と食費を私が持ちます。探し終えたら成功報酬は別途払いましょう。ネジさんがもう一度この地下都市を回れるぐらいの額を」

「ヨッシャ、任しとき」

変わらず軽いノリである。

僕はある程度まで事情を説明した。そして事の重大さを知ったネジさんは「そんな話やったら金はいらん。ただで手伝う」といつてくれたが、改めて報酬を約束し「仕事として、責任を持って行動して欲しい」と念を押した。

時間が惜しい。早速行動である。まずは僕の部屋に移動し手順を説明する。

京都市は二つのエリアプラットホームを平行して運用している。地上世界を模したエリア、そして地下都市を模したエリアである。勿論二つはつながっているし、他の地区のエリアともつながっている。我々が行動するエリアは地下都市の方である。

まずケミカル系プログラムを売買しているグループを探す。しかもクラッシーを相手にしている輩だ。このグループがどれくらい存在しているのか。また、それぞれの縄張りや構成員の数を調査する。この作業までを手伝って貰う。

それ以降は微妙な駆け引きが必要になる。例のプログラムをもう持っているのか、入手を交渉中なのか、アキ君が売り込みそうな相手なのか、彼らしき人物に逢った事があるのかなどを調べなくてはならない。

ネジさんには、エリアでは必ず姿を変える事、客を装う話術、解毒プログラムの使い方、連中に紐を付ける方法、僕とのホットライオンを常に維持する事を理解して貰い、二人でエリアに入る事にした。

僕にとっては久しぶりの同時複数潜入である。マルチエントリ一度に九人のデコイを使って、効率良く情報を集める。そのためのワークステーションだ。

若干緊張しながらエリアの地下都市へ

エリアの地下四層階は実物より多少広々としていた。厳密にリアル世界を表現する必要はないのだから、この方が住民の希望に添っ

ているのであろう。

ネジさんとはこの『蓮亭』の場所で待ち合わせている。エリアではゲームアーケードになっていて、中では宿の女主と同じ顔をしたデコイが店番をしている。

しばらくして、彼が入ってきた。

「遅くなった」

「いえ、僕はエントリーが早いのが取り柄なんですよ。ところで、ここから地下五階に行くとしたら、入り口はどこにありますかね」
「この近くやったら入り口はざっと十力所やな。リアルでの話やけど」

データを受け取る。流石、何日も走り回った人は違う。

「ネジさんはどこから潜りますか？」

「いや、僕はまず大阪のエリアへ戻って、その手の輩の情報を聞いてくるわ。仕事柄、知り合いは多いからな」

「ネジさんの仕事って何ですか？」

「僕は坊主や」

商売敵だったとは。

「僕の家は神社なんです」

「おお、二十四世紀の神仏習合やな。珍しい縁もあったモンや」
至極納得させられる一言を残して、彼は去ってしまった。

さて、地下五層目への入り口が十力所なら数が合う。デコイ達と手分けして、潜り込む事にした。

地下五層目は公然と存在している訳ではない。それはリアル、エリアのどちらの世界でも変わらない。ただ、そう名乗る事自体は個人の勝手である。リアルの四層目に住んでいる者が所有地に穴を掘り、その穴蔵を五層目だと言い張っても構わないだろう。同様に、民間運営のエリアが五層目を名乗っても咎められない。

エリア@京都地下都市第五層。それは文字通りアンダーグラウンドな世界である。運営者は意図的にリンクの数を減らして、一定の

目的を持った者しか訪れない様にしている。リアル世界や公営のエリアとは違い、官憲の目はそこまで届かない。イリーガルな空間というより、もはや独立国家に近いだろう。

五層目への降り口に足を踏み入れる。一瞬、目の前が暗転し、見知らぬ空間へと移送された。そこは実際には存在しないどこかである。閉ざされた天があり、薄暗く、雑然としている。地上世界でいえば繁華街の裏通りの様な感じた。風俗店、ギャンブル場、クラブ、ジャンクショップが軒を連ねている。ドットの粗いネオンサインやそこら中にある落書きが街のチープさを現している。

手分けしてエントリーしたデコイ達もここに移送されているようだ。こんな街の情報集積地はクラブかギャンブル場だろう。デコイ達にはクラブへ行かせて、自分自身はギャンブル店に行ってみる事にした。

ひととき目立つカジノへ入る。店の前に立つと、強面のドアボーイが扉を開けて招き入れてくれた。彼はこの僕が高校生だとは思っていないだろう。今はスーツを着たサラリーマンに扮している。

店内は多くの客で騒然としている。中央にルーレット台が一台、ブラックジャックテーブルが二台、バカラテーブルが五台、そしてポーカー台が一台ある。それ以外にはバーカウンターがあつて、中ではバーテンダーがシェーカーを振っている。

エリアマナーをこの店でしか使えない独自の通貨に替える。単位は\$で、1\$が千円である。遊び終わって再度エリアマナーに換金する場合には5%のコミッションを取られるそう。取り敢えず五十万円分の換金を願い出て、金色に光る100\$チップを五枚受け取った。このまま帰っても再換金時に5%の手数料を取られるのだから、既に二万五千円の損害である。

ルーレットを見てみる。ホイールが自然な回転をしている。イカサマはしていなさそう。二人のプレイヤーが少額のチップをい

んな場所に賭けて遊んでいる。勘の善し悪しが勝負を決めるゲームで短時間遊んで帰るには適している、と本には解説されていた。長居して店の様子を伺うのが目的なのだから、簡単にお金を消費したくはない。勘の勝負なら必ず負ける自信があるのだ。

最も賑わっているのは『西洋風オイチョカブ』のバカラだが、これも同じく勘が頼りのゲームであり、避ける事にする。

ポーカーのテーブルを見る。ハウスルールはテキサスホールデムを採用しているらしい。このルールが複雑で、見ていてもさっぱり分らない。とにかく自分に配られた二枚のカードと、フロップと呼ばれる場にオープンで置かれるカードを組み合わせて役を作るみたいだ。

興味があつたのは『エリアでもポーカーフェイスが存在するのか』である。どうやら、存在するみたいだ。ただし、皆がランダムに表情を変えていて、手札との関連はなさそうだ。だから全く参考にならない。テーブルに座っている五人が泣いたり笑ったり表情をコロコロと変えるので、端から見ている分には面白い。滑稽な出し物を観ている感覚だ。

何れにせよ、客同士でチップを取り合うゲームは避けた方が良さだろう。トラブルに巻き込まれては何にもならない。

ブラックジャックのテーブルを見てみる。

子供の頃『21』とか『ドボン』という名称で遊んだ記憶があるカードゲームだ。これなら僕にもできそうだ。

ベットの上限と下限が表示されていて、二台のうち一方は1〜20\$。もう一方は5〜100\$とある。安い方のテーブルは満席なので、やむなく高い方のテーブルに座る。

エリアの賭場ではイカサマが簡単にできてしまう。店も客も同様にだ。だが商売の基本は変わらない。信用が第一であり、信用されない店はすぐに廃れる。店がイカサマをして儲けているという噂はその日の内に顧客全員に広まり、誰もこなくなるだろう。一方、店

側も客のイカサマには充分に配慮している。手練れを揃え、監視を怠らない。結果、リアルにあるカジノよりイカサマは少なくなっている。客にも手練れが多い。手練れが多いという事は、自然とディープな情報が得られる可能性が高くなる訳だ。だから僕はここに来ている。

若い女性のディーラーが慣れた手つきでシャッフルしている。それを三人の客が待っている。右端からお爺さん、お婆さん、おばちゃんの間である。僕は軽く会釈をして、左端の席に着いた。

ディーラーは一定の手順でシャッフルを終え、お爺さんにカットをさせた。

最初のワンゲームはノーベットで行う。プレイヤーは、そのカードの並びから次のゲームを憶測する。

「ベットプリーズ」の掛け声を聞いて、客達は掛け金をテーブルに置く。

僕は5\$チップを一枚置いた。

ディーラーは素早い手つきでカードを配る。まずテーブルも右端の人からカードをオープンにして配り、そして自分の前にもオープンにしたカードを一枚置く。二枚目も左端からオープンで配り、最後に自分の二枚目のカードを伏せて置く。

ディーラーのカードは一枚目が2のカード。二枚目は伏せてある。お爺さんのカードはキャラクターカードと7。キャラクターカードは全て10で計算するので、足して17である。まずまずの数字だ。

「ステイ」と宣言し、次の人に移る。

お婆さんのカードは5と4。足して9である。

「ヒット」と宣言し、カードが一枚、オープンで配られる。

10であった。足して19。かなり良い数字だ。お爺さんと一緒に喜んでいる。夫婦なのかも知れない。

「ステイ」と宣言し、次の人に移る。

次はおばちゃんの番だ。カードは8と2。足して10である。

この店のルールではいつでもダブルダウンができる。ダブルダウンはヒットを一枚しかできないが、代わりに賭け金を倍にできるというオプションである。最初の二枚が足して10か11の場合は特にチャンスだ。次の一枚でバーストする事はないし、21になる可能性もある。

おばちゃん是他の人に配られているカードを見回して、ダブルを宣言する。チップが足されて10\$になった。

「ダブルはワンカードオンリーになります」とディーラーがいい、オープンでカードが配られる。

エースであった。エースカードは1か11で計算するので、足して21となる。最良の結果だ。おばちゃんは「ヤッター」と叫んで、僕の肩をポンポン叩く。ギャンブルは楽しめば勝ちなのだから、喜ぶべき時は大いに喜べば良い。このおばちゃんの態度は正しいといえる。

僕の番である。カードはエースが二枚。貴重なカードが重なってきてしまった。最初の二枚がエースと10以上ならば、ディーラーが同様に21である場合を除いて、その場で勝ちとなり、賭け金の1・5倍のリターンを得られる。いわゆる『ブラックジャック』という役だ。

さて困った。このままでは足して12である。ディーラーがバーストする以外に勝てない。このままヒットしても10以上のカードがくれば同じく12のまま、更にヒットしてもう一度10以上なら22でバーストしてしまう。逆に10以上が続いてくるならスプリットする手がある。二枚の内どちらかに10以上が来れば21なのだから、引き分ける事はできそうだと考え「スプリット」と宣言した。

重ねられたカードを横に並べ替え、同額の賭け金を追加する。ディーラーがカードを配る。3であった。足して4か14である。テーブルをトントンと叩いてヒットを宣言する。これがやってみ

たかったのだ。

更にもう一枚が配られる。また3だ。足せば17。もう充分と判断し、手の平を水平にして横に振る。ステイの宣言だ。気分が乗ってくる。

更にもう一勝負残っている。

ディーラーがカードを配る。今度はキャラクターであつた。これで21だ。最初の二枚ではないのでブラックジャックにはならないが、予想通り片方だけでも来てくれて嬉しい。

これ以上のヒットはできないので、自動的に次に移る。

ディーラーのオープンカードは2であつた。伏せてあるカードが開けられる。

「11です」

開けられたカードは9であり、ディーラーは足した結果のみを告げる。

プレイヤー側は面白くない。10と数えるカードは多い。一回のヒットで21になってしまふ確率が30%以上あるのだ。

ディーラーは自身の手札が17以上になるまでヒットしなければならず、また17以上になったらヒットを止めなくてはならない。機械的に進行させて行く。

「16・・・19です」

最初のカードは5、次のカードは3であつた。ここで終了である。お爺さんはチップを没収される。お婆さんはドローなのでチップを取られない。おばちゃんは見事ダブルダウンで倍にした10\$分のチップをせしめた。

僕はスプリットをして勝ちと負けてドローである。でもスプリットにしなければ、キャラクターカードがディーラーに行ってしまう、21を作っていただろう。

この様に、テーブルの左端に座る人の責任は重い。このゲームのコツは『いかに自分がバーストせず、ディーラーをバーストさせるか』にある。プレイヤー同士はチップを取り合わないので、結託し

てディーラーをバーストさせる事に集中しなければならないのだ。

次のゲームが始まる。

皆がベットを済ませると、素早い手つきでカードが配られる。ディーラーの手札はエースがオープンになっている。

「インシユアランス？」と聞かれる。

プレイヤーは賭け金の半分を出して、保険に入る事ができるといっているのだ。ディーラーがブラックジャックである可能性は30%である。ブラックジャックなら保険金も賭け金も戻ってくる。ブラックジャックでなければ保険金は没収されるシステムだ。

僕は人生弱腰で行こうと決めているので、当然保険に入る。5\$賭けているので、2\$50¢をテーブルに置いた。

僕の様子を見て、おばちゃんはイーブンマネーを宣言した。おばちゃんはブラックジャックを出しているのだ。ディーラーがブラックジャックでなければ、賭け金の1・5倍が貰えるのだが、ブラックジャックだとドローになってしまう。そこでイーブンマネーを選択すると、賭け金と同額のチップが即座に支払われる。

「バックカードを確認します」

ディーラーは伏せてあるカードの端をチラと見て、ゆっくりと表を向けた。カードはキャラクター。ブラックジャックである。

保険をかけた僕はドロー。おばちゃんは賭け金の一倍の配当を既に受けている。お爺さんとお婆さんは、自分の手札を完成させる事なく負けとなる。

三回目のゲームは特に語るべき事もない。ディーラーのオープンカードが9だった事もあり、プレイヤー全員が19以上を狙ってバーストしてしまった。プレイヤーはバーストした時点でチップを没収されてしまうので、ディーラーは自分の手札を完成させる必要もなく勝ちを確定させた。

ここまでプレイすればディーラーの有利な点が見えてくる。一つは、客が先にヒットする仕組みなので、そこでバーストしてしまう可能性がある事だ。バーストすればその時点でチップを回収されてしまう。その後でディーラーがバーストしてもディーラーの勝ちに変わらない。もう一つは、ディーラーがブラックジャックならばその場でゲーム終了となり、客にヒットさせてドローまで持ち込む機会を奪っている事である。

ディーラーの不利な点もある。ディーラーは手札が17以上になるまでヒットしなくてはならず、17以上になればそれ以上ヒットできない。たとえプレイヤー全員が13とか14であつたとしてもだ。バーストしてしまう確率は30%程度と意外に高い。

四回目のゲームの開始である。

みんな頭に來たらしく、黒い10\$チップを五枚づつ積んでいる。ダブルダウンがあるのでテーブルの実質的上限である。冷静さを失えば必ず負けるのがギャンブルなのだが、一人でクールを気取っていても目立ちそうだったので、お付き合いして50\$分のチップを積んだ。

またしてもディーラーのオープンカードは10と良いカードある。声も弾んでいる。

「バックエースを確認します」

ディーラーの手札がブラックジャックであればゲーム終了である。プレイヤー達は祈る様な気持ちでディーラーの手元を見ていた。伏せてあるカードの端を指で弾く様にして見るのだが、一度見て、もう一度見直した。そして「エースではありませんでした」という。これは珍しい事ではないのか？

「今、二回見ましたよね」

おばちゃんに同意を求めた。

「そうよね。ちょっと奇妙だわ」

やはり間違いない。二回見た事はどういう意味を持つのか。

チラと見て何のカードなのか分からなかったと考えるのが自然だ。とすれば11以上は排除できる。キャラクターカードを見間違える人はいない。2から10のカードでも何のカードなのかしっかり確認する理由はない。進行上、問題ないからだ。ただしエースは別だ。エースならそれを表に向けて、ブラックジャックを宣言しなくてはならない。でもエースではなかった。だとすれば、エースに似たカードで「ひよつとしてエースだったかも」と再確認する必要があった事になる。エースに似たカード？

「エースと見間違えるとすればどのカードですかね」

おばちゃんはキツパリと答えた。

「4でしょう。端を見ただけならどっちも尖ってるから、見間違えるなら4だわ」

得心がいった。4ならば足して14だ。ディーラーがバーストする可能性は50%以上もある。これはチャンスだ。

プレイヤーの手札は全員が低い数字ばかり。揃ってダブルダウンを宣言した。

ディーラーが伏せカードを開けると、やはり4であった。そして一枚ヒットして、バーストした。このゲームでディーラーは四十万も損を出したのだ。

それからのディーラーは散々だった。可哀想になる程だ。できるだけチップを弾んだが、にこりともせず、コンコンとテーブルを叩いて感謝の意を示すだけであった。

ゲームはシューターの中かなりのカードを残して終了となる。エリアのカジノでは、常にカウンティングを注意しなくてはならない。残りのカードに何が何枚残っているのか数えるなんて誰にでもできるし、店側としても防ぐ方法がないのだ。よって五組のカードを使い、更に残り枚数を増やす事でそれを回避している。

テーブルはシャッフルタイムとなった。十分以上かけて丁寧にシャッフルするので、僕とおばちゃんはカウンターに移った。

「お互い儲かりましたね」

「そうね。こんな事は珍しいわ。カジノのゲームはどれもお店側が有利になっているの。でも、それはほんの数%だけ。特にブラックジャックは戦略を練れば1%未満にできる。換金時のコミッションは避けられないけれど、店側も今回みたいにミスしてくれるんだがら、おあいこね」

ギャンブルは各種ある。宝くじは60%近くも控除率があり、胴元がこっそりと儲かる仕組みになっている。公営レースは20%だ。それに比べればカジノゲームはましなのかも知れない。店側の控除率はルーレットでも5%程度、バカラでその半分、更にブラックジャックならば1%以下。コミッションを考慮してもまだ有利だ。もっとも、ギャンブル全般において胴元が儲かる仕組みになっているのだから、冷静に考えればこれ程馬鹿らしいものはない。賭け事で現実性が高いやり方を『鉄板』と言うが、賭け事をしない事が一番手堅い『鉄板中の鉄板』なのだ。

彼女はバーテンからグラスを受け取る。

「何を飲んでらっしゃるのですか」

「これ？ 眠気覚ましね」

ケミカル系のプログラムの様だ。

「どうやって注文するのですか」

「普通に。バーテンさんに頼めばただで貰えるわよ」

こっそりと解毒ソフトを準備して、バーテンを呼んだ。

「バーテンさん。どんな飲み物がありますか？」

「冷たいものを各種取り揃えております。呼び方は様々ございますが、冷たいモノ、とても冷たいモノ、最高に冷たいモノの三種類でしようか」

覚醒を促す物をそう表現するらしい。エリアで眠ってしまえばリアルに戻ってしまうのだから、お店としてもその系統の物を出すのが利益につながるのだろう。

「じゃあ、冷たいモノを下さい」

「かしこまりました」

バーテンダーは棚から細長いグラスを取り出し、青い蛍光色の液体を注いでこちらに渡した。

飲む振りをして中身を解析する。

疲労を感じさせるアデノシンの働きを阻害するプログラムの様である。コーヒーに入っているカフェインと同じだ。

無力化して一気に飲み干した。冷たい舌触りと甘い香りだけがして、特殊な効果は何もない。

「うん、美味しい」

「良かったわね」

「これも良いのですが、逆のタイプはないのでしょうかね」

「逆っていうと、鎮痛作用や多幸感があって、ほわーんとする方ねでもあれはすぐ眠くなってしまうって、リアルに戻っちゃうわよ」

「実は僕、内耳が悪い性分です。こうやってエリアにいる時にはそんなに気にならないのですが、リアルに戻ると結構辛いんですよ。こっちで飲んで、その効果がリアルでも持続するものってありませんか？」

「この辺りの店ならどこでもケミカルを扱っているけれど、そんな話は聞かないわね」

「違う場所ならありそうですか？」

「そんなものがあるとしたら、やっぱりあそこかしら」

「どこです？」

「この地下五層目とは違う五層目よ」

「何ですかそれ？」

「クラッシー専門に商売しているケミカル屋が一件だけあって、四層目から誰も気付かない入り口を通って行くらしいの」

「誰も気付かない入り口ですか？」

「そう、どんなにスキルを駆使しても分からない入り口。でもクラッシーなら、それも根気よく探せば見付かるらしいわ」

「実際に行った人はいるのですか？」

「子供が見付けたって噂を聞いた事があるの。それに私の知り合いでも、特にスキルの未熟な奴が行ったっていったわね」

「その人に逢えますか？」

「逢えないわ」

「どうして？」

「貴方の事は気の毒に思うけれど、アイツはもう死んでしまったから……」

それは残念。でもかなり有力な情報を得ることができた。一旦戻って作戦を練り直した方が良さそうだ。

おばさんに丁寧な礼を述べて、店を出る事にした。

デコイ達の様子を調べる。どうやら僕はゲームに夢中になり過ぎていたらしい。大変な事になっている。

一体はずつと壁に向かったまま足踏みしている。

一体は人にぶつかりながら直進している。それも頭からバケツを被らされて。

一体はスローモーションでムーンウォークをしている。ワークステーションにかかる負荷が大き過ぎたらしい。お陰で人集りができている。

全員に四層目に戻る事を命じた。

こっちの一体は人間テストを受けさせられている。これは最悪だ。急いで僕自身と入れ替わった。

クラブの一角らしい。喧騒の中、店員や客達に囲まれている。

「おいコラ、よく聞けよ。俺は嘘吐きな人間なんだよ。さて、それじゃ俺が今いった言葉は本当か嘘かどっちだ。『本当』なら俺は『嘘吐きでありながら本当の事をいった』事になる。『嘘』なら俺は『嘘吐きでないのに嘘を吐いた』事になる。さてどっちだ」

エピメニデスのパラドックスか？ 古典的なテストをしてくれる

ものだ。

「貴方の顔を見ると正直者には見えませんね」

「そんな事は聞いていないんだよ。嘘吐きだつていつている俺の言葉自体は本当か嘘かどっちだと聞いているんだ」

「本当ですね」

「ほう、じゃあ俺が嘘吐きだつていうんだな」

「ええ、貴方は嘘吐きです」

「じゃあ『俺は嘘吐きだ』といった事はどうなるんだ。その事は本当になつてしまふぜ」

「ええ、貴方は本当の事を喋りました」

「俺は嘘吐きだといったばかりじゃないか」

「ええ、そういいましたけど、何か？」

「何かじゃねえ。おかしいじゃないか」

「おかしくはありません」

「じゃあどういう理屈なのか説明してみろよ」

「では説明します。貴方は『俺は嘘吐きだ』といった。でもこれは貴方が『常に嘘を吐いている』といっている訳ではありません。頻繁に嘘をいうけれど、たまには本当の事もいう人間なのだといっているだけです。よつて、貴方は嘘吐きだけれど『俺は嘘吐きだ』といったその言葉は本当だった、という訳です」

「おお」

周りに歓声が上がる。この程度のテストだったらデコイに任せて良かったかも知れない。現に、先程答えたのはデコイに仕込んである問答方法なのである。

エピソードのパラドックスに陥る一連の質問をされた場合、相手が選択を迫つたら肯定的な方を常に変ばせる。また、その選択自身を非難をされれば、それを否定するだけだ。そして説明を求められれば先程の通りの説明をしてやれば良い。

「じゃあこれはどうだ」

他の男が歩み寄つて話す。

「とある村に一件の床屋がある。その床屋は自分で髭を剃らない村人全員の髭を剃っている。自分で髭を剃る村人の髭は剃らない。さて、その床屋自身の髭は誰が剃るんだ？ 床屋自身が剃る場合は『自分で髭を剃る人の髭を剃らない』定義に反するし、床屋自身が剃らないなら『自分で髭を剃らない人全員の髭を剃る』定義に反するぞ」

今度はラッセルか。

「誰も剃らない」

「どうして？」

「その床屋は女だから」

皆黙ってしまった。気の利いたジョークのつもりだったのに。

「こいつはかなり捻くれたデコイだな」

誰かがそう話す。酷い言い草だ。途中から僕に代わっているのに。「どうしてデコイだなんていうのですか？」

「そりゃ決まっている。こんな質問に真面目に答える奴はデコイしかない。違うかい？」

それはそうだ。

逃げ出す様に店を出た。笑い声が聞こえる。笑われるのには慣れているが、デコイだといわれるのは悔しいものだ。人間性の全否定だから。

エリア四層目のゲームアーケード『蓮亭』に集まった。デコイを一体つつ調べて、紐が付けられたりしていないか確認する。運良くイタズラはされていない様だ。

彼らの拾ったデータの解析をしてみる・・・してみるんじゃないかった。後ろから蹴られたり物を投げつけられたりして、それでも無反応のままだなんて。怒ったり、せめて振り向く事ぐらいはして欲しい。余計な事を喋っていない分まだましだったと考えるべきなのだろうか。

九体のデコイ達を消去した。念の為でもあるし、使い物にならない

い事が分かったからでもある。アキ君のデコイは優秀だった。早く彼に逢いたいものだ。

ネジさんからホットラインのコールがきた。

「いよう、どんな感じ？」

「いようじゃありませんよ。落ち込んでいます」

「そらアカンな。テンション高くせんと、人間、何もできへんで」

「ところで、何か情報を拾えましたか？」

「おう、ちよつと待っててや。すぐに行くからな」

しばらくして袈裟姿のネジさんがこちらにきた。

「そつちはどうや？」

おばちゃんから得た情報を話す。

「そうか、こつちも同じ話や。知り合いにチンペーいう奴がおつてな。これがまたどう仕様もない奴なんやけど、このエリア四層目から、普段は行かれへん五層目に行った事があるらしいんや。そこには頭の悪そうなケミカル屋がおつて、そいつから名前だけは大層なプログラムを買った事があるそうや」

「その入り口はどこなのか分かりますか？」

「それが憶えておらんそうや。チン坊は阿呆やから、三分も経てば大概の事は忘れてしまふんやな」

「入り口を見付けた時の状況は？」

「何でも、歩いてたらちよつと変なところがあつて、何かをどうにかしたら入り口があつたらしいで」

そんな情報では全ての事象が当てはまってしまうではないか。でも彼は頑張つて情報を集めてくれたのだ、贅沢はいうまい。

とにかく、この辺りを回ってみる事にした。エリアでも夜は暗くなるのだが、見えなくなる程ではない。でも何を探せば良いのだろう。

ネジさんは走っている。袈裟姿をして下を向いたままで。もう深夜なので誰もいないが、人が見ればどう思うだろう。見てはいけな

いものを見たと思うに違いない。離れている事がせめてもの幸いだ。

当然何も見付けられない。道端に置いてある物、例えばポストをずらそうとしたり、マンホールを開けようとしたりしてみたが、動かす事はできない。エリアにはどちらも必要ない物だ。街の風景として描かれているだけなのだから、当然である。

当たり前の手法として、この近辺を構築しているプログラムを全て解析してみたが、どこかヘリンクしている場所は存在していなかった。ネジさんから教わった入り口を除けば。

かなりの時間を費やしたが何も得られずに終わった。もう明け方である。二人ともリアルへ戻って、眠る事にした。

リアルのINN『蓮亭』

翌日は昼過ぎになってから集合し、これからの方策を話し合う事にした。

「昨夜はさっぱりでしたね」

「そうやな。こう言うのを『腹減り損のくたびれ儲け』って言うんや」

「損はしなかったのですがね」

「何が儲かったんや？」

「カジノで少し」

「博打かいな。アカンでそれは。仏の道に反するで」

「そうですか？」

「そうや」

「江戸時代には寺社で富くじを売ったりしていたじゃないですか」

「それは・・・そうやね」

「それで今はギャンブルが駄目だなんて、理屈が通りませんよ」

「理屈ではそうやけど、でもアカン」

「どうして？」

「ギャンブルは金を捨てる様なモンや。金は喰い物を購うためにあるんやで」

「成る程。ではこのお金でお腹いっぱい食べましょうか」

「それは賛成や」

ネジさんに近くの店を紹介して貰う。何でも、雰囲気のある店を知っているそうなので、そこへ行く事にした。今日は土用の丑の日だから鰻でも良いし、多少お金を浪費しても贅沢をしたい気分だ。

しばらく歩くと『食事処 森重』という看板が見えてきた。店の前には古びたサンプルのショーケースがあり、昔は白かったであろう暖簾が掛けられている。彼にとって「雰囲気のある」とはこういう雰囲気のことらしい。

白いのカウンターに丸いパイプ椅子が十席程並んでいる。お昼時を過ぎているので客は我々だけだ。壁一面にメニューが貼られていて、どれも驚く程安い。

「さあ食べましょう。ここなら何をどれだけ食べて頂いても結構ですよ」

「ホンマか。有難いなあ。マスター、コッチの高い方から順にこの辺まで作ってえな」

店のマスターは彼を知っているらしく「またか」的な反応を見せて応じた。

「僕はこの『スタミナカツ定食』を下さい」

マスターは「ハイ」と応えて忙しく作り始めた。

「ここは初めてじゃないんですね」

「そうや。この辺で一番安くて、一番ボリュームがある店がここや」

「味は？」

「旨いで」

「お気に入りなんですな」

「そや。僕は喰いモンの店には煩いんや。旨くても値段が高い店はアカン。安くても不味かったら許せん。安くて旨い店は数あるけれど、安くて旨くてボリュームもある店は貴重やで。それこそ金剛石

みたいな存在やな」

カウンターの奥でマスターがニヤリとした。

「ほんでここが好きなんや。それにな、ここは大盛りにしたらご飯とおかずが五割増しになる。普通はご飯だけやろ。そこがまた良いんや。ああマスター、全部大盛りで頼むで」

マスターは「分かっていました」と頷く。

しばらくして「まずこれを」と大きな丼に入った豚汁がきた。

具は数片の豚コマ肉と豆腐、それに葱を少々。後は汁だけだが、トロリとしてコクがある。七味が合いそうだ。

次に平皿に乗ったご飯がくる。大盛りにしただけあつてずしりと重い。

続いて四百五十円＋大盛り百円の『スタミナカツ』がやってきた。薄くて大きなカツが三つ、刻みキャベツに乗っている。酢醤油が入った小皿が添えられている。

カツの真ん中の一片を酢醤油に浸し、口に入れる。餃子の中身をフライにした物の様だ。大蒜が効いていて、豚のミンチ肉がほんのり甘い。ご飯を掻き込み、続けて豚汁を飲むと実に旨い。千切りのキャベツが良く合う。添えてあつても良さそうなお新香やレモンやパセリがないが、シンプルで力強い食べ物だ。

ネジさんは『ミックスフライ』やら『牛オイル焼』やらを懸命に食べている。まだ他にもやってくるのだらう。流し込む様に口に入れている。

「ご飯は一回までお代わり無料や」と彼は付け加えてくれたが、それは無用な情報である。こんなに美味しい物を残すなんて罪悪以外の何ものでもないが、全てを胃に収めなくてはならないかと思うと気が滅入る。僕も何かに急ぎ立てられているかの如く食べ進めた。

結局、ご飯のお代わりをしてしまった。少しフラつきながら道を戻る。

「物凄く食べましたね」

「すまんかったなあ。ご馳走さん」

「いえいえ。お金は全然掛かりませんでしたよ」

「お前さんも結構食べてたな」

「こんなに満腹なのは初めてです」

「これが『幸せな状態』や。君はこれまで幸せを知らなかったんやな」

できる事なら食べる前の状態に戻して欲しいのだが。

「ネジさんはいわゆる生臭坊主なのですか？」

「そうやで。この世に美味しいもんがたとあるのに、我慢したり、坊主特有の隠語を使こうて誤魔化したりする意味が分からん。ヒトは生き物を喰う事でしか生きられない。ヒトの宿罪や。それに動物の命が重くて植物が軽いとはいえへんやろ。せやから植物しか喰ってないといってもその罪が軽くなるとも思えんしな」

ネジさんは腹を突き出して大股でゆっくり歩いている。その態度と相まって、単なる自己弁護なのに説得力がある。

「あつ、猫がおる」

彼は猫目掛けて走り出した。感心した直後にこれだ。子供じゃあるまいし、やめて欲しい。

「走れるんですか！」

必死になって追いかけた。彼を遊ばせておく訳には行かない。

猫はドアの隙間から奥へ入っていった。南端の壁に設置されている扉で『職員専用』と書かれている。

「お邪魔するで」

彼は遠慮なく入って行った。その大胆さは何なのだ。

中は派出所程度の狭い空間で、守衛さんらしき人物が座ってTV番組を観ている。奥にはもう一つ扉がある。その扉の向こうに空調設備の機械室や電算室があるのだろう。

「ここは立ち入り禁止ですよ」と守衛さんが話す。

ネジさんは構わず猫にじゃれている。幸せな人だ。

「少し話をさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「ええまあ、暇ですから構いませんよ」

「ここからスタッフの皆さんが出勤されるのですか？」

「いえ、そうではありません。ランチタイムに出入りする程度ですな。近くに安い定食屋があつて、そこに行く人が何人かいますから」

森重のファンは多い。

「守衛さんはずっとここに？」

「まあ大概は。夜は帰りますがね」

「この奥ではどれ位の人が働いているのでしょうか？」

「十人程度でしょうか。自動化が進んだ世の中ですから、清掃をするにしても人手が必要なのはトイレと机の上ぐらいなものですし、管理職一人に事務員一人、後は機械類の修理担当スタッフが七、八名だと聞いています」

「ここみたいな出入り口は沢山あるのでしょうか？」

「各階の北東、南東、北西、南西の端に一つずつありますな」

「その場所にも守衛さんが？」

「いえ、スタッフが決めたこの一カ所だけです。他の場所は施錠されて無人ですな」

あまり掘掘り葉掘り聞くので、ちよつと訝っている。

「泥棒に入るのはよしなさい。監視カメラが設置されているし、入っても奥へは進めません。人体認証キーが必要ですからな。更にいえば、奥へ行つたとしても何もありませんよ。迷子になるだけです」

「いえ、泥棒じゃありませんよ」

「そうや、誰が泥棒やコラ」

ネジさんが割って入ってきたので、これ以上話ができなくなった。「面白い話を有り難うございました」と礼を述べて、彼を引っ張り出した。

でも本当に面白そうだ。エリアではこの場所はどうなっているのだろう。

身体を自室に置いてエリアへ

昼間であっても人通りがない。どこへでも行けるエリア空間において、地下都市でしかも庶民的過ぎるこの場所は人気がないのだろう。

ネジさんには残り三カ所の出入り口を探って貰う事にして、単身で先程の守衛室へ行く。

一応ノックしてからドアを開ける。当然無人である。この守衛室も奥の空調設備にしても、エリアでは無用の代物だ。このエリアを構築したプログラマーが遊びで作ったのだろう。リアルにある守衛室を忠実に再現してある。天井には監視カメラがあり、律儀にもちゃんと作動している。

プログラムで作り出された監視カメラをクラックして記録映像を取り出す。それによると昨夜の午後十時に三人の人物が侵入し、更に奥へと入っている。しばらくしてまた侵入者がいたが、ノイズでよく見えない。カメラを見て笑っている感じもする。この人物が一時間後に出るとノイズが収まった。それから誰も来ず、やがて最初に入って行った三人が出てくる。午前零時である。それ以降の出入りはない。

この映像を考察すると、最初の三人は目的のケミカル屋ではなからうか。二番目の訪問者は謎だが、カメラにノイズが走る程、緻密で重量感のある存在である事から、かなりの手練れである事は確かだ。

それにしても謎であった『もう一つの五層目』が、実は四層目の一角を指しているとは気付かなかった。恐るべし伝聞情報。表現は的確かつ詳細にして欲しいものだ。

更に奥へと進んでみる。リアルでは人体認証キーが必要な扉だが、このエリアでは普通の自動ドアになっている。誰かが改竄した痕跡がある。

空調設備の中も現実通りに再現してあるのだろう。配電盤やパイ

プ類が犇めく薄暗い空間だ。荷台に動力が付いた形式の電気自動車もある。これがあれば移動に便利だが、エリアには必要ない。ここでは考えるだけで空間移動ができるのだから。

広い空調設備施設を全て解析しておき、幾つか監視スクリプトを仕掛けておいた。後はケミカル屋達が出勤する時間を待つばかりである。

午後十一時。ケミカル屋らしきチンピラが入って一時間経過した。これから二人して潜入を開始する。

「何だかワクワクせえへんか」

「しますね。でも緊張は不要でしょう。多分、すぐに片が付きますよ」

『職員専用』と書かれた守衛室のドアを開ける。張り紙がしてあり「クラッシェ専門ケミカルシヨップ『ディスプレイ地下五層目』はこの奥です」と書かれている。馬鹿じゃないだろうか。違法行為の証拠を残してどうするのだ。

奥に入り、仕掛けておいた監視プログラムを使って彼らの居場所を探る。少し離れた休憩室に一人と、その奥の部屋に二人いる事が分かる。全く迂闊な連中だ。

休憩室のドアをノックしてみた。

「どうぞ」

野太い声が聞こえる。入るのが嫌になったが、やむを得ず中に入る。部屋の中はわりと清潔で明るい。大きなテーブルとベンチ、飲み物の自販機が数台ある。更に奥へと通じる扉には『所長室』と書かれている。

阿呆面をした男が出迎えた。

「お前ら客だろうな。そうじゃなかったら殺すんだな」

本当に馬鹿だ。エリアで殺人ができるとしたら、それこそ超能力者だ。

それにコイツの姿は何なのだ。マリオネットみたく紐を五本も付

けられている。その内二本が京都市警で一本が民間の調査会社、もう一本がローン会社か。三十万借金して返済期限を過ぎている。悲しい奴。残る一本は不明だ。優れた暗号化技術と複雑な経路で、先まで辿り着けない。

「・・・・客ですよ」

「おいコラ、何をじろじろ見てやがる」

「いえ、何でもありませんよ。それよりどんな商品があるのですか？」

「おお、ちよつと待つてるんだな」

彼はごそごそと瓶を取り出している。リアルと同じ動きをする必要はないのだから、予めプレゼンテーション用プログラムでも組んでおけば良いのに。

紐だけじゃなく、コイツの身体にはあらゆるウイルスが入り込んでいる。女性と逢った時にゲップをするものや、笑おうとすればシヤックリが止まらなくなるもの、背中に「お馬鹿」とか「へたれ」とか文字が浮かび出るものなど、多数取り揃えている。アンチウイルスソフトを使うという考えがないのか？

このウイルス群を一度に起動させなくなる衝動を必死に押さえる。「これがワシら自慢のケミカルなんだな。他じゃ手に入らない代物ばかりなんだな」

「順に説明して頂きますか」

「おう、よく聞くんだな。まずコレが『キラリ 北極星』だな。五十万だな」

ドーパミンを誘発させようとして失敗しているプログラムの様である。使用しても偽薬効果^{プラセボ}以外は期待できない代物だ。それを五十万とは。

「次に『バナナで釘打ち南極二号』だな。六十万」

昨日カジノで無料だったものと同じか。

「コイツが『冷やし中華始めました二月だけ』だな。七十万」

右に同じ。名前だけ変えてあるのか。

本当にこんなものを買う人がいるのか。確かにこの値段だったら月に一度売れば充分だろうが。

「おうおうおう。麻薬を売りつけるたあこの人でなしめ。てめえら観念しやがれ」

しまった。ネジさんが先走っている。しかも江戸弁になってるし。「何だとこのコノヤロー。兄貴！ アニキー」

奥のドアが蹴破られる様にして開く。

「オメエら、待たせたなあ」

主犯格が出てきた。オメエらつて僕達は別段待っていないのだが。今度の奴も思い切っている。紐が六本も付いていると納豆みたいだ。

京都市警と調査会社は同じで、二本が京都市内にある病院の一室につながっている。ええと、コイツと同姓の女の子がこの男の動きを調べているのか。妹さんだろうか。馬鹿な兄貴を持つと気苦労が絶えないだろうな。更にその女の子と同室の女性にもつながっている。こちらの関係はすぐに推察できない……ああ婚約者みたいだ。まとめると、コイツには入院している妹がいると、そしてその妹と同室の女性と仲良くなってプロポーズしたが、その女性はコイツがどんな仕事をしているか心配になって調べている、といったトコロか。最後の一本はやはり不明だ。

「お客人、さつさと買って貰おうか。でなきゃ痛い目に遭うぜ」

「でも好みの物がなさそうです。もっと最新の、例えばここ最近入手した様な物はありませんか？」

「そうかい？ ちょいと値が張るぜ」

「まずは見させて頂けますか」

「これだぜ。まあ名付けるとしたら『赤い薔薇の花束、お尻に挿して』だぜ」

「アニキは名前を付ける天才なんだな」

確かに物凄くどうにかかなりそんな名称だ。ちょっと調べてみたが、

僕的能力じゃ解析も解毒もできない代物らしい。アキ君の作品だと断定しても良さそうだ。

「これを頂きましょう。オリジナルのプログラムごと全部。しかもタダで」

「そうや。頂いて行くで」

ネジさんが大阪弁に戻っている。

「さてはオヤジ狩りの連中だな。そうはさせないぜ。先生！ センセー」

扉の奥から背の低い奴が出てきた。白いスーツにオールバックとサングラス。時代掛かったファッションだ。

「この先生は京地下スキルコンテストで『気張りはったで賞』を受賞なさったんだぜ」

「そうなんだな。この場所の鍵を開けたのも先生なんだな」

その用心棒はチンピラ二人を背にして仁王立ちしている。

「フッ、四年桜組第三班班長にして給食係、ちなみに好きな物は海老フライ嫌いな物は奈良漬けであるところの俺様が相手をしてやる」
小学生を用心棒に雇っているのか、このチンピラは。

用心棒は片足をテーブルの上上げてポーズを決めようとしているらしい。かなり手間取っているが。

「あの、もう目的のものを頂いてしまいましたか」

「フッ、無事に帰れると思うなよ」

「いえ、すぐにでも帰れそうですが」

「フッ、そうされると困る」

「お困りですか」

「フッ、せめて悲鳴を上げながら出て行って欲しい」

「悲鳴ねえ」

「フッ、そうしないとクビになっちゃうでしょ。僕が」

「それは仕方ないんじゃないですか」

「フッ、ママのお誕生日のプレゼントを買いたいんだ。そうしないと海老フライを作って貰えなくなる。もうスーパールのお総菜はこり

「ごりなんだよ。ママの手作り海老フライじゃなきゃ嫌なんだあ」

少年が飛び掛かってきた、というか抱きついてきた。

揉み合っている最中に小声で耳打ちされる。

「フツ、ここで逃げてよ。お願いだから」

やむなく逃げてやる事にした。

「ギャー、逃げるぞぉー」

「ホンマかいなあー」

ネジさんもちゃんと演技してやっているみたいだ。二人して休憩室から脱出した。

扉の向こうから「これに懲りたらくるんじゃないぜ」と兄貴が叫んでいる。

どうにか演技は通じたみたいだ。

さて、目的のプログラムは回収した。あとはアキ君本人を捜さなくてはならない。もうここに用事は残っていない。取り敢えず守衛室へと向かう事にする。

パイプと配線が犇めく空調設備の一角。

気持ちばかりがはやる。急がなければ、彼がまた他のグループに接触するまでに逢わなければならない。

しかし奇妙だ。意識を飛ばしても守衛室に行けなくなっている。走っても休憩室から離れない。これはトラップに掛かっている証拠じゃないか。

ふと背中に寒気を覚えて振り返った。

誰がいる！ 暗がりの中に大きな影が映っている。

知らない男だ。季節外れの黒いロングコートを纏い、天井に届く程の巨体を苦しそうに曲げている。両袖はまくり上げられ、細く筋張った腕をだらりと垂らしている。顔は影になって確認できない。

「誰？」

その人物は口元に微笑を浮かべるだけで、何も答えない。

突然めまいが襲う。

床がグニヤリと曲がり、足を取られてしまう。

その人物がポツリという。

「そうか、邪魔をしにきたのか」

「ア、アキ君か？」

彼は応えない。

彼が一步踏み出すと、その足下から亀裂が走り、また再合成される。

プログラムを書き変えているのか。

一步、また一步と近づいてくる。

「こりゃアカンで。一旦引き上げや」

賛成だ。しかしリアルに戻ろうとしても、意識が混濁して戻れない。ネジさんも困惑している。

「どうやらエリアに足止めされたみたいですよ」

「ホンマや。こんな事、どないな方法でできるんや」

スキルでは敵いそうにない。何とかして話をしなくては。

「どうして君にはこんな事ができるんだ。このケミカルにしてもそうだ。どうして……」

突如、身体が刻まれた感覚を覚える。バターでできた身体に熱したスプーンを突き立てられたかの様に、何もかもこっそりと持って行かれた。

幾つものプログラムが機能不全に陥り、姿を維持できなくなりつつある。

チンピラ達から奪ったプログラムも消失している。

「どうしてか、だって？ さあどうしてだろうね」

喋りたいが、口が動かない。

「ハルも見ただろう。病院で一晩中悲鳴を上げている奴を」

ヒコジョー氏と逢った夜の事が。

「俺も同じだったのさ。ずっと苦痛と共に生きてきた」

生まれつき身体が弱かったのは聞いている。でも、それとこの力

にどんな関連があるのだ。

「毎日が苦しくて、辛くて、狂いそうだった」

あの患者の様に、毎晩悲鳴を上げていたのか。

「あの頃は、良く効く鎮痛剤が欲しかった。エリアに行ってもタダじゃ手に入らない。自分で作るうにも苦しくて何もできない。そうして過ごしてるうちに、こう考える様になったんだ。これは俺じゃない。苦痛に喘いでいるのは別の人間だと」

別人格化か。

「脳をイメージするんだ。そしてそれを幾つかに分割する。そして、その一つ一つに別の人格を与える。こいつは苦痛担当、こいつは喧嘩専門、こいつは面白い事をいうヤツ、こいつはまとめ役って感じだね」

多重人格！

「普段は、苦痛を担当するヤツを奥に押し込めていた。でも気付いたんだ。こいつも俺の一人だってね。何とかしてやりたい。そう思った」

「そして人格を増やす度に苦痛が和らぐ事が分かった。神経伝達物質のエンドルフィン群が増加して、鎮痛作用を起こしていたんだ。それが糸口だった」

「学者先生に頼んで、マイクロマシンの増量を試みた。今、俺の脳には通常の四倍のマイクロマシンが着床している。演算装置も組み込んだ。俺に逢った時、俺の後頭部にある四つの瘤に気付かなかったかい」

「俺は一人じゃない。俺の中には十人の俺がいる。優秀な人間がこれだけ揃っていて、しかも頭の中に仮想空間を生み出すシステムが埋まっている。それならばどんなプログラムでも開発できて当然だ。そして作り出したんだ。脳内麻薬の増加をリアルでも持続させるプログラムをね」

それが例のケミカルか。

「脳には報酬野という部分があってね。そこでは大量の エンドル

フィンを生成できる。何か物事を達成した時、持続的な苦痛を感じた時に、それをエクスタシーに変える器官だよ。君の報酬野にもマイクロマシンが着床している。それを使って、常に エンドルフィンを生成し続ける様に脳の回路を書き換えるんだ」

それは困る。常に涎を垂らしながらヘラヘラ笑っている人になってしまふ。もしくは死んでしまっただろう。

彼は僕にそれを使うつもりなのか。

彼が近づいてくる。

どうすれば……

「おんどりゃー」

ネジさんが突っ込んで行く。

駄目だ。彼に敵う筈がない。

決死の体当たりは事もなく避けられ、逆に、片手で頭をつかまれてしまった。

白目を剥いてグッタリとしている。

「へえ、大阪の坊主か。面白い知り合いがいるんだね」

彼を殺してしまったのか。

「坊主って意外と精神が弱いじゃないか。もう事切れたか」

彼を巻き込むんじゃないか。

すまない。

僕は諦めるしかなさそうだ。

ネジさんが死んで、僕が生きていては申し訳ないし、ここから逃げる術もない。

せめて話す事ができれば、彼を説得できるかも知れないのに。

彼はこれから犯罪者として生きるのか？ まだ十二歳だというのに、新しい苦悩と戦って残りの人生を過ごして行くのか？

肉体の苦痛は脳内麻薬とやらで解決できるのかも知れない。でも罪の意識は避けられない。寝ても覚めても、何をしていても傍らにある苦痛。それと寄り添って生きられるのか。

彼が目の前まで迫る。もう何も逆らえない。

静脈がくつきりと浮かぶ手で、僕の頭をつかんだ。

彼は充血した目を見開いて、喰い縛った歯を見せながら力を込める。

頭蓋がみしみしと悲鳴を上げている。

しばらくすれば、快楽に変わるのだろうか。

意識が遠退いて行く……

「旦那様、手助けが必要ですか？」

声が聞こえる。懐かしい声だ。

「もしもし」

ああ、これが走馬燈なのか。

有難い。最後にナツに逢えた。最後が祖母との再会では死ぬに死ねない……。死ぬ？ 嫌だ。まだ死ねない。あんな事やこんな事をするまで、僕は死ねない！

「た、たすけ……」

全神経を振り絞って、そこまで呟いた。

すうと楽になる。

彼の手が離れ、僕はその場に倒された。

糸のように細い意識で、何が起きているのか理解しようとしていた。

重い瞼を開いて、ナツがアキ君と対峙している様子を見ている。

閃光と、振動と、轟音と、暴風が沸き起きている。

どうやら、アキ君が僕に施そうとしたプログラムが逆流しているみたいだ。

やがて彼は倒れ、エリアから去ってしまった。

「旦那様、もう大丈夫です。また明日逢いましょう」

たぶん彼女はそう思ったと思う。

お礼をいいたかったが、僕は完全に眠ってしまった。

第四章

ベッドで目覚めた。

今日は何日だろう。

今は何時だろう。

重い身体を起こし、時計を見る。

十二時過ぎだ。まだ昼の十二時なのか。

ネジさんがソファで横になっている。

・・・思い出した。

「ネジさんっ、大丈夫ですか！」

必死になって頬を叩いた。思いつき叩いた。

「痛いわ、阿呆」

「ああ良かった・・・」

彼は生きている。それだけで充分だ。

ようやく完全に覚醒し、リアルに戻っている事が理解できた。備え付けのパックのお茶で一息入れる。

「心配しましたよ」

「悪かったな。物凄い経験をさせられたモンやで。あっという間に気を失のうたわ。身代わり地藏プログラムがなかったらあの世行きやった」

「こんな経験は二度とできないでしょうね」

「それをいうなら『二度と御免』や。でも、どうやってあの修羅場を潜り抜けたんや？」

「僕にも分からないんです」

彼女がいた筈だ。

「きつと女神が降臨したんですよ」

「それをいうなら『弥勒菩薩のご再臨』やな」

メールサーバを調べてみると三通のメールがきていた。一つはヘーハチ校長、一つはテツタ先生である。両者とも趣旨は同じで僕を

心配してくれている。

もう一通はナツだ。

「今日の夕方五時にエリアの蓮亭で」とだけある。また彼女に逢えるのだ。

安心したら急に身体が重くなった。頭も鈍っている。

「疲れましたね」

「僕はそうでもないけどな。飯は喰えそうか？ いや、疲れた時こそ喰わなアカン」

もつともな意見だ。森重が待っている。

ロビーを通ると女主が所在なさそうにしている。ネジさんが声を掛けた。

「おばちゃんも一緒にどうや。昼飯でも喰うか？」

人の財布だと思って大胆な事をいうものだ。まあ森重なら何人ついてきても困らないが。

無表情だった女主はニツと笑い、急いで化粧をしてカウンターを離れた。この人でも笑う事があるのか。

夏休みともなると、リアルの上層階には子供達が一杯いる。元気に走ったり、遊んだりしていて微笑ましい。

一人の少年が、壁にもたれて寂しそうにしている。

「坊ちゃん、どないしたんや」

ネジさんらしい。こういう少年を見るとつい声を掛けなくなるのだろう。

「僕、アルバイトしてたんだけど、結局お金が貰えなかったんだ」

「そりゃ難儀やな」

「僕には入院しているお姉ちゃんがいるんだけど、冴えない奴と結婚する事になってさ、そいつの紹介でやってたアルバイトなんだ」
「ほうほう」

「そいつはチンピラみたいな事をやってたんだけど、最近ちつちやな調査会社を始めて、それが全然儲からなくてさ。結婚資金のた

めにちよつと悪い仕事をしていて、それを手伝っていたの」

「悪い事かいな」

「うん、ちよつとね。でもそんなに悪いヤツじゃないんだよ。お姉ちゃんと同室に妹さんがいて、よくお見舞いにきているしね。それにお姉ちゃんとの結婚資金の為だし、僕もお小遣い貰って、ママの誕生日にプレゼントをしたかったんだ」

「ほーお」

僕達は互いの顔を見合わせた。

「でも昨日とっても怖い目に合ってたさ。僕らはドアの隙間から覗いていただけなんだけれど、もうビビっちゃって、その仕事を辞める事にしたんだって」

「それで良かったんと違うか？」

「うん。結婚資金は借金して何とかするみたいだけれど、僕のプレゼント代が貰えなくてさ。このままじゃママが海老フライ作ってくれなくなっちゃうよ」

「たまには作ってくれるやろ」

「絶対そんな事ないよ。昨日だって鰻丼だったんだ。それも奈良漬けを沢山乗せてさ。鰻って高いんでしょう？ そんな物を買うお金があつたらどうして海老を買わないの？」

それは土用の丑の日だったからだ、と思うが黙っておく。

「坊、名前は？」

「ジユン」

「ジユン君はもうお昼食べたかいな」

「まだ、さっきまで寝てたんだ」

「そうか、それやったらおっちゃんらと海老フライ食べへんか。すぐそこで」

「良いの？」

「構わへんやろ。大将」

「喜んで」

四人並んで『食事処 森重』に入る。

昼時だけあって、今日は僕ら以外にも客が入っている。作業服の数人がスタミナカツを食べている。空調設備のスタッフ達に違い。メニューの選択が良いではないか。

「マスター。海老フライ定食四つ。二つは大盛りで頼むで」

ネジさんがスポンサーたる僕の許可も得ずに、さつさと注文してしまった。僕としてはスタミナカツが良かったのだが、ここは少年に合わすべきだろう。多少悔やまれるが。

間もなく海老フライ定食がきた。キャベツの千切りに丸まった海老フライが八つ程。小さくて見るからに安そうな海老だが、その代わりタルタルソースが沢山かかっている。

「どうやジュン。これでええか」

「うん、ママが作ってくれるのと似てる。買ってきた海老フライは真つすぐに嫌いなんだ。丸まってるのが好き」

「そうか、良かったな。足りんかったらおっちゃんのを分けたるさかいな」

「有難う」

ジュン君が食べている姿を見て弟達を思い出した。たった三日でホームシックとは情けない。つい説教したくなる。

「ジュン君、ママが海老フライを作ってくれる方法を教えようか」
「どうするの？」

「簡単だよ。ママが作った料理を食べる時、どんな料理でも『美味しく美味しい』っていうんだ」

「それだけ？」

「そう、それだけ。そうすればママはジュン君が一番喜ぶ料理を沢山作ってくれるよ」

「本当に？」

「本当さ。賭けても良いよ」

「じゃあそうしてみるよ」

ジュン君は口の周りに付いているソースも気にせず、懸命に食べている。ホテルの女主もその姿を見て嬉しそうだ。この人に声を掛

けたのは良かった。知り合いが多いといっていたネジさんだが、こ
うやって知り合いを増やしているのだらう。新人類にもいろんなタ
イプがあるものだ。

夕方の五時少し前、エリアの『蓮亭』へ

リアルでは賑わっているこの四層階も、エリアだとほぼ無人だ。
ゲームアーケードを経営していて儲かるのだらうか。

ネジさんと二人で店に入ると先客がいる。見慣れた後ろ姿をした
人物だ。

「ナツ！」

「旦那様！」

久しぶりのハグである。

「おうおうおう。見せ付けてくれるやんけ」

「いや失礼」

「このちっちゃい嬢ちゃんと夫婦っていうのは犯罪とちゃうか」
本当の姿を知ったら卒倒するな、この人は。

「いや、まあ清い関係ですの」

「近々、清くなる予定ですの」

彼女を野放しにしておくと話がややこしくなる。

それより情報を貰わなくては。

「有難うつていいたかつたんだ。でもよく憶えていなくて」

「うーん、助けるべきかどうかちよつと迷ってたんだけど。良かつ
たのかな」

「良かったに決まってるよ。でもどうして迷っていたの？」

「アキ君を倒すのが目的じゃないでしょう。だったらあたしの出番
はなくても良いと思っていたから」

「そうか」

「そうよ。私は壊す者、貴方は変える者」

「自分を卑下してない？」

「卑下はしていないけれど、今回よく分かったの。私は人を説得したり説き伏せたりできない。でも貴方はできる、かも知れない」

「自信なくすなあ。そこは、できるって断言して欲しいよ」

「やらなきゃね。それが役回りつてもものでしょ」

「まだチャンスはあるだろうか」

「勿論。彼はまだ起き上がれない。しばらくの間は」

「彼はどこに？」

「地上ね。河原町御池の高級ホテル」

「どうしてそんなところに？」

「それは・・・グウ・・・」

会話途中で帰ってしまった。新生児は眠るのが仕事だ。致し方ない。

リアルに戻り、INN『蓮亭』を発つ

女主に精算を願い出る。彼女は「今回は要らない」といったが、なだめて受け取って貰った。「また来ますよ」というとニツと笑顔を見せた。三人で同じ表情を作って笑い合う。

地下世界に別れを告げて、地上へ戻る。ほんの二日間の滞在だったが、去り難い気持ちにさせる街だ。洪波期において、地下都市で過ごした人々を可哀想な存在だと思っていたが、そうでもなさそうだ。外出できる日が限られていた日本海沿岸の地上生活者より、賑やかに過ごしていたのではないだろうか。

地上に出ると目が痛い程の日差しがある。夏の京都は蒸し暑い。目的のホテルへと急ぐ。

ホテル『ナカツカーサ』へ。

河原町御池で高級ホテルといえばここである。何故かネジさんも一緒だ。

「こんな高級ホテルに泊まれるとはツイとるな」

「特にお誘いしていませんが」

「つれない事言いなや。お前さん一人で高級フレンチでも食べよう
としとるな。それは許せん」

口に入る物は何でもござれの彼だが、遠慮という概念を飲み込ま
せる事だけは難しい。旅は道連れの精神で承諾する事にした。

チェックインを済ませる。貧乏性の僕としては、一番安い部屋を
選択した。

フロントで肝心な事を聞かなくてはならない。

「ここに『加藤亜貴』という名前の十二歳の子供が一人で泊まつて
いる筈なんですが、どの部屋か分かりますか？」

「お客様の情報にしましては一切お答えできません。警察の方が、
そのお子様の保護者でらっしゃる証明がなければ、話せない規則に
なっております」

最初から宛てにはしていない。まだ手はある。

部屋へ。

安い部屋でも広さは充分だ。低い階にあつて景色は楽しめないが、
シャワールームもトイレも立派なもので、新婚旅行なんか良さそ
うだ。

「先に風呂を使わして貰うで」

そう言つて、彼はシャワーの水音を立てている。いろいろ想像し
て気味が悪くなった。

僕はこのホテルの宿泊者名簿を探らなくてはならない。一旦エリ
アを経由して、そこからこのホテルの端末のクラックを試みる。

エリアに行つて驚いた事がある。全てにおいてレスポンスが早い
のだ。身体が軽く感じる。考えてみると、このホテルはエリアを構
築しているサーバー群に最も近い場所にある。アキ君が近づこうと
したのは、地下都市そのものじゃなくてサーバーだったのか。

調べて分かったが、このホテルの情報を管理するコンピュータは
ネットにつながっていないみたいだ。最も手堅い情報管理である。

これは厄介だ。

「ああ、ええ風呂やった。次は飯やな」

この人は本当に……

ホテルのメインダイニングは最上階にあつて、夜の京都を一望する事ができる。鴨川の向こう側で色街のネオンが瞬いている。僕を呼んでいる様に。

「絶対あそこに行つてやる」

「何やて？」

「何でもありません」

ネジさんはギャルソン相手にあれこれと注文している。もう嫌味をいう気力もない。しかし彼がフランス料理に詳しいとは知らなかった。僕には全く無縁の世界なので、助かった事は否めない。

「詳しいんですね。フレンチなのに」

「まあ普通やな」

何だかカツコイイ。

「こんな場所ではナメられたら負けや。儂らは服装がコレやろ。夏場やからギリギリ許されたんやろうけど、出だしは最悪や」

二人とも軽装というより単なる街着だ。

「それで、給仕係が怪訝そうな顔つきでやってくる訳や。コイツら何者や、ちよつとビビらせたるつてな感じでな」

とても礼儀正しいギャルソンに見えたのだが。

「そこでビビったら負けやで。注文を聞かれたら『このスペシャリテは何かね』と聞いたるんや。そうすると逆に相手がビビる。なかなかできるヤツやとな」

「はあ」

「そんで今度は『の、風です』とか何とか言つてきよる。ほんなら『風ね。確かに今の季節に合いそうだ』と切り返すんや」

「切り返すんですね」

「そしてやな」でもそれだとちょっと軽いかな。それも頂くとして、もう少し重たいものが欲しいな」と続けて言うんや。そうするとアレコレ言うてくるから、三番目ぐらいに『うは如何でしょうか?』と聞いてきた奴にすれば良い。他の皿も同様にして決めるんや」

「それでメイン二品のフルコースを注文した訳ですね?」

「訳やな」

殴りたい。

「これから本番や。もうすぐソムリエがくる」

「ソムリエも呼んだのですか!」

逃げ出したい。

ワゴンに大量のワインを積んで、若いソムリエールがやってきた。「あかん、女の人や。しかもごっつい別嬪やで。僕は喋られへんからお前さんに任せた」

「そんな・・・」

ソムリエールさんが涼しげな笑顔で話し掛けてくる。

「ようこそいらっしやいました。お飲み物を承ります」

ネジさんは下を向いて頬を赤らめている。食事前に気持ち悪いものを見てしまった。

「ええと、僕はミネラルウォーターを。彼には、そうですね、ハウスインを願います」

「アペリティブはどうなさいますか?」

「アペリティブ? ああ食前酒ですね。あまり甘くない物で・・・何が良いでしょうか?」

「今日は完熟したソルダムが入荷しています。名残の品ですから、味わえるのは今年最後になるかと。それを絞って白のスパークリングワインで割った物は如何でしょうか」

「じゃあ、彼にはそれを。僕の分はアルコールのない物で割って頂けますか?」

「かしこまりました」

彼女が去って、ほっと一息ついた。

「何が良いでしょうかーやて、それじゃあ負けやな」

「シパンツ」

久々に暴力を振るってしまった。彼のスキンヘッドは思いの外、良い音を出して響く。

食前酒が運ばれる。

ほんのりと甘酸っぱく、夏らしい香りがして気分が晴れやかになる。知らなければ聞けば良い。その事を恥と思う必要なんてないのだ。

料理が運ばれてくる。

コンソメをゼリー状にした冷製スープ、ボイルした魚介と夏野菜をゼリー状に固めたサラダ、鰯に梅肉をゼリー状にしたソースが掛かった物、ローストした子牛肉にゼリー状のソースが掛かった物、最後のデザートはフルーツをゼリーで固めたプディングだった。

もうゼリーはうんざりだ。

晴れた気持ちが一気に曇る。今度は拳を強く握った。

「ぼ、暴力反対や」

「僕も反対です。でもこれは暴力ではありません。神の鉄槌です」

「まあ待てや。ところで捜し物は見付かったんか？」

「アキ君の事ですね。残念ながら見付かりません」

「何でや」

「どの部屋か分からないんですよ。それに分かったとしても、どうやって部屋にへ入ったものか」

「そんな事かいな」

彼は指を二回鳴らしてギヤルソンを呼んだ。

「悪いけど、中津さんと呼んで貰えるか」

「は？」

「ここの総支配人の中津さんや。大阪のネジが呼んどると言うてみて」

ギヤルソンは飛び出して行った。勿論、僕も飛び出したい。

白いジャケットを着た男性が、素早く客席の間を移動してくる。

「これは大僧正。ようこそいらつしやいました」

大僧正？ それはこのボケ坊主の事か？

「ああ中津さん。お邪魔してるよ」

標準語で返答している！

「還暦になられたとお聞きしております。お祝いも述べず申し訳ございません」

還暦！ どう見ても三十歳ぐらいにしか見えないのに。

「いや、歳の事は内密にしてくれよ。実は二つばかりお願いがあるんや。一つはこの青年から聞いてくれ」

軽いめまいを感じつつも、事情を話した。

「すぐに部屋番号をお知らせします。マスターキーもお渡ししますので」

ネジさんがもう一つ何をお願いするのか気になったが、急いでアキ君の部屋へ向かう事にした。

アキ君の部屋はスイートルームであった。

ドアノブに『DO NOT DISTURB』と書かれたカードが掛かっている。

ノックしても返答がない。

マスターキーを使う。

カーテンを閉め切っている。明かりも灯されていない。

奥の寝室へ行くと、アキ君が横たわっていた。

ようやく彼に逢えた。可愛い寝顔をしゃがって。キスするぞ！

いや、遊んでいる場合ではない。

呼吸と脈を調べる。

どうやら生きている。しかし青白い顔をして、とても起き上がれそうには見えない。すぐさま病院に連れて行きたいが、その前に話したい。

彼の頭部には演算装置が埋め込まれていて、そこには独自の仮想空間があるという話であった。上手くできるかどうか分からないが、そこに行けば彼と逢えるのではないだろうか。

そつとベッドに潜り込み、彼に寄り添う。そして顔と顔を合わせる様にして目を閉じた。

彼の弱々しい寝息と自分の心音だけが響いている。

肉体から意識を切り離す。やがて世界は無音となり、自由になった意識でエントリーを始めた。

アキ君の頭の中へ

闇と静寂が支配する空間。

がらんとしていて、その広さはわからない。

遠くに薄く光りが見える。

近づく、数人の少年が座り込んでいる。

皆、顔を伏せて泣いている様だ。

一人の少年が懸命に慰めている。

肩を叩いて、頭を撫でて、声をかけている。

「まだ終わった訳じゃない。まだやれる」

「何を？」

その少年は立ち上がってこちらを向いた。

「またお前か」

「また僕です」

「あの女はどうした」

「さあ、僕には分からない」

「どうせまたやって来るんだろ」

「だから分からないって。彼女は気紛れなんだ」

「じゃあ、アイツがやってくる前にお前を殺そう」

「それじゃあ君も困ると思うよ」

「どうして」

「君はかなり衰弱している。昨夜から丸一日、何も口にしていないだろう。せめて水分だけでも摂らなきゃ、この乾燥した部屋では命に関わる」

「仲間がきてくれる」

「仲間？ ヒコジョー氏の事かい。彼はもう押さえられているよ。」

「テツタ先生に」

「先生に！」

「そうだよ。先生は君に逢いたがっていたよ。身体が元気なら殴りつけてやるのにつてね。そう言つて悔しがつてた」

「そうか」

「君でも先生の事は気になるんだね」

「当然だ。先生は同志だ」

「先生自身はそう思っていないみたいだけど？」

「先生は過激な事を嫌う人だから・・・」

「その認識が違ふんじゃないかな。先生と君とでは目的が違ふんだ」

「目的は同じだ。先生もエリアの発展を願っている」

「それは目的じゃない。手段だ。先生は子供達の幸せを願っているだけだ」

「俺達も同じだ」

「それも違ふ。もしそうなら、こんな手段は使わない。先生は『全ての』子供達に幸せになつて欲しいと願っている。クラッシーもそして君達にも。エリアの発展は二の次だと考えているんだよ」

「そんな筈はない！ エリアの発展は俺達クラスAやBにとって必要なんだ」

「その事に異論はないよ。でもエリアに行けない子供達はどうなる？」

「エリアに行けない？」

「そう。どうしてもエリアに行けない、行きたくない子供達。そんな子供達は増えている。きつと君のお父さんだつて、先天的な理由か何かでエリアに行けなかつた筈だ」

「親父が？」

「そうでなきゃ船乗りにはならない。きっとエリアに行けなくって肩身の狭い思いをしていたんじゃないかな。それでも船乗りになつて、そこで生き甲斐を見付けた。そうして危険な仕事に従事しているんだろ？」

「エリアに行けない連中なんて・・・ほんの一握りしかないだろう？」

「君達クラスAやBだって、クラッシーに比べればほんの一握りさ、でも数が少ない事が無視して良い理由にはならない」

「それはそうだけど」

彼も他の少年と同じ様に座り込む。

僕も座って話を続けた。

「君は、アキ君の中ではどんな役回りなのかな」

「俺は苦痛担当。今は苦痛もないから、皆の過去を担当してる」

彼の人格の中で、最も話をすべきだと思っていた存在だ。

「君の感じていた苦痛は僕には分からない。想像はできるけれど、そんなものより遙かに辛いものだったろう」

「そうさ」

「同じ様に、君にも他人の痛みは分からない」

「そんなものが分かれば、それこそ超能力者だ」

「そうだね。だから他人の人生には干渉しない。僕はそう決めている」

「その割に、俺には関わるじゃないか」

「そりゃそうさ。僕の身内だからね」

「身内？」

「こんな話を聞いた事がある。腕に自信のある料理人は、自分の両手を広げた範囲の客しか取らないって。僕も似ているんだ。こう両腕を広げてさ、この範囲に収まる身内だけを思っていたい。君もその一人なんだ」

「何にでも首を突っ込む世話焼きだと思っていたけれど、案外偏狭

な奴だつたんだな」

「僕はまだ若いからね。テツタ先生みたく両手が広くないのさ。歳を取れば変わるのかも知れないけれど」

「若いわりには説教臭いけどな」

「それも否定できないな。できないから説教させて貰うと、テロをする連中っていうのは権力者と何も変わらないと思うよ。他人に自分のイデオロギーを押し付けているんだ。偏狭なのは彼らだ。違うかい？」

「じゃあどうすれば良いんだ」

「正当な努力をして、後は運を天に任せれば良いんじゃないかな」

「それで世の中が変わるのか」

「変わるかも知れない。変わらないかも知れない」

「それじゃあ駄目なんだ」

「どうして？ 君の願う変わり方をしなかったとしても、いつかはそうなるかも知れない。それまでは不幸な人が出てしまうだろう。その一方、変わらなかった事で幸せになる人もいる。そう考えればそんなに不幸でもないさ」

「達観してるな」

「いや、自分でもよく分かっていないんだよ。でも君がテロを成功させれば君自身は不幸になる。それが分かっているから、口から出任せをいつているのさ」

「デタラメなのか」

「そう貶さないでくれよ」

僕は話を続ける。

「こんな話がある。太陽系外から飛来する隕石には細かな傷が付いていたり、無数の穴が明いているらしい」

「相変わらず話が飛ぶヤツだ」

「ゴメン。まあ聞いてよ。その隕石の傷は宇宙線によるものらしいんだ。真空宇宙を疾駆する強力な放射線。銀河系の中心から、または外宇宙から飛来するその粒子は非常に凶悪で、地球に降り注げば

全生物が死滅する程のものらしい」

「それはここまで届かないのか？」

「そう、防いでいる物がある。太陽風だよ」

「太陽風が？」

「洪波期の災厄をもたらした太陽風だけれど、一方では僕達を守ってくれる存在でもある。今でも太陽風を恐怖の化身みたく思っている人は少なくないけれど、なくなってしまうえばその人だって生きてはいられないんだ」

「皮肉な話だな」

「皮肉というより、不思議な話だと思わないか？ 物事の二面性を表す良い事例だと思うよ。物事に善も悪もない。いつだってニユーtralなのであって、受け取る人が善か悪か決めているに過ぎない、なんて思うのだけれど」

「馬鹿らしい話だ。お気楽な奴だけがいる能書きだな。結局お前は幸せ者だって事だ」

これも否定できない。

「君を説得するなんて、僕には荷が勝ち過ぎたみたいだ」

「いや・・・馬鹿話に付き合っていたら、少し楽になった気がするよ。結局は、テツタ先生が書いた丸文字紙媒体の手法が一番良かったのか」

彼に笑顔が戻っている。

「前から思っていたけれど、お前は変なヤツだな。内容の薄い話ばかりして、論破する事もなしに人を感化させる。まるで優秀なセールスマンみたいだ」

そんな風に評されるのは初めてだ。でも、僕がセールスマンだとしたら何を売っているのだろう。売れそうなものは何も持ち合わせていないのだが。

彼は本当にテロを諦めてくれたのか、それは分からない。でもこれだけは言える。彼がまた僕を困らせても、話し合えさえすれば何とかなる。自信がある訳じゃない。そんな気分なのだ。

リアルに戻る。彼の寝室に

寝顔を見ていると普通の十二歳に見える。エリアの地下都市で逢った時の憤怒の表情は微塵もない。彼の別の人格が現れれば、またあの形相が表に出るのだろうか。

人はいろんな側面を持っているものだ。考えてみれば、多重人格もそれとさして変わりないのかも知れない。子供は平板な人格しか持たないが、やがて成長して、数々の経験を積んで、多面的な人格を形成する。蒙が啓ける瞬間が幾つもあつて、その度に新しい側面が生まれて大人になって行く。彼の多重的な心、それは、彼の人生そのものだ。

ネジさんに次第を報告をする。彼は喜んでくれた。余りに嬉しうなので、他に何か良い事があつたのではないかと疑いたくなる程だ。

アキ君をどこの病院へ移送すべきか迷つたが、事情が事情だけに近くの病院では対処できないかも知れない。テツタ先生の助力を頼りに元の大学病院へ運ぶ事にした。

事情を察した中津総支配人が、僕達用にハイヤーを手配してくれた。しかも部屋代、食事代、そしてこのハイヤー代も要らないそうだ。固辞したが頑として聞き入れてくれない。この人は恰好良過ぎる。

ネジさんと再会を約して別れる。

「では、機会があればまた……」

「機会？ そんなもんは近々あるで」

そう軽くいわれると別れが寂しくない。流石は大僧正、男同士の別れが湿っぽくては情けない。何だかんだいっても、人生の機微を知った人だと感心させられる。

アキ君を抱えてハイヤーに乗り込む。革張りの後部座席を全部使

つて彼を寝かせる。助手席に座って行き先を告げると、柔らかいサスペンションを揺らしながら車は走り出した。

車中でふと思い出した。色街で遊ぶのを忘れていた。あんな事やこんな事をしたかったのに。しかし、ネジさんや中津総支配人みたいな立派な大人になるためにも、自らを滅して公に奉じるのが良さそう。彼はまだ眠り続けている。彼の無事だけを考えよう。

しかし、こんなに強く後ろ髪を引かれた経験はない。

深夜、大学病院に到着した。テツタ先生が手配を済ませてくれていて、大勢の医療スタッフが待ち受けていた。アキ君を預け、その足で先生の元へ駆けつける。

「先生、ご無沙汰してます」

「ご無沙汰って程じゃないが、お疲れさん。君の首尾は全部フユさんから聞いたぞ」

あの人はまた僕の楽しみを奪ったのか。

「先生の方は如何でしたか」

「ああ、君はまだ知らないんだね」

当然だ。僕は妖怪じゃない。

「聞かせて頂きますか」

先生は嬉しそうに語り出した。この表情を見れば上手く行ったのだろうとすぐに知れる。

ヒコジヨ一氏は先生の雷を受けて、すっかり毒気を抜かれたらしい。時間をかけて話し合ったそう。どんな話だったのか、ヒコジヨ一氏の方からも聞いてみたいものだ。

両先生で取り組んだ『兵器乗っ取り犯』の高校生二名は、中学生時代にテツタ先生が見ていた生徒だった事もあり、易々と片が付いたらしい。今はへーハチ校長と海に出ているそう。少し可哀想な気がする。

祖母の担当した『細菌ばら撒き犯』三名は、想像するのも恐ろしいが、祖母の懸命な説得とやらを受けて空手で他州へ逃げ出したそ

うだ。研究結果も社会的地位も投げ出したのだから、よっぽど怖かったのだろ。さもありなん。他州へ行ったところで、またぞろテロを計画する可能性は否定できないが、その手のテロ行為は設備がなくては何もできない。

今日はこのまま先生の個室に泊まる事を勧められたが、家の布団が懐かしく思えて、帰宅する事にした。幸い資金は潤沢だ。タクシ―を駆って家へと向かう。

神社の境内に着くと、祖母が待ち受けていた。

「お帰り。随分と遅かったじゃないか」

「深夜なのに待って頂いていたのですか？　これは恐縮です」

「タクシ―とは羽振りが良いもんだ」

「お祖母様からお借りしたカードはそんなに使っていませんよ。取りあえず五十万をエリアマナーに換金しましたが、返済済みです」
祖母はカードを受け取ると急いで服の中に隠した。誰も取りませんって。

「ふん。ちゃんと『絶ち』の約束も守った様だね」

幼い頃の記憶が蘇る。あれは小学校二年生の頃だったか。

「お前は身体が弱い。多分、頭も弱いだろう。このままじゃ長生きしないね」

「どうしたらお祖母様みたいに長生きできるの？」

「そうだね。何か『絶つ』事をしてみるかい？」

「何それ？」

「自由にできる事を敢えてやめるんだ。そう約束して、代わりに何かを貰うんだよ」

「何をやめれば良いのかな」

「それは自分で考えるんだね」

「じゃあ、走るのをやめる」

「それはお前が苦手なものから逃げているだけだ」

「じゃあ、今日、先生が嘘は駄目だっていったから、嘘をやめる」
「それは良さそうだね。そう決めたからには一生続けなきゃ駄目だよ」

「いつまで？」

「死ぬまでさ」

「嘘吐いたら死ぬの？」

「死にはしないよ。でも貰える筈だったものが貰えなくなるんだ」

「欲しい！　けど何が貰えるの？」

「それはお前次第だね。きつと良いものさ」

以来、愚直にも『嘘絶ち』を続けている。何が獲得できたかも分かつている。嘘を吐かない代わりに、言い訳や、はぐらかしや、曖昧な表現が上手くなった。全く、祖母のいう通りにするなんて幼かつたにしてもどうかしていた。

それ以外に得られたものは思い付かないが、祖母のいつていた『良いもの』には出逢えていない。今後も出逢えないかも知れないが、今更諦められないでいるのだ。この旅で少し垣間見られた感じはあったが、どうやらつかみ損ねたらしい。

「お祖母様のおっしゃっていた『良いもの』って、一体何なのですか」

「それはお前次第だといってあるだろう。気付かないって事は、まだ完全じゃないって事だよ。もう得られているのかも知れないし、そうでないのかも知れない」

なんだか禅問答の様になってしまった。宗教が違うのに。

「ところで、『細菌ばら撒き犯』ですが、逃がして良かったのですか？」

今回のテロで最も危険な奴らである。祖母の手で完全に抹殺して貰いたかったのだが。

「ああ、行き先は分かっているし、問題ない」

「連中の作り出した細菌とはどの様なものだったのでしょうか」

「凶暴な細菌さ。その菌は武器を持っていて、周りの生き物を完全に死滅させる。そして自分達のテリトリーをどこまでも拡げ続けるんだ」

「それは恐ろしいですね……その細菌の持つ武器とは何ですか？」

「強力な……そう、極めて強力な武器だよ。酸を生み出すんだ」
専門的で難しい話だが『酸』とは塩酸とか硫酸の事だろう。それで周りの生物を死滅させるのか。

「感染すればどうなるのですか？」

「感染後、一週間程度で症状が現れ始めるだろうな」

悪質だ。罹患した人は一週間もそれと知らずに汚染地域を拡げるのか。

「症状とは？」

「快便になる」

「は？」

「胃で消化を助け、ピロリ菌を死滅させて自らのテリトリーを拡げ、腸ではアルカリ性の消化液にも耐えて生き残り、大腸菌類を酸で死滅させて拡がる。極めて獰猛で、とても身体に良い乳酸菌だ」

「乳酸菌？ ビフィズス菌の様な？」

「その通り」

「あの……それでどうやってテロを？」

「馬鹿だねお前は。どんなに良い効果があると予想される菌でも、嚴重にテストしてからでないと利用はできないんだよ。いきなり人体実験だなんてそれこそテロだ」

「それには同意します。しかし、罹患しても誰も気付かないだろうし、驚かないんだったら、ばら撒いても意味がないじゃないですか」
「まあね。それが学者の馬鹿なところさ。何を考えているのか理解できないね」

「それでも連中は罪の意識に苛まれて、逃げ出したと？」

「ああ、存分に説教してやったから、随分と反省はしているだろう。」

そして北海道に追いやった」

「北海道？」

「無理やりフェリーに乗せた。大手乳酸飲料会社を紹介してやったんだよ。今頃は研究室に籠もって立派に働いているだろうね」

結局、祖母の担当した連中が最も安全なテログループだったのか。予想はいつも裏切られるものだ。新製品ができ上がれば、沢山寄進して貰うって、我が家でも味わってみたい。

一安心したところで、祖母の手がぬつと出てきた。

「それはそれとして、出す物を出しな」

「場末の強盗みたいですね」

「今回の事は全部お前のプラスになった筈だよ。それ以上何を貰うというんだい」

確かに得られたものはある。

「お前は新しく友人を得ただろう。アキにヒコジョーにネジ、それにジュンだ。ジュンはまだ幼いが、幼いお前には丁度良い」

相変わらずの千里眼だ。色街であんな事やこんな事をしなくて良かった。覗かれていたら今頃血祭りだったろう。

諦めて札束を出した。百万はあったと思う。いや百二十万はあったか。これを死んだ子の歳を数えるというのだろう。

翌日、昼過ぎまで寝ていてようやく目覚めた。

数日間、家を空けていたのに誰も何もいわない。これが噂の放任主義か！ 家庭用医学事典に『放任主義は子育ての放棄に過ぎない』と書かれているのに。

弟妹達は揃ってTVに齧り付いている。こいつらが羨ましい。涼しい場所で樂をしゃがって。

「何を観ているんだ？」

「兄上でしたか。この前話した『稲妻バロン刑事KKK』ですよ」
「今良いトコなんだ」

クライマックスの決闘シーンだろうか。

『喰らえ！ 毒虫攻撃アメリカシロヒトリ！』

TV画面一杯に毛虫の集団がアップになる。

「やったー。採用された」

「ツイてますね。兄上の名前で出した葉書が採用されましたよ」

ここ数日の善行の見返りとしてこの幸運を授かったらしい。人生なんてそんなものだ。

「毛虫嫌い！ 兄様なんてサイテー。だからこの前、日が悪いっていったのに」

妹から久々にかけられた言葉が「最低」か。よし、これでニヒリストになるまであと少しだ。

TVが更なる善行の見返りを伝える。

『今日採用された丹後市の春日波流君には、この必殺技のカードを百枚プレゼントだ』

どうやら毛虫のカードを百枚送りつけられるらしい。

弟二人はお腹を抱えて笑っている。

笑われたって良いのだ。泣かれるよりは幾万倍も。

ナツに逢いに行く。

育児室のドアに表札が掛かっている。『春日奈津（旧姓秋山）』

とある。気の早い奴だと思いながら、ちよつと嬉しい。

ほんの数日間逢わなかっただけなのに、もうずっしりと重い。

抱き上げて高い高いをしてみる。キャッキャッと声を出して笑える様になっていた。

「お土産を買ってきたよ」

そういつて、地下都市で購入した匂い袋をつかませた。赤ちゃん用にと匂いがきつくない物が売られていたのだ。

ナツは嬉しそうに、それを鼻に当てたり口に含んだりしている。

こうやって五感を成長させて行くのだろう。

ふと見れば子猫が部屋を闊歩している。これは問題ではないのか。「猫は衛生上どうなのですかね」

医師が応える。

「フユ様のご指示でこの前ネットとつながるテストを行ったのですが、その際にあれやこれやと普段いえない我が儘をいわれてしまいまして、それが表札とこの猫なのです」

ナツを寄越してくれたのは祖母だったのか。

「でも駄目なものなら駄目とはつきりおっしゃって頂いて結構ですよ」

「いえ、どうしても駄目な訳ではないのです。衛生管理は当方で行きますし、後は引つ掻き傷ができる程度でしょうか。それも目さえ避ければ逆に成長を促す効果もありますし、お互いに舐めたりじやれたりして、感応教育にはもってこいなのです」

医者の説得するのは諦めた。例の事典によれば『新婚夫婦の家庭でペットを買うのは好ましくありません。俗に子供を成す事が遅れるともいわれていますし、子供ができた場合、子供に全愛情を注ぐ事を疎外する可能性があります』と書かれていたのだが。

どうせすぐには子供を作る予定もないし、構わないだろう。

「何という名前にしたのですか？」

「キーマです」

「カレーの？」

「ええ、ナツ様が離乳食のキーマカレーをあまりお召し上がりにならないのです。離乳食ですから辛味はないのですが、具も細かくて消化し易く、いろんなスパイスの香りがしますし、感応教育には最適な食事です。そこでこの猫の名前をキーマにして、少しでも食べて貰おうという魂胆なのです」

本人が聞いているのだから、魂胆を喋っては台なしだろうに。

しかし、そんな名前にしては黒い猫だ。口元と足先だけ白くて、まるでソックスを履いている様だ。よちよち歩きの可愛い子猫で、二人並んで寝ている様は耐え難い程愛らしい。

ふと嫌な考えが脳裏をよぎった。

「この猫は雄ですか？」

「いえ、雌です」

良かった。雄だったらダストシュートに投げ捨てているところだ。たとえ獣であっても、彼女の傍らに男が寄り添うなんて耐えられない。

大学病院へ。

アキ君の容態を聞く。未だ重篤だが、命の危険はないとの事だ。何本も点滴が刺さっていて痛々しい。しかし、そのどれもが栄養補給のためであり、特別な処置ではないとか。

彼は彼自身が生み出したケミカルプログラムによって傷付いている。自分で解毒プログラムを施している筈だ。後は時間が過ぎるのを待てば良いのだろう。

ヒコジョー氏の個室に立ち寄る。

彼は僕を見て、済まなそうな表情をした。

「ハル君か。良くきてくれたね」

「散々怒られたらしいですね」

「ああ、人生始まって以来の長時間説教だったよ。体力的にも精神的にも効いたな」

「どんな説教だったのですか？」

彼は曇った顔つきで話し始める。

「先生がいうにはだな、テロと名乗るには、まず政府の転覆を目的としなくてはならないそうだ」

「成る程。今回の計画は『政府の方針を変更させるためのテロ』でしたからね」

「そう、そこがお気に召さなかったらしい。規模も小さ過ぎるといふんだ。同時多発的に、且つピンポイントで公共施設を狙ったものが好ましいらしい。民間に犠牲が出てはいけない。民衆の支持を得るために、巨悪に鉄槌を喰らわすものこそがテロなのだと」

「はあ」

「自らの退路を断つて、犯行者が犠牲になつてこそ美しいと」
「うゝん」

「それで、もつと綿密で、とんでもなく過激な計画を聴かされた」
「は？」

「先生が若い頃に計画したものらしい。極めて大規模な作戦だ」
嫌な予感がする。

「実行者十万余、被害者三十万余の大掛かりなもので、占拠する箇所は国会議事堂、軍施設、官庁、空港、放送局等。そして政治家、官僚を皆殺しにして新政府誕生を公表するそうだ」

「それはテロじゃなくクーデターでは？」

「その後、参加者は百万に増える。そして街々を統制下に敷き、全権を掌握すると、弾劾裁判を実施して、法的にもこの新しい政府が正しい事を証明させる」

「あの、もう結構です」

「先生はベッドの上でそんな空想をしていたんだな。高校生の頃、遣り場のない鬱憤を晴らそうと危ない妄想をしていたそうだ。まあ、考えるならこれぐらいの事は考えてみる、って事さ」

若い頃は誰でも過激だという事か。

彼は溜息まじりに続ける。

「テロとか正義とか信念とか、そんな事どうでもよくなってしまつて、もうすっかり牙を抜かれた気分だよ」

「世の中を良くしたいという思いは残して欲しいですね」

「それはある。だから親父と話をしてみたんだ」

「親父さんって何をなさっているんですか？」

「地方公務員さ。市役所で助役をやっている」

「助役といえば実質的に市政を取り仕切っている人ですよ」

「取り仕切るのではなくて調整しているんだろ。いろんな圧力団体の間に入つてね」

「それは大変そうだ」

「確かに胃を患つてるよ。潰瘍だそうだ」

「可哀想に」

「気の弱い人間がする仕事じゃないって事さ」

「それで何か良い案はありましたか？」

「ある。折衷案ともいうべきもので、我々の暮らす病院や施設に併設する形で小中学校を建設する案だよ。でも用地買収が大変だし、そんなに数が作れないのが難点みたいだ。建築業界からのリベートを期待している政治家は嫌がるだろうね」

「その案なら施設暮らしの子供達も楽に登校できそうですね」

「毎日は無理でも、体調の良い日には登校できるだろう。だから頑張って元気になるとモチベーションを高める効果もあるだろうし、子供達には良いんじゃないかな」

「実現できそうですか？」

「それが難しい。政治家を黙らせたとしても、クラッシーの子供達に不公平感が残るだろうね。地理的問題で、リアル为学校に行ける子と行けない子が出るのだから」

「最初はその案から始めて、徐々に数を増やせば良いではないですか」

「私もそういったんだ。でもそうできないのが政治の世界らしい」
「どうして？」

「リアル開発促進派はとにかく数多く作りたい。エリア尊重派は、そもそも一つも作らせたくない。結果、誰も折衷案を支持しないんだ」

「馬鹿馬鹿しい」

「全くだ。でもエリア尊重派にとっては絶対に譲れない理由もある。数的に有利なクラッシーとの差別をなくす事、それを目的として存在している団体だからね。少しでも派内の人々に不公平感を持たせる事ができないのさ。一生ベッドから離れられない人からすれば、リアル为学校なんて税金の無駄遣いにしか思えないのかも知れない」
「折衷案では双方に不公平感が生まれるんですね」

「でも、よりベターな事には変わらない。折衷案を採用しつつ、エ

リアの充実も図ればベストなんだろうけれど」

「後はお金ですね」

「そう、それが悩みどころさ」

もう調整で解決できる話ではない。確かに胃を痛めそうだ。

「これは難問ですね。時間が掛かりそうだ」

「どうせ時間が掛かるなら、腰を据えて、もつと長期的なビジョンを持つ事にしたんだ」

「それは？」

「政治家になりたいと思っている。まだ先の話だけれどね」

それは難しいだろう。助役の子というだけでは誰も支持しないし、理想だけで票は得られないのが現実だ。巨大な圧力団体の陣門に下つてでも、票田を確保しなくては当選できない。それに……

「政治家を目指すにしては、今回の計画はかなり甘かったんじゃないですか？」

「そういわれると耳が痛い。結局、私はいつまで経っても坊ちゃんで甘ちゃんなのさ。でもそれを自覚できた。これは成長じゃないかな」

意外とお調子者なのだろうか。あの夜の印象とはかなり違う。

間抜けでお調子者の政治家は少くない。政治家になるために必要な要素なのかと思う程だ。尊敬はできなくても大衆に好かれる類の政治家ならば目指せるかも知れない。

「兵器乗っ取りの連中は海の上らしいですね」

「ぶーぶーいいながら船に乗ったよ。今朝、写真が送られてきたんだ。見てみるかい？」

それは面白そうだ。

高校生二人は、日に焼けて赤くなった顔で満面の笑みを浮かべている。ヘーハチ校長はいつになく凛々しく見える。夕日をバックに舐先でポーズを決めている。

「彼らはここずっとエリアにつながりっぱなしで、食事も摂らず青白い顔をしていたからね。久々に身体を動かして気持ち良いのだろ

う」

「兵器の乗っ取りって、そんなに大変な作業なんですか？」

「易々と乗っ取れるのだったら、兵器として成り立たないだろう。

彼らは自信満々だった。でも今は自分の未熟さを実感しているだろうね」

「中心人物だった人が何をいつているんですか」

「三つ計画して、どれか一つは成功すると思っていたんだ。もう責めないでくれよ」

今後、たつぷりとイジメてやろう。僕にはその権利がある。

「彼らは当分海上暮らしですか？」

「当分というか、かなり長期じゃないかな。日本のEEZを一周するらしいから」

八重山諸島を経由して、沖ノ鳥島、北方四島を周ってくるのか。

それは大変な船旅だ。新学期が始まっても帰ってこれないだろう。同情を禁じ得ない。

新学期。

始業式は行われない。生徒数がたった二十九名の学校でそんな大仰な儀式は不要だ。先生だって実は一人しかないのだ。たとえ始業式をやってみても、テツタ先生扮する校長先生が偉そうに話し出した時点で吹き出してしまっただろう。

授業前の二十分間、夏休みの出来事を語り合う。皆、海外へ行つたとか、泳いだとか、デートしたとか、実に楽しそうに話している。僕とて滅多にできない経験をしたのだ。面白可笑しく話す準備はできている。しかし話す相手がいないではないか。同級生達に、テロとか婚約者の幼児と楽しく過ごしたなんて話ができるものか。結局「どう過ごしたの？」と聞かれても「神社が忙しくて、それを手伝っていただけだよ」と応えるしかない。

いや、話ができる存在が一人いる。

「アナタ」

「やめなさいって」

「ダンナサマ」

「それも駄目ですよ」

「じゃあ、サマーダンナー」

「ちよつとカツコイイけれど、意味不明です」

「ダンサマナー」

「僕は何を召還^{サモニング}すれば良いんだ？」

「あたしかな」

「ほーお、そりや便利だ。で、どんな呪文で現れてくれるんだ？」

「それはですね。右に三回まわって、左に四回まわって『奥様サイ
コー美人で一生愛してるワン』って叫ぶの。120デシベルで」

「できません」

「どうして？ 言って欲しいのに・・・」

「はいはい。泣き真似は通用しませんよ。理由は簡単です。僕は1
20デシベルの大声が出せませんからね」

「何故？」

「僕がジェット機とかレーシングカーじゃないからです」

「あたしも駄目な男に惚れたもんだわ」

最近の育児室にはTVが設置されたらしい。変な言い回しばかり
憶えて困りものだ。ずっとこんな感じだから、真面目な話も愛を語
り合う事も不可能だ。

アキ君はいない。先生も説明しないし誰も何もいわない。級友が
増えたり減ったりするのは珍しくないし、聞かれても個人情報の保
護義務があつて応えられないのだ。

でも僕は知っている。身内としての当然の権利だ。

彼は退院し、今は父親と一緒にいる。

どんな親子の会話をしているのか覗いてみたいものだ。喧嘩をし
たり、笑い合ったりして欲しい。そして一日も早い復学を願っ
ている。僕の数少ない友人なのだから。

第五章

十月になって、弊社に耳を疑う様な依頼があった。

三組の神前結婚式の依頼である。それ自体は珍しいものでもなく、弊社の貴重な収入源だ。珍しいのは顔振れである。

一組はジュン君のお姉さんとチンピラA、つまり兄貴と呼ばれていた奴である。

もう一組はネジさんの知り合いのチンペーさんと、僕がカジノで知り合ったおばさんだ。彼女が死んだと思っていた人物がチン坊さんであり、おばさんにとって、かつての恋人だったという話らしい。あんな奇妙なケミカルシヨップで買い物をした人物は一人しかいなかったのだ。

最後の一組は、何と、ネジさんその人とあのソムリエールさんである。中津総支配人をお願いしていたのはその事だったのかと得心した。ネジさんの別れ際の台詞に感心させられたが、何の事はない、単なる事実をいったに過ぎなかったのだ。

この話に狂喜乱舞したのは祖母である。

「だから結婚式場を作っておこうといていたんだ。あの坊主は出世したから、黙っていても五百人は集まってしまふ」

「今から建てられませんか、どうすべきか悩ましいですな」と父。

母は落ち着いて意見を述べる。

「今からできる事を考えましょう。雨が降らない事を前提に、野外で行えばどうでしょうか」

この人が降らないといえ降らないのだろう。

僕も続けて意見する。

「皆さん、その議論をする前に予算は聞いたのですか？」

それはそうだ、と父が問い合わせてみた。

「・・・・・・・・・・」

「父上、どうかなさいましたか？」

「金は払わない、との事だ」

「まさか！」

全員が声を揃えた。

「何でも『ハルに貸しがある』とかで、無料にしろと」

「冗談じゃないよ！ あのクソ坊主」

祖母が怒っている。こんなに怖い事があるうか。

「ハル！ 説明しなさい」

父母が目を吊り上げて叫んだ。

やむなく事情を説明する。ネジさんに人捜しを手伝って貰った事、その報酬として彼がもう一度、京地下を巡る旅をする程度の金銭を払う約束をした事を。

まず、父が噛みついてくる。

「お前が悪い。細かな事情はどうあれ、約束したなら対価を払うべきだった」

「そうおっしゃいますが、乞食坊主の類だと思っていたネジさんが大僧正と知って、それでも十万程度のお金を欲しがるとは思わなかったんです」

祖母が畳みかける。

「十万が百万でも構わなかったんだよ。その程度の小銭を握らせておけば、今回の言い掛かりはなかったんだ。一体幾らの損害になるか……」

皆の視線が痛い。

母が意を決して切り出す。

「できるだけ回収しましょう。きっとできます」
母のポジティブさに救われた。

数日して、参加者名簿が送られてきた。

親類縁者が三十名程。その他がざっと千名。内、賓客が十名程度だ。三組の拳式にしては親類縁者が少ないが、その他の人数が多過

ぎる。それらの殆どが京阪からで、バスを連ねてやってくるそうだ。祖母の目が光る。

「これはチャンスだよ。うちの嫁さんがいった通りだ。回収できる。何か良からぬ事を思い付いたらしい。僕としては、余りに無体な事まではさせられない。」

「宴席を設けるとしても、千名分は無理ですね」

「そりゃ無理だ。親類縁者と賓客だけ上がらせて、他は我慢して貰うさ」

「それは良いとしても四十名ですよ。拝殿に座って頂く事は可能ですが、そこで宴会をする訳には行きませんし」

「宴席は社務所に設ける。それ以外の人は立たせておく」

「来客はお歳を召した方も多いですし、立たせておくなら医者の手配が必要では？」

「嫌ならさつさと帰って貰うさ。どうせ坊主ばかりだよ」

「宴席の料理はどうしましょう。料亭にでも頼みますか」

「馬鹿いつてんじゃないよ。近所の定食屋で充分さ。海老フライ定食でも並べて終わりにする」

「まあ、海老フライで良いのでしたら、私が作りますよ」

母が明るく応えている。

もう、何もいわない方が良さそうだ。

それから境内の大改修が行われた。社務所の襖を取り払い、宴会会場に仕立てる。これができるのが日本建築の素晴らしさだ。

何故か境内を竹垣で囲み、門を作って机と椅子を設置する。駐車場の看板を外し、新たに『バス駐車料金五万円』『一般の参拝者の方は三時までご遠慮下さい』と書かれた看板を立てる。

祖母は地元警察へ打ち合わせに行った。何を打ち合わせる必要があるのだろうか？

当日。

大型バスが二十数台連なってやってきた。交通整理に借り出され

た警察官が忙しくしている。ホイッスルと怒号が飛び交う。

「駐車料金がそんなに高いなんて聞いてないぞ」

「そっちの都合なぞ知らんわ。嫌なら他へ行け」

運転手と警官が揉めている。バスは一旦他へ回り、諦めたのかやっぱりここへきた。

交通会社としても、乗っている僧侶の方々を遠くから歩かせる訳にはいかなかったらしい。百万以上の出費で大赤字だろう。

不幸はまだ続く。バスを降りた坊さん達の群れは、竹垣に囲まれた境内に入れないでいる。その入り口には受付が二カ所あって、一方は婚姻のご祝儀の受付で、残りは入場料の受付である。『入場料五千円』と大きく表示されている。

大胆にも、一人の坊主が竹垣を越えようとしている。

警官が素晴らしい手つきで防犯ボールを投げつけた。

ボールは後頭部に当たり、蛍光塗料が丸い模様を作る。

「家宅不法侵入罪だ」と取り押さえられ、小人宇宙人よろしく両脇を抱えられて退場して行った。

祖母が不敵に笑う。

「一人は出ると思ったよ。坊主はケチなのが多いからね」

その様子を見て、袈裟姿の集団はしぶしぶ手続きを始めた。

親類縁者と賓客の方々には裏手から境内に入って頂き、幾つかの仮設テントとパイプ椅子で構成された控え室にて休憩をとって貰う。父と弟妹達は式と宴席の準備に忙しく、接客は母と祖母がしている。

女性方は着付けに忙しいみたいだ。そっちは母の担当である。袴姿のチンピラ兄貴とチンペーさんは、緊張した面持ちで座っている。チンペーさんってこんな人だったのか。海水浴場で泥酔して溺死してしまった伝説のボクサーに似ている。

竹垣の向こうの様子を見て、ネジさんがいう。

「流石はフユ大姉やな。入場料は十万にでもしてやったら良いのに」

「そんなに手持ちがある筈もない。連中は金を払う事をしないからね。ところで『大姉』はやめろ」

ネジさんをアキ君と引き合わせた。

「おお君やな。儂を殺そうとしたのは」

「よく死ななかったね」

「めでたい日に縁起でもない事言いなや」

「いい出したのはソツチでしょ」

「まあそうやけど。しかし、ちっこいのう」

「ちっこいいうな。これから大きくなるんだ。まだ十二歳だから」

ネジさんは大きく溜息を吐いた。

アキ君は「結婚おめでとう」との言葉を残し、辞した。

代わって僕が喋る。

「彼が十二歳だっていつてませんでしたか」

「いや聞いとつたが、聞くと見るとは大違いやな。改めて会つと、まず落ち込まずにはおれんわい」

「彼に不幸を負わせた事が？」

「そうやな。あんな少年が悩まなくてはならん世の中を作つてしもつた事にや。丁度良い機会や。今日は面白い連中も来とるさかい、何とかできんやろか」

賓客の事が。名簿では高級僧侶の他、近畿州と山陰州の知事、丹後市の市長、地方経団連のお偉いさん達がきている。

医師に抱かれてナツがきた。彼女はもう喋れる様になりつつある。

「ネジちゃ、おめちょ」

「おめでとうというところのかいな。有難う。これは可愛い赤ちゃんやな。君の子か？」

「そんな訳ないでしょ。でもネジさんもご存じの筈ですよ」

「誰や」

「僕達の女神じゃないですか」

「おお。え！ほー。嘔吐け」

「嘘ではありません。僕は嘘を吐けないんです」

医師に代わって僕が抱く。

「彼女には諸事情がありまして、リアルではこの姿なんです」

「ネジげんちちよでよか。よめちやもちやなびじ!」

「先生、通訳をお願いします」

医師が手帳をひきながら答える。

「ええと、約30%の確率で『ネジさん、現地が少なくて良かった。読め茶を! おもちやはビジーだ』でしょうか」

「どこが30%やねん」

「ぶー」とナツ。

「今のは100%の確率で『それは違う』ですね」

三人で大笑いした。ナツも「キヤツキヤツ」と楽しそうだ。祖母が僕からナツを取り上げる。

「この子と少し話をするよ」

そういうとどこかへ連れ去ってしまった。まるで女衞だ。

入れ替わりでへーハチ校長がくる。

「あんたがハルを助けてくれたネジさんか。還暦と聞いとったが若いのう。結婚おめでとうさん」

「かたじけない」

そう言葉を交わしてから、黙して見詰め合っている。この二人には何か通じるものがありそうだ。

へーハチ校長がポツと頬を赤らめる。それに応じてネジさんはモジモジ出した。

どうやら何かが通じ合ったらしい。

突如、ネジさんが叫ぶ。

「そもさん!」

「説破!」と校長。

「小僧戯れに問う『猫に仏性ありや』と。和尚答えて曰く『無』也。これ如何」

これは有名な禅問答の捩りだろうか。「犬に仏性があるか」と聞かれた高僧が「ない」と答えた話があつて、その真意を考えよと言ふヤツだ。その犬を猫に置き換えて「何故猫に仏性がないのか」その理由を問うているのだろう。

校長は額に汗して唸っている。

ナツが連れてきた子猫のキーマが近くにきている。ニャーと一鳴きしてどこへ去った。

校長が閃いた様に答える。

「無しと自ら答ふるものなりや。ニャーって」
苦し紛れの答えだ。

「愚かなり。真意を答えよ」

ネジさんの追求は厳しいが、校長もただの人ではない。

「海じゃ。真意は海にある」

「成る程『海』か！ うゝむ、これは深い答えや。いや参りました」

校長は「ホッホッホッ」と笑いながら去って行つた。

「ハルよ。お前の周りには凄い人達が集まっとるのう」

「どこにですか？」

僕には全く理解できない。

そうしているうちに、挙式の準備が整う。

数々の御贄が備えられた祭壇を前にして、三組のカップルが親類縁者や賓客達に囲まれて鎮と座っている。坊主軍団は拝殿の中に入る事を許されず、早くも疲れた面持ちで立たされている。狭い境内に千人の和尚連が立錫の余地なく詰め込まれていて、人いきれでスキンヘッドも曇りがちだ。

宮司たる父が大仰な装束に冠を被り、大幣を持って現れた。

弟達がタイミング良く雅楽の再生ボタンを押す。

これから祝詞の奏上が始まるのだが、お経と違って祝詞はその意味が分かり易い。それが良いという人もいれば、有難味が少ないという人もいて悩ましいところだ。

父は祭壇に一礼し、振り返って一礼して、もう一度祭壇に向かう。そして、シヤカシヤカと大幣を左右に振り出す。

「かけまくも、かしこきとようけのおおみかみのおおまえに、かしこみかしこみもをさく。このたびさんくみのこんいんのぎをとりおこなうも、じかんがないのでくいつくばーじょんでおこないたまふことゆるしたまへ・・・」

皆がポカンとした表情になる。笑って良いところなのか、笑ってはいけないのか判断が難しい。辛い十分間だったと思う。

祝詞が終わると竹垣が取り払われ、代わりに露店が並べられた。

押し込められていた坊主衆は外へ出ようと我先に飛び出して行く。そして、苦痛から解放された喜びも手伝って、多少浮かれた気分で露店を覗く。祖母の手による演出である。

ペットボトルのお茶千円、精進好み焼き千円、精進タコ焼き千円と掲示されている。確かに暴利だが、喉も渴いているし、食事も摂っていない者達ばかりである。競う様に買い出した。

「この好み焼きは何が入っているのですか？」

「キャベツだね。精進料理だから。あとは粉と水、それにソースか」
しぶしぶ千円を差し出す。

「割り箸を頂けますか」

「割り箸も千円になります」

僧侶は泣きそうな顔をして引き上げる。手づかみで好み焼きを食べる僧侶の姿は、生涯忘れられないだろう。でも蛸なしタコ焼きよりはマシかも知れない。そっちは爪楊枝一本が千円なのだから。

社務所では宴席の準備ができている。

かなり思い切った趣向だ。お膳は四十人分もないので数名に一つ、振舞いは銀色のお盆に乗ったレタスと海老フライだけ。飲み物は子供用にプラスチックと、2Lペットボトルに入った甲種焼酎がでんと置かれているのみである。

親戚縁者の方々は目を丸くしていた。喜んでいたのは若干一名の

みである。賓客達は流石に肝が据わっているらしく、ガハハと笑いながら焼酎をあおっている。

そんな折、一つの影が音もなく祖母の席に近寄る。

「お祖母様、首尾をご報告申し上げます」

妹のソラである。今日は細作の役目をしているらしい。

「報告せよ」

「駐車料金百万円、入場料五百万円、屋台の売り上げ百五十万です」

「利益は？」

「約六百万かと」

「警官達は袖の下を要求しなかったかい」

「お祖母様の読み通りでした。皆面白かったと喜んで帰りました」

「そうだろうとも。で、結婚祝儀の総計の方は」

「これが驚くべき数字です。約一億でした」

「千人が十万づつ包んだ計算かい。何て事だ」

祖母の目が勝負師のそれに変わる。

「ネジ。お前らの祝儀、半分は置いて行くんだろっね」

「何をおっしゃいますやら。一銭も置いて帰りまへんで。これはウ

チらが取るんやない。連れの二組にプレゼントするんですわ」

「何を善人振っているんだ。この欲深坊主が」

「そんなら儂のココロをちょちよいと読んでみてや」

「ええい、お前だけは若い頃から読めやしない。この特異体質めが」

そんなに昔から知り合いだったのか。今後、僕が知り合う人の全員が既に祖母の知己だと思ふ事にしよう。

「酷いいわれ様や。どっちが特異や」

「こんな事なら入場料を一万にしておくべきだったよ」

「だからいいましたやろ。なんぼでもアイツらから取ればエエって祖母と対等に渡り合う人を始めて見た。僧侶なのに神前で挙式を行っ程の人だから、心臓に剛毛がびっしり生えていても不思議ではない。

「もう分かったよ。その代わり、これからする事を手伝いなさい」

「何をするのか知らんけど、お手伝いしましょ」

祖母が手招きして、ネジさんと政治家達を自分の執務室へ呼ぶ。当然僕も同行した。これ以上何もさせられない。

丹後市長が口火を切る。

「また何かご依頼を承るのでしょね」

「その事は後回しです。皆さん適当に座りなさい。今から重大な発表をします」

どうやら祖母は政治家達ともつながりがあるみたいだ。そういえば、選挙になる度に忙しく動き回っていた。票集めに奔走していたのだらう。

「私は今日をもって我が社の斎女を引退します」

「おお」と賓客達。

「そして、この子が私の後を継ぎます」

奥から医師に抱かれてナツが登場してきた。

「ちやい。ばぶー」

一斉に騒めく。当然の反応だ。どこへ連れて行っただかと思えば、こんな茶番を仕込んでいたとは。

「この子は形は0歳でも頭はお前達より大人だよ。現に、半世紀かけても適わなかった国家事業を一人で完遂させている。自分達の0歳の時を思い出してみなさい。何もできなかっただらう」

それは当たり前だ。というか0歳の時の事なんて誰も憶えていない。

「この子が表で斎女をして、私は隠居として裏で院政をひきます」

結局は同じか。

「院政とは法皇にでもなられた様な口振りですな。具体的には何をなさるのですか？」

山陰州知事が尋ねた。祖母に嫌味を含んだ表現をするなんて、気骨のある人物だ。

「今日のところは通訳だね。我が社に新斎女が誕生したんだ。その

祝いを皆さんから貰おうと思ってね」

茶番劇場の始まりか。

ナツが喋り出す。

「えびちよ。ちよ、えびちよう。ちやるちやるちよーちゅちよ」

「最近の州の政策のうち、小中学校をリアル世界に建築する法案に一部改正を求める」

「えびちゅき。ちゃべちやいな。ちゅこちちやけ」

「立地場所を病院・施設に併設する事とし、クラスA・Bの子らも楽に登校できる様、配慮する事」

「えびふりや。ちゃべるの」

「更に、廃棄される予定の旧エリアのプラットホームを、全クラスの子供達に解放し、彼らの自治の元に自由に活用させる事、だそうだ」

「最後の方は我々でも聞き取れたのですが」

丹後市長が申し訳なさそうにいった。

「頭の悪い奴だね。今いつている事を訳したんじゃないんだよ。予め聞いておいた事を話したんだ」

政治家達は馬鹿らしいと嘲笑している。

「そうかい。じゃあ次期選挙での票集めは諦めるんだね。今後はこの子に票集めを依頼しなきゃならない立場だって、分かっているのかい？ しかも対立候補を見付けてくるとしよう。どこぞの女性二ユースキャスターでも呼ぶとするかね。さあ、文句があるならこの子にいつておくれ」

数々の陳情を受けている連中だ。祖母が票田を握っているにしても、唯々諸々と聞いてはいられないだろう。言葉上手にはぐらかすのが常だ。しかし、今回は形だけではあっても乳幼児が相手である。そんな手合いに駆け引きは通じない。意外と上手い手なのかも知れない。

ネジさんも援護する。

「僕も手伝うかの。京都や大阪で運動でも起こすかな」
皆が勘弁してくれと頭を振った。

「確かにそう言う意見もあると聞き及んでいますし、その方向で協議してみましよう」

山陰州知事がそう確約して解散となった。

結局、ヒコジョー氏達の願いは叶えられたが、どうも納得できない。ナツはだしに使われるし、そもそも手段が不誠実だ。

「お祖母様、お話ししたい事があります」

「いわれなくても分かっているさ。票をチラつかせてたりして汚い
といたいのだろうか？」

「その通りです」

「相反する意見を戦わせてみても結論は出ない。そんな場合には、
双方に無関係な者の意見に落ち着くものさ。政治家達だって考え倦
ねていたんだから、背中を押してやってただけだよ」

「僕には『考え倦ねて、それでも結論を導き出す事』が重要だと思
われますが」

「そう考えるお前は正しい。でも今回に限っては結論が出なかった
だろう。だから私が無理矢理動かした、という訳さ」

それでも納得できない。僕達の苦勞が意味を失くしてしまう。で
も、それで幸せになれる人がいるなら、それで良しとすべきなのだ
ろう。僕がアキ君に話した様に。

ナツを奪い返し、取り敢えず残り物のエビフライを食べさせた。
小さく切って『ちやるちやるちょーちゅ』を付けて口に入れる。

小さな乳歯で噛み砕きながら、満面の笑みを見せる。

「うま、うま」

「美味しいかい。お前が斎女だってさ。何をいい出すんだろうね、
あの人は」

「もつちよ」

「もつと食べるのかい。良いとも。しかし斎女ならこの杜を守らなきゃいけないね」

「そうだよ」

祖母が夫婦の間に割って入った。

「あの施設にいる必要はもうないんだ。だったらここで暮らすさ。家族としてね」

晴天の霹靂とは、正しくこの事だ。

「キヤー、この子ウチの子になるの？」

近くで会話を聞いていた母がナツを奪い取る。抱き締めてグルグル回って、頬を擦り合わせている。ここまで喜んで貰えれば本望だ。ナツ本人もそう感じているのだろう。「キヤツキヤツ」と嬉しそうにしている。

祖母が孫達を集合させる。

「ソラ、リク、カイ、お前達のお姉さんだよ。ご挨拶しなさい」

「ええーっ」

見事なユニゾンだ。そして生暖かい視線で僕を睨んでいる。弟妹達よ。兄は変態ではないのだよ。けして信じて貰えまいが。いや信じて貰うしかないが。

父はこの騒ぎに乗り遅れて、十歩程離れた位置で口をパクパクさせている。母が近寄ってナツを見せると、デレデレと締まりのない顔で微笑み出した。この人を陥落させるのは簡単だ。赤ちゃんに『赤子の手をひねる様に』扱われる五十男。新しい異名の誕生である。

最後は全員で記念写真を撮った。

三組の新婚夫婦を中央に据えて、全員の顔が付きそうなくらいに寄り添ってフレームに納まる。僕達一家も入っている。当然ナツも。数枚のシヨットの中で、偶然、キーマが横切ったものがあった。

この一枚を写真立てに入れて机に飾るとしよう。

ラベルのない缶詰と並べて。

了

第五章（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。クスリと笑って頂けたでしょうか？ 暇潰しになりましたでしょうか？ どんな事でも結構ですので、感想をお待ちしています。また本作のスピノフを2本アップする予定です。ハルの父の青春譚とネジさんの少年時代のお話。そちらの方もヨロシクです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7098o/>

異形の子ら

2010年11月18日16時40分発行